

斗B-74

震災豫防調査會編纂

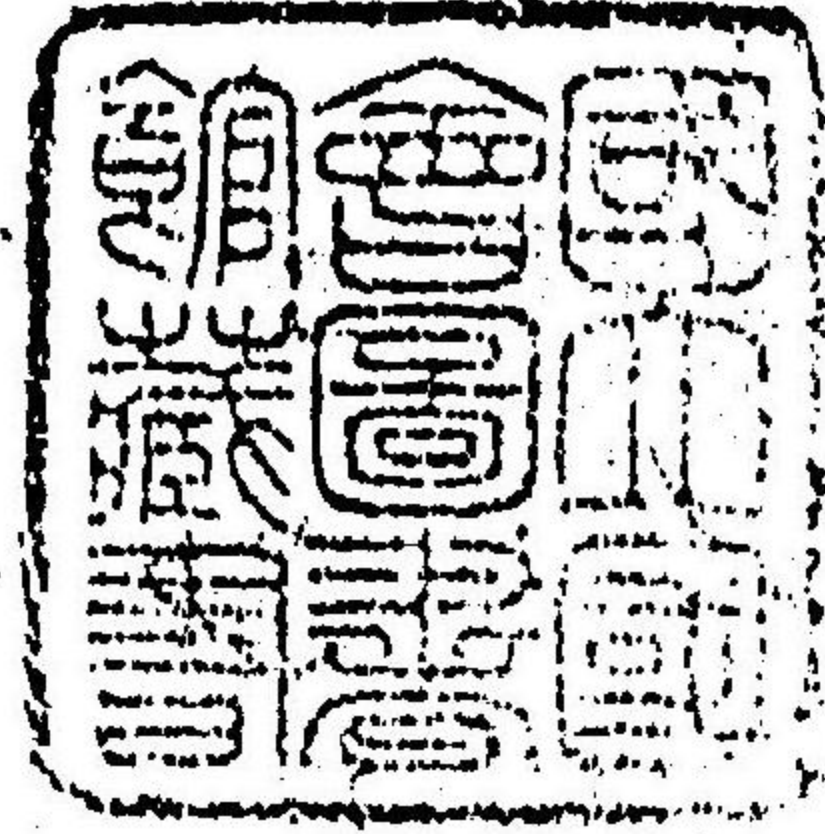
上卷

大日本地震史料

東京

丸善株式會社

453.2  
S:498d



大日本  
地震史  
料蒐集  
ノ事業  
完成  
ヲ告  
ク因  
テ之  
ヲ編纂  
シテ報  
告第  
四十六  
號ト爲  
シ謹  
テ進  
達ス



221946

大日本地震史料蒐集ノ事業完成ヲ告ク因テ之  
ヲ編纂シテ報告第四十六號ト爲シ謹テ進達ス

明治三十六年六月

震災豫防調査會長 工學博士眞野文二

文部大臣理學博士男爵菊池大麓殿

大日本地震史料蒐集ノ事業ハ委員故關谷理學博士ノ創意ニ出テ本會調査事業ノ一トシテ去明治二十六年七月以降田山實ニ囑託シテ材料ノ蒐集ニ從事セシメ爾來同委員ハ銳意熱心以テ此事業ヲ督勵セラレシカ同二十九年一月不幸ニシテ易役セラレタリ因テ本員之ヲ繼承シテ其監督ノ任ニ膺リ昨三十五年五月ヲ以テ完成ヲ告クルニ至レリ

本書收ムル所ハ允恭天皇即位五年(西曆四百十六年)ヨリ慶應三年(西曆千八百六十七年)ニ至ルマテ千四百五十一年間ノ日本全國(臺灣及琉球ヲ除ク)ニ關スル地震記録ニシテ約四百六十種ノ書類ヨリ引用蒐集セルモノニ係レリ而シテ本書ハ水ク地震學上ノ重寶トナルヘキモノニシテ實ニ故關谷委員ノ紀念書ト稱スヘキモノトス但同委員ノ生前ニ於テ大成ヲ見ルニ至ラザリシハ甚タ遺憾ニ堪ヘサル所ナリ今本書ヲ提出スルニ方リ聊其顛末ヲ略記シ以テ之ヲ報告ス

明治三十六年五月二十八日

委員 理學博士 大森房吉

震災豫防調査會長 工學博士 眞野文二殿

大日本地震史料蒐集終結ニ付上申書

大日本地震史料蒐集ノコトハ、去明治二十六年七月ヨリ本會ノ一事業トシテ、故關谷委員ノ監督ノ下ニ創置セラレ、同氏易役ノ後ハ、大森委員監督シテ事業ヲ繼續セラレタリ、而シテ終始本員ヲシテ蒐集ノ任ニ膺ラシメラレキ、其間約十年ノ星霜ヲ閱シ、採蒐シタル材料ハ積テ二十二冊、二千〇五十六枚ノ多キニ及ベリ、然レドモ載籍ニ缺存アリ、孔壁ノ遺書、蓋、亦世ニ尠シトセズ、未ダ之ヲ以テ古今ノ地震ヲ網羅シタリト謂フベカラズト雖ドモ、討査ヲ終リシ時代ハ一千四百五十餘年ニ涉リ、大小地震ノ總數約二千ヲ得タリ、猶遺リタルヲ拾ヒ漏レタルヲ補ハ、大海ノ遺珠固ヨリ少ナカラザルベケレド、一旦緒ニ就ケルヲ期トシ、茲ニコノ事業ヲ終結セントス、因テ今本書全部ヲ整理シ、之ヲ呈出スルニ臨ミ、其内容ニ就テ聊カ所感ヲ陳述スベシ、

地震ト記録 記録ノ存否ハ、地震ノ有無ニ影響シ、記録ノ完全セル時代ハ、地震モ隨テ明瞭ニ記サルタレド、之ニ反シタル場合ハ、必ず其傳ヲ失ヘルヲ例トセリ、本書中多ク京都地震ノ記載セラレタルハ、主トシテ其地方ノ記録ノ比較上完存セルヲ以テナリ、天正十八年以後、江戸

ノ地震ニ於ルモ亦然リトナス、

地震ト國別 記録ノ存セザル地方ハ、地震ノ傳モ失ヘリト雖ドモ、強震以上ノ震災ハ、其震源地ヲ距ルコト或距離マデハ、總テ感ズルモノナレバ、學理上ヨリ之ヲ推定スルハ當然ノコトナルベシ、殊ニ甲丙兩國ノ地震ニ、ソノ中間ナル乙國ノ感ゼザルノ理ナケレバ、假令記傳ヲ失ヒタリトモ、其國名ヲ掲グルハ至當ノ業ナルベケレド、カクテハ研究ニ涉リ、史料トシテハ妥當ヲ缺クベキ嫌ヒアルヲ以テ、本書ハ明文ノ見ユルモノ、ミヲ掲ゲ、其他ハ略シテ讀者ノ研鑽ニ任セタリ、

地震ト國名 國名ハ奥羽地方ノ、今日ハ七箇國ニ、蝦夷ハ北海道十一箇國ニ分割セラレタレバ、右ニ從テ區別シタレド、單ニ陸奥又ハ出羽ト記シ、或ハ西蝦夷ナドト有テ、明ニ何國ト定メ難キモノハ、姑ク舊名ニ從ヘリ、且畿内、關東、九州ト漫稱セルモノモ、依然舊ニ仍リタリ、

地震ト時刻 記録ニヨリテ時刻ノ書キ様一定セズ、蓋、正確ナル時計ノナキ時代ニ於テ、各其推測ニ任セテ之ヲ記載シタルモノナレバ萬々已ムヲ得ザルコトナリ、故ニ同一地震ニテ甲ハ一日ニ記シ、乙ハ二日ニ掲ゲタル類頗ル多シ、然レドモ當時ノ慣例ハ、丑刻ヲ以テ晝夜ヲ區別セル

定メナレバ、本書モ右ニ基キ、丑刻以前ハ前日ニ掲ゲ、其以後ハ翌日ニ載セタリ、而シテ右ノ場合ニハ、必ず説明ヲ附シテ注意ヲ促ガセリ、

地震ノ大小 人畜死傷シ、家屋傾倒シタルモノヲ大トシ、否ラザルモノヲ小トセリ、而シテ同地方ノ地震ニ、甲ハ大地震ト記シ乙ハ單ニ地震ト書シ、及ビ甲乙二書共ニ大地震ト記シタルモノハ、普通ノ小震ト區別センガ爲ニ、假ニ強震ト認め、地強ク震フ、或ハ地震稍強シト記シタリ、地震ノ區別 安政元年十一月四日、五日ノ大震ハ、其畿内東國ノモノト、九州四國ノモノトハ、全ク別震ナリ、然レドモ諸記録ハ均一ニ記載シテ分掲シ難キヲ以テ、今姑ク合叙シタリ、其他地方ヲ異ニシテ同日ニ二震アリタルモノハ、各々別掲セリ、

餘震 餘震ハ強震以上ハ、必ず續發スルモノナリ、故ニ強震或ハ大震ノ下ニ合叙シタリ、海嘯ト噴火 海嘯噴火ノ地震ト關連セルモノハ、本書之ヲ收メ、否ラザルモノハ除キタリ、

本書ノ體裁 體裁ハ東京帝國大學出版ノ大日本編年史料ニ准據シ、各地震ノ首條ニ綱文ヲ附シテ約說セリ、

本書ト編年史料 本書ハ主トシテ編年史料ノ地震記事ヲ抄

録シ、更ニ他書ヲ涉獵シテ、其漏レタルヲ増補シ、史料ノ缺ケタル年代ハ記録ニ就テ検討シタリ、

本書ト記録新寫 本書ニ引證シタル記録中、有益ノモノニテ、定本トシテ本會ニ保存セラレンコトヲ欲スルモノハ、別ニ之ヲ騰寫セシメタリ、西肥島原大礮開録、島原山燒山水高波一件、淺間山燒記録、谷陵記、弘列筆記、大島山火記等ハ即是ナリ、

以上ノ數項ハ、本書ノ凡例トシテ、且本書ヲ繕ク人ノ注意トシテ、必要ト認めラル、ヲ以テ、謹テ條録シテ剝覽ニ供セリ、

右申上ス

明治三十五年八月二十五日

地震史料蒐集囑託員

田山實

震災豫防調査會長工學博士辰野金吾殿

\* \* \*

# 大日本地震史料

## 目 錄

卷之一	允恭天皇五年	自一頁	至五二頁
卷之二	昌泰元年	自五三頁	至一〇三頁
卷之三	正平十三年	自一〇三頁	至一四三頁
卷之四	明應元年	自一四五頁	至一八五頁
卷之五	慶長元年	自一八七頁	至三三八頁
卷之六	慶安元年	自三三九頁	至三六六頁
卷之七	延寶元年	自三六七頁	至三三〇頁
卷之八	寶永四年十一月	自三三一頁	至三九〇頁
卷之九	天明三年七月	自三九一頁	至四四四頁
卷之十	寬政三年三月	自四四五頁	至五三三頁
卷之十一	天保元年七月	自五三三頁	至六〇六頁
以上甲卷	天保元年七月	自六〇六頁	至十四年三月

\*

# 大日本地震史料

## 引用書卷別目錄 (初出版)

卷之一  
 日本書紀  
 類聚國史  
 續日本紀  
 日本後紀  
 續日本後紀  
 文德實錄  
 三代實錄

卷之二  
 日本紀略  
 扶桑略記  
 真信公記  
 扶桑略記裏書  
 吏部玉記  
 康富記  
 改元勘文部類  
 和漢合符  
 朝世紀  
 本

引用書卷別目錄

範圍記  
 春記  
 如是院年代記  
 百練抄  
 年代記殘編  
 十三代要略  
 榮花物語  
 諸法要略抄  
 中右記  
 長秋記  
 實能記  
 台記  
 重憲記  
 山槐記  
 兵範記  
 東鑑  
 玉海  
 明月記  
 仲資王記  
 東鑑脫漏  
 一代要記  
 帝王編年記  
 外記日記

吉嶺記  
 續史愚抄  
 異本塔寺長帳  
 武家年代記  
 圓太曆  
 皇代記  
 塔寺八幡宮長帳  
 續本廟通鑑  
 參考太平記  
 神明鏡  
 櫻雲記  
 皇年代私記  
 師守記  
 鶴岡社務記錄  
 皇年代略記  
 祇園執行日記  
 天正本太平記  
 大日本史  
 醍醐地藏院日記  
 愚管記  
 卷之三  
 愚管記

卷之一	日本書紀	卷之十一	吉嶺記
卷之二	類聚國史	卷之十二	續史愚抄
卷之三	續日本紀	卷之十三	異本塔寺長帳
卷之四	日本後紀	卷之十四	武家年代記
卷之五	續日本後紀	卷之十五	圓太曆
卷之六	文德實錄	卷之十六	皇代記
卷之七	三代實錄	卷之十七	塔寺八幡宮長帳
卷之八	日本紀略	卷之十八	續本廟通鑑
卷之九	扶桑略記	卷之十九	參考太平記
卷之十	真信公記	卷之二十	神明鏡
卷之十一	扶桑略記裏書	卷之二十一	櫻雲記
卷之十二	吏部玉記	卷之二十二	皇年代私記
卷之十三	康富記	卷之二十三	師守記
卷之十四	改元勘文部類	卷之二十四	鶴岡社務記錄
卷之十五	和漢合符	卷之二十五	皇年代略記
卷之十六	朝世紀	卷之二十六	祇園執行日記
卷之十七	本	卷之二十七	天正本太平記
		卷之二十八	大日本史
		卷之二十九	醍醐地藏院日記
		卷之三十	愚管記
		卷之三十一	愚管記

引用書目録

- 歴代皇記
- 續史愚抄
- 國太曆
- 後愚昧記
- 忠光卿記
- 嘉元記
- 武家年代記裏書
- 如是院年代記
- 高野春秋
- 參考太平記
- 春日若宮神殿守記
- 康富記
- 大乗院日記目録
- 皇年代略記
- 和漢合運
- 南方紀傳
- 大日本史
- 阿波志
- 觀心寺文書
- 妙香院宮引付
- 師守記
- 東寺執行日記
- 空華日用工夫略集
- 鳩嶺雜事記
- 會津舊事雜考
- 康曆二年愚記
- 會津舊事土直考
- 宣御記
- 明德記
- 鈴鹿家記
- 東寺王代
- 兼敦記
- 永助法親王記
- 吉田家目次記
- かな年代記
- 塔寺八幡宮略記長帳
- 年代記殘編
- 教言記
- 南朝記傳
- 荒曆
- 教言記追加
- 和漢合符
- 應永十八年曆裏書
- 山科家禮記
- 看聞御記
- 神明鏡
- 文書纂
- 東寺百合文書
- 兼宣記
- 滿濟准后日記
- 薩戒記
- 新選和漢合圖
- 管見記
- 師郷記
- 鎌倉大日記
- 喜連川判鑑
- 妙法寺記
- 編年要略
- 續本朝通鑑
- 潜龍閣本塔寺八幡宮長帳
- 歷朝要紀
- 公卿補任
- 祇園社記
- 對州編年略
- 東榮鑑
- 新選和漢合圖朱書
- 長祿二年記
- 碧山日録
- 蔭涼軒日録

引用書目録

- 大乗院寺社雜事記
- 天地根元圖
- 長祿四年記
- 臥雲日伴録
- 糺河原猿樂記
- 親元日記
- 後知足院記
- 後法興院記
- 親長卿記
- 實隆公記
- 長興記
- 宣胤卿記
- 御湯殿上日記
- 卷之四
- 蔭涼軒日録
- 塔寺八幡宮長帳續
- 後法興院記
- 塔寺八幡宮長帳
- 大乗院寺社雜事記
- 親長卿記
- 大乗院日記目録
- 延徳引付
- 和長卿記
- 親長卿記
- かな年代記
- 御遊ごのゝ上日記
- 實隆公記
- 高代寺日記
- 言國卿記
- 和長卿記
- 忠富王記
- 内宮子良館記
- 妙法寺記
- 異本年代記拔萃
- 鎌倉大日記
- 東榮鑑
- 續史愚抄
- 遠江國風土記傳
- 東海道名所圖會
- 編年小史
- 宗祇終焉記
- 二水記
- 八代日記
- 宣胤卿記
- 尙通公記
- 北肥戰志
- 拾芥記
- 右文書類纂
- 多聞院日記略
- 長享年後畿内兵亂記
- 年代記抄節
- 新選和漢合圖
- 足利季世記
- 重編應仁記
- 盛衰通紀
- 中古日本治亂記
- 攝津志
- 丙辰紀行
- 續本朝通鑑
- 日本野史
- 公卿補任
- 請符集
- 祇園社記
- 會津舊事土直考
- 異本年代記
- 二水記
- 興福寺略年代記
- 祐維記

引用書卷別目録

公順公記  
 讃岐國大日記  
 言繼卿記  
 惟房公記  
 薩藩舊記  
 會津八幡宮年日記  
 増修和漢合運  
 資定卿記  
 歷朝要紀  
 東寺執行日記  
 石川忠總留記  
 蓮成院記  
 家忠日記  
 梵舞日記 一名舞舞記  
 貝塚天滿移位記  
 豐鑑  
 言經卿記  
 増補家忠日記  
 時慶卿記

薩藩舊記後編  
 讃岐大日記  
 梅園拾遺  
 義演准后日記  
 文祿大地震記  
 舜齋記 一名舞舞日記  
 増補家忠日記  
 當代記  
 日本西敷史  
 利家夜話  
 細川家記  
 慶長甲寅之記  
 木村又藏覺書  
 清正行狀  
 參陽實錄  
 朝鮮太平記  
 歷朝要紀  
 津輕一統志  
 時慶卿記  
 慶長見聞書  
 慶長見聞錄案紙  
 伊豆國八丈島宗福寺古記  
 八丈島記事

東照宮實紀  
 續本朝通鑑  
 置文寫  
 三災錄附錄  
 谷陵記  
 房總治亂記  
 武江年表  
 慶長日記  
 武德編年集成  
 慶長年錄  
 津輕舊記  
 東寺執行日記  
 會津四家合考  
 續年日記  
 柳津圓藏寺雜記  
 殿府記  
 新編會津風土記  
 朝野舊聞裏裏  
 松前家譜  
 長澤開書  
 萬代記  
 譜牒餘錄  
 泰重卿日記

引用書卷別目録

寒松日記  
 資勝卿記  
 東武編年要錄  
 江城年錄  
 温故年表  
 寬明日記  
 本光園師日記  
 視聽日録  
 帝國行政區畫便覽  
 寬永日記  
 大内日記  
 資勝卿記抄  
 元寬日記  
 慶延略記  
 御當家紀年録  
 家來略  
 老人覺書  
 萬年記  
 貞山公治家記録  
 康道公記  
 道房公記  
 德川系譜  
 尙嗣公記

大猷院實紀  
 正保録  
 義山公治家記録  
 聽訴秘録  
 天享吾妻鑑  
 泰平年表  
 人見私記  
 寬明事跡録  
 卷之六  
 忠利宿禰日記  
 慶安日記増補  
 寬明事跡録  
 東日記  
 聽訴秘録  
 續史愚抄  
 大猷院實紀  
 寬明日記  
 松山叢談  
 人見私記  
 紀年録  
 御徒方萬年記  
 家乘略

慶安日記増補  
 細川家記  
 老人覺書  
 玉滴隱見  
 武江年表  
 日光山志  
 視聽日録  
 嚴有院實紀  
 渡邊玄察日記 一名拾集物語  
 御當家年表 一名御國年代記  
 宜順卿記  
 寬文日記  
 玉露叢  
 落穂雜談一言集  
 皇年代私記  
 殿中日記  
 慶安元祿間記  
 慶延略記  
 元延實録  
 糟粕手簡  
 西北紀行  
 和漢合運  
 日向纂記



震災豫防調査報告第六十四號

甲

寛政重修諸家譜  
蝦夷志料  
堯想法親王日記  
泰平年表  
幕府日記  
松平津家譜  
越後野志  
三正綜覽  
承寛雜錄  
青山公治家記録  
佐渡年代記  
寛文錄  
萬天日録

御徒方萬年記  
慶延略記  
常憲院實紀  
甘露叢  
百式録  
憲廟實録  
皇年代私記  
近世東西略史  
萬年記  
丹羽家譜  
佐渡志略  
寛政重修諸家譜  
慶安元祿間記  
伊豆海島風土記  
南方海島志  
貞享二三年記  
輝光卿記  
渡邊玄察日記  
基量卿記  
温故年表  
元祿録  
武江年表  
人見私記續編

師英朝臣記  
田邊町役場記録  
元祿年録  
基熙公記  
月堂見聞集  
元祿十六年記  
折たく柴の記  
松蔭の日記  
秋元家舊記 一名萬覺帳  
異説區々  
文露叢  
長曆  
兼香公記  
田所氏記録  
御當家年表  
谷陵記  
須崎地震之記  
弘列筆記 一名萬覺帳  
日向雜記  
卷之八  
秋元家舊記  
基熙公記

引用書卷別目録

六

震災豫防調査報告第六十四號

甲

伊東志摩守日記  
文露叢  
折たく柴の記  
三好維堅筆記  
寶永録  
弘列筆記  
承寛雜錄  
谷陵記  
温故年表  
田所氏記録  
有徳院實紀  
月堂見聞集  
續史愚抄  
兼山麗澤秘策  
柳營日記  
續談海  
百式録  
近世東西略史  
十三朝記聞  
泰平年表  
日本野史  
長崎志  
享保通鑑

前田金家譜  
佐渡志  
萬年記  
兼香公記  
二條家番所日記  
常雅公記  
外記家臣記  
師充日次記  
寛延三年世説  
兼胤公記  
續皇年代略記  
健齋叢書  
越後頸城郡災害考  
佐渡年代記  
武江年表  
寶曆録  
廻狀留  
師資朝臣日次記  
凌明院實紀  
久方定明見聞録  
津輕家譜  
日向雜記  
輝良公記

大高山火記  
地名索引  
後見草  
地理纂考  
見聞雜録  
梅園拾遺  
莊内地理志  
四位揖右衛門聞書  
續王代一覽  
甲子夜話  
卷之九  
淺間山燒記録  
甲子夜話  
後見草  
一話一言  
近世名家遺文集覽  
信州淺間嶽焚崩紀事  
牧野八郎右衛門書狀  
天明日記  
天明年録  
千曲異砂

引用書卷別目録

七

卷之十  
 佐渡年代記  
 輝良公記  
 武江年表  
 泰平年表  
 島原山燒山水高波一件  
 寛政日記  
 廻狀留  
 細川家譜  
 黒田家譜  
 鍋島家譜  
 北窓瑣談  
 筆のすさび  
 温故年表  
 西肥島原大變開録  
 日本地誌提要  
 倭漢三才圖會  
 師資朝臣日次記  
 師武記  
 二條家番所日次記  
 郡區町村一覽  
 佐渡志  
 一話一言

地球之圖  
 續皇年代略記  
 文化日記  
 續王代一覽後記  
 師德卿記  
 實久卿記  
 地震雜纂  
 文政日記  
 本丸廻狀留  
 毛利山家譜  
 吉川家譜  
 松平容敬年譜  
 見聞雜記  
 北海道志  
 内廻狀留  
 甲子夜話  
 大地震曆年考  
 卷之十一  
 實久卿記  
 二條家番所日次記  
 内廻狀留  
 御當家年表

文政雜記  
 健齋叢書  
 甲子夜話  
 地震平安萬歲樂  
 康實地震記  
 大坂地震記  
 聞集錄  
 地震考  
 天保雜記  
 佐渡年代記  
 松前家譜  
 松前郡役所報告  
 武江年表  
 根室一等測候所報告  
 釧路郡役所報告  
 本丸廻狀留  
 天保年錄  
 國泰寺日鑑  
 龜田郡役所報告  
 以上甲卷  
 卷之十二  
 有所不爲齋雜錄

藤川寛雜記  
 信越地震記  
 轉機記 一名信濃國大地震記  
 信越地震記  
 弘代錄  
 武江年表  
 卷之十三  
 鎌原洞山地震記事  
 卷之十四  
 見集錄  
 禾木園雜記  
 卷之十五  
 德竹氏地震記事  
 町田忠太覺書  
 鷲澤氏記錄  
 栗林氏記錄  
 金澤氏記錄  
 町田清右衛門日記  
 渡邊敏震災地踏査筆記  
 弘化四丁未年大地震災害記錄

卷之十六  
 大地震洪水災害記錄  
 隄議叢書  
 永鑑雜誌  
 地震紀事  
 卷之十七  
 地震摘要  
 信州地震記  
 大地震御書上下案  
 信濃國大地震記  
 信州丁未茶談  
 震洪鑑  
 安政二年乙卯珍話  
 卷之十九  
 高麗環雜記  
 小田原藩士星見某書翰  
 安政二年乙卯珍話  
 續々泰平年表  
 校正王代一覽  
 幕府日記

二條家番所日次記  
 脇坂安宅日記  
 開集錄  
 御城書 一名御城番地震箇條抜書  
 大坂地震記  
 大屋祐義日記 一名稽古日記  
 田邊町役場記錄  
 田所氏記錄  
 嘉永七年甲寅地震海翻之記  
 地震雜纂  
 續地震雜纂  
 地震海嘯正說錄  
 安政二年乙卯珍話  
 卷之十九  
 二條家内々番所日次記  
 脇坂安宅日記  
 書付留  
 阿部正桓家記  
 鈴木大雜集  
 安政年表  
 御城書  
 大屋祐義日記

引用書卷別目録

田邊町役場記録  
 田所氏記録  
 嘉永七年甲寅地震海翻之記  
 嘉永甲寅諸國地震記  
 安田賤勝筆記  
 卷之二十  
 續地震雜纂  
 卷之二十一  
 地震海嘯正説録  
 地震日記  
 三災録  
 書付留  
 安政年表  
 安政見聞録  
 安政二年乙卯珍話  
 卷之二十二  
 大屋祐義日記  
 幕府沙汰書  
 時風録  
 御城書

破窓の記  
 なるの後見草  
 安政二年震災記事  
 時風録  
 函館一等測候所報告  
 龜田郡上磯村戸長役場報告  
 龜田郡榎法華村戸長役場報告  
 山越郡八雲村戸長役場報告  
 茅部郡白尻村戸長役場報告  
 浦河郡役所報告  
 龜田郡役所報告  
 幕府沙汰書  
 實廳卿記  
 前田山家譜  
 有馬家譜  
 續武江年表  
 續々武江年表  
 拾芥抄  
 計四百六十五部

# 大日本地震史料

## 引用書五十音順目録

コノ書目ハ、搜索ノ便宜ヲ謀リ、  
 五十音順ニ編成シ、其排叙ハ、初  
 出ニ順テ次第シタリ、而シテ引  
 書中、其頭字ヲ同ジフセルモノ  
 ハ、必ズシテ前後ノ序次ヲ墨守  
 セズ、總テ一所ニ駢列シテ、一目  
 瞭然タラシメタリ、是レ讀者ノ  
 披閱ニ最モ便ナルベケレバナ  
 リ、

### あ行

#### あノ部

東鑑  
 東鑑脱漏  
 櫻雲記  
 阿波志  
 會津舊事雜考  
 會津四家合考

引用書五十音順目録

あ行 あ、い、う、え、お

會津舊事土直考  
 會津八幡宮年日記  
 足利季世記  
 秋元家舊記 一名萬覺帳  
 淺間山燒記録  
 阿部正桓家記  
 安政年表  
 安政見聞録  
 安政二年震災記事  
 安政二年乙卯珍話  
 有馬家譜

### あ行

#### いノ部

一代要記  
 一話一言  
 異本塔寺長帳  
 異本年代記  
 異本年代記拔萃  
 異説區々  
 蔭涼軒日記  
 家忠日記  
 石川忠總留記

伊豆國八丈島宗福寺古記  
 伊豆海島風土記  
 伊東志摩守日記  
 有徳院實紀  
 有所不爲齋雜録

### あ行

#### うノ部

浦河郡役所報告

### あ行

#### わノ部

榮花物語  
 永助法親王記  
 永鑑雜誌  
 延徳引付  
 延寶録  
 延寶日記  
 蝦夷志料  
 あ行  
 おノ部  
 應永十八年曆裏書

引用書五十音順目錄 へ行お へ行かき

御湯殿上日記  
御城書 一名御城書地震箇條抜書  
御徒方萬年記  
置文寫  
大内日記  
大島山火記  
大屋祐義日記 一名稽古日記  
大坂地震記  
落穂雜談一言集

か行

かノ部

改元勘文部類  
高野春秋  
高代寺日記  
高麗環雜記  
嘉元記  
嘉永七年甲寅地震海潮之記  
嘉永甲寅諸國地震記  
春日若宮神殿守記  
康曆二年愚記  
庚寅地震記  
兼敦記

兼宣記  
兼香公記  
兼胤公記  
かな年代記  
看聞御記  
鎌倉大日記  
鎌原洞山地震記事  
和長卿記  
貝塚天滿移位記  
寒松日記  
江城年錄  
家乘略  
龜井家譜  
龜田郡役所報告  
龜田郡上磯村戸長役場報告  
龜田郡榎法華村戸長役場報告  
甘露齋  
甲子夜話  
金澤氏記錄  
校正王代一覽  
書付留  
茅部郡白尻村戸長役場報告

か行

きノ部

玉海  
玉滴隱見  
玉露叢  
吉續記  
祇園執行日記  
祇園社記  
鳩嶺雜事記  
喜連川判鑑  
公頼公記  
木村又藏覺書  
清正行狀  
義演准后日記  
義山公治家記錄  
紀年錄  
堯想法親王日記  
近世東西略史  
近世名家選文集覽  
享保通鑑  
吉川岩家譜

皇年代略記  
皇代記  
皇年代私記  
愚管記  
空華日用工夫略集  
荒曆  
觀心寺文書  
管見記  
公卿補任  
臥雲日伴錄  
寬明日記  
寬明事跡錄  
寬永日記  
寬文日記  
寬文錄  
寬延三年世說  
寬政日記  
寬政重修諸家譜  
廻狀留  
禾木園雜記

か行

くノ部

皇年代略記  
皇代記  
皇年代私記  
愚管記  
空華日用工夫略集  
荒曆  
觀心寺文書  
管見記  
公卿補任  
臥雲日伴錄  
寬明日記  
寬明事跡錄  
寬永日記  
寬文日記  
寬文錄  
寬延三年世說  
寬政日記  
寬政重修諸家譜  
廻狀留  
禾木園雜記

劍路郡役所報告  
栗林氏記錄  
那區町村一覽  
か行  
けノ部  
外記日記 前田侯爵本  
外記日記 別本  
外記家臣記  
慶長甲寅之記  
慶長見聞書  
慶見長聞錄案紙  
慶長日記  
慶長年錄  
慶延略記  
慶安日記増補  
慶安元祿間記  
元寬日記  
元延實錄  
元祿錄  
元祿年錄  
元祿十六年記  
嚴有院實紀

憲廟實錄

月堂見聞集

兼山麗澤秘策

健齋叢書

見聞雜錄

見聞雜記

見集錄

黒田家譜

か行

こノ部

後愚昧記  
後知足院記  
後法興院記  
古文書類纂  
興福寺略年代記  
惟房公記  
谷陵記  
御當家紀年錄  
御當家年表 一名御國年代記  
肯山公治家記錄  
國泰寺日鑑  
弘化錄

引用書五十音順目錄 へ行く、け、こ

引川書五十音順目錄 か行 こさ行 さ、じ、す、せ

四

弘化四丁未年大地震災害記録

さ行

さの部

- 三代實錄
- 實能記
- 實朝卿記
- 實隆公記
- 實久卿記
- 實慶卿記
- 山槐記
- 參考太平記
- 參陽實錄
- 薩戒記
- 薩藩舊記
- 薩藩舊記後編
- 讃岐國大日記
- 精相手簡
- 三災錄
- 三災錄附錄
- 三正綜覽
- 佐渡年代記
- 佐渡志略

佐渡志

さ行

さの部

- 續日本紀
- 續日本後紀
- 奉記
- 十三代要略
- 十三朝記開
- 拾芥抄
- 拾芥抄
- 諸法要略抄
- 重憲記
- 神明鏡
- 新選和漢合圖
- 新選和漢合圖朱書
- 新編會津風土記
- 請符集
- 視聽日錄
- 正保錄
- 承寬雜錄
- 常憲院實紀
- 凌明院實紀

莊内地理志

四位掛右衛門聞書

信州淺間嶽焚崩紀事

信越地震記

信州地震記

信濃國大地震記

信州丁未茶談

震洪鑑

島原山燒山水高波一件

時風錄

さ行

すの部

- 鈴鹿家記
- 鈴木大雜集
- 祐雜記
- 資定卿記
- 資勝卿記
- 資勝卿記抄
- 駿府記
- 須崎地震之記

さ行

せの部

引川書五十音順目錄 さ行 せ、そ、た、ち

五

宣御記

潜龍閣本塔寺八幡宮長帳

盛衰通紀

攝津志

西北紀行

西肥島原大變開録

さ行

その部

- 續史愚抄
- 續本朝通鑑
- 續年日記
- 續談海
- 續皇年代略記
- 續王代一覽
- 續王代一覽後記
- 續々泰平年表
- 續地震雜纂
- 續武江年表
- 續々武江年表
- 宗祇終焉記
- 増修和漢合運
- 増補家忠日記

た行

たの部

- 台記
- 塔寺八幡宮長帳
- 塔寺八幡宮略記長帳
- 塔寺八幡宮長帳續
- 異本塔寺長帳 いノ部ヲ見
- 潜龍閣本塔寺八幡宮長帳 せノ部ヲ見
- 大日本史
- 大乘院日記目錄
- 大乘院寺社雜事記
- 大猷院實紀
- 大地震曆年考
- 大地震洪水災害記録
- 大地震御書上下案
- 醍醐地藏院日記
- 忠光卿記
- 忠富王記
- 忠利宿禰日記
- 對州編年略
- 紉河原猿樂記
- 多聞院日記略

當代記

孝亮宿禰目次記

泰平年表

田邊町役場記録

田所氏記録

た行

ちの部

- 中右記
- 中古日本治亂記
- 長祿二年記
- 長祿四年記
- 長享年後畿内兵亂記
- 親元日記
- 親長卿記
- 重編應仁記
- 聽斷秘録
- 地理纂考
- 地球之圖
- 地震雜纂
- 地震奇談平安萬歳樂
- 地震考
- 地震紀事

<p>な行 にノ部</p> <p>日本書紀 日本後紀 日本紀略 日本西教史 日本野史 日光山志 日本地誌提要 二水記 二條家番所日次記 如是院年代記 丹羽家譜</p> <p>な行 ねノ部</p> <p>年代記殘編 年代記抄節 根室一等測候所報告</p> <p>な行 のノ部</p>	<p>教言記 教言記追加 範圍記 宣胤卿記 宣順卿記 後見草</p> <p>は行 はノ部</p> <p>梅園拾遺 房總治亂記 八丈島記事 寶永錄 寶曆錄 幕府日記 幕府日記 別本 幕府沙汰書 函館一等測候所報告</p> <p>は行 ひノ部</p> <p>百練抄 百式錄</p>	<p>尙通公記 尙嗣公記 人見私記 人見私記續編 日向纂記 日向雜記 弘列筆記 一名萬變記 久方定明見開錄</p> <p>は行 ふノ部</p> <p>扶桑略記 武家年代記 武家年代記裏書 武江年表 武德編年集成 文祿大地震記 文祿叢 文化日記 文政日記 文政雜記 譜牒餘錄 筆のすさび</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

引用書五十首順目錄

な行 に、ね、の

は行 は、ひ、ふ

<p>地災撮要 地震海嘯正說錄 地震日記 千曲真砂</p> <p>た行 つノ部</p> <p>鶴岡社務記録 津輕一統志 津輕舊記 津輕家譜 常雅公記</p> <p>た行 てノ部</p> <p>貞信公記 貞山公治家記録 貞享二三年記 帝王編年記 帝國行政區畫便覽 天正本太平記 天地根元圖 天享善妻鑑</p>	<p>天明日記 天明年錄 天保雜記 天保年錄 朝鮮太平記 朝野舊聞哀藁 殿中日記 輝光卿記 輝良公記 轉變記 一名信濃國大地震記 隄議叢書</p> <p>た行 とノ部</p> <p>東寺執行日記 東寺王代 東寺百合文書 東榮鑑 東海道名所圖會 東照宮實紀 東武編年要錄 東日記 言國卿記</p>	<p>言繼卿記 言經卿記 遠江國風土記傳 利家夜話 豐鑑 時慶卿記 徳川系譜 徳竹氏地震記事</p> <p>な行 なノ部</p> <p>長秋記 長興記 仲資王記 内宮子良館記 内廻狀留 南方紀傳 南朝記傳 南方海島志 長澤開書 長崎志 鍋島屋前家譜 なるの後見草</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

引用書五十首順目錄

た行 た、つ、て、と

な行 な

震災豫防調査報告第四十六號

甲

引用書五十音順目録 け行 きん けい けい

藤川寛雜記  
開集録

は行  
へノ部

兵範記  
編年要略  
編年小史  
碧山日記  
丙辰紀行

は行  
ほノ部

本朝世紀  
本光國師日記  
本丸廻狀留  
北肥戰志  
北窓瑣談  
北海道志  
細川家記  
細川家譜  
焚燹日記

ま行

まノ部

滿濟准后日記  
松前家譜  
松山叢談  
松平津家譜  
松蔭の日記  
松平容敬年譜  
松前郡役所報告  
萬代記  
萬年記  
萬天日録  
前田金家譜  
前田家譜  
牧野八郎右衛門書狀  
町田忠太覺書  
町田清右衛門日記  
通房公記  
三好維堅筆記

ま行

めノ部

明月記  
明德記  
妙香院宮引付  
妙法寺記  
文德實錄  
文書纂  
師守記  
師守記  
師守記  
師守記  
師英朝臣記  
師充日記  
師資朝臣日記  
師武記  
師德卿記  
基量卿記  
基標公記  
毛利山家譜

震災豫防調査報告第四十六號

甲

引用書五十音順目録 や行 やい やい

や行

やノ部

康富記  
康道公記  
山科家禮記  
山越郡八雲村戸長役場報告  
八代日記  
柳津圓藏寺雜記  
泰重卿日記  
安田勝勝筆記  
破窓の記

や行

よノ部

吉田家日記  
ら行  
らノ部  
老人覺書  
ら行  
りノ部

史部王記

柳營日録

ら行

るノ部

類聚國史  
ら行  
れノ部  
歴代皇記  
歷朝要紀  
運成院記錄

わ行

わノ部

和漢合運  
和漢合符  
倭漢三才圖會  
渡邊玄察日記 一名拾集物語  
渡邊敏震災地踏査筆記  
鷲澤氏記錄  
脇坂安宅日記

わ行

をノ部

園太曆  
越後野志  
越後頸城郡災害考  
温故年表  
折たく柴の記  
小田原藩士星見某書翰  
計四百六十五部



大日本地震史料

卷之一

自允恭天皇五年  
至仁和三三年

允恭天皇五年七月十四日己丑、河內國地震フ、

(日本書紀) 十三

雄湖津間稚子宿禰天皇○允恭五年秋七月丙子朔、己丑、地震、

推古天皇七年四月二十七日辛酉、大和國地震ヒ

屋舎ヲ壞ル、勅シテ地震ノ神ヲ祭ラシメ給フ、

(日本書紀) 三十三

豐御食炊屋姬天皇○推古七年夏四月乙未朔、辛酉、地動、舍屋

悉破、則令四方、俾祭地震神、

皇極天皇元年十月八日庚寅、大和國地震フ、

(日本書紀) 三十四

天豐財重日足姬天皇○皇極元年冬十月癸未朔、庚寅、地震而

雨、

同月 日辛卯、大和國地震ヒ、夜又震フ、

(日本書紀) 三十四

辛卯、地震、是夜地震而風、

同月二十四日丙午、是夜、大和國地震フ、

(日本書紀) 三十四

丙午、夜中地震、

天智天皇三年春、大和國地震フ、

(日本書紀) 三十七

天命開別天皇○天智三年、是春地震、

天武天皇三年十一月、大和國地震フ、

(日本書紀) 三十九

天淳中原瀛真人天皇○天武四年十一月辛丑朔、是月大地動、

○日本書紀ハ天武天皇ヲ以テ直ニ天智天皇ノ統ヲ承ケ、壬申歲ヲ即位元年トナセリ、然レドモ壬申ハ弘文天皇ノ即位元年ニシテ、天武天皇ノ即位ハ

癸酉歲二月二十七日ニアリ、大日本史之ヲ辨ズルコト詳ナリ、今之ニ從ヒ、

癸酉歲ヲ天武天皇即位元年ト爲シ、即位四年ヲ三年ト爲ス、以下皆之ニ從

ヘリ、

同五年六月十四日乙巳、大和國地強ク震フ、

(日本書紀) 三十九

六年六月壬辰朔、乙巳、大震動、

(類聚國史) 增

天武天皇六年六月壬辰朔、乙巳、大地震動、

同六年十二月、筑紫國地大ニ震ヒ、大地裂ケ民舍



多ク壞レタリ、

(日本書紀)二十九

七年十二月癸丑朔、是月、筑紫國大地動之、地裂廣二丈、長三千餘丈、百姓舍屋、每村多仆壞、是時、百姓一家有于岡上、當于地動夕、以岡崩處遷、然家既全而無破壞、家人不知岡崩家避、但會明後、知以大驚焉、

同七年十月十一日戊午、大和國地震フ、

(日本書紀)二十九

八年冬十月戊申朔、戊午、地震、

十一月十四日庚寅、大和國地震フ、

(日本書紀)二十九

十一月丁丑朔、庚寅、地震、

同八年九月二十三日乙未、大和國地震フ、

(日本書紀)二十九

九年九月癸酉朔、乙未、地震、

同九年三月二十一日庚寅、大和國地震フ、

(日本書紀)二十九

十年三月庚午朔、庚寅、地震、

六月二十四日壬戌、大和國地震フ、

(日本書紀)二十九

六月己亥朔、壬戌、地震、

十月十八日癸未、大和國地震フ、

(日本書紀)二十九

冬十月丙寅朔、癸未、地震、

十一月二日丁酉、大和國地震フ、

(日本書紀)二十九

十一月丙申朔、丁酉、地震、

同十年一月十九日癸丑、大和國地震フ、

(日本書紀)二十九

十一年春正月乙未朔、癸丑、地動、

三月七日庚子、大和國地震フ、

(日本書紀)二十九

三月甲午朔、庚子、地震、

七月十七日戊申、大和國地震フ、

(日本書紀)二十九

秋七月壬辰朔、戊申、地震、

八月十二日癸酉、大和國地震フ、

(日本書紀)二十九

八月壬戌朔、癸酉、大地動、

同月十七日戊寅、大和國地震フ、

(日本書紀)二十九

戊寅、亦地震、

同十二年十月十四日壬辰、諸國地大ニ震フ、就

中、土佐國最モ激烈ヲ極メ、田苑五十餘萬頃没シ

テ海ト爲リ、伊豫國ノ温泉亦屏止セリ、

(日本書紀)二十九

十三年冬十月己卯朔、壬辰、逃于<sup>オホトキ</sup>人定大地震、舉國男女叫唱不知東西、則山崩河涌、諸國郡官舍、及百姓倉<sup>新築國史</sup>、屋寺塔、神社、破壞之類不可勝數、由是人民及六畜多死傷之、時伊豫湯泉沒而不出、土左國田苑五十餘萬頃、沒爲海、古老曰、若是地動未曾有也、

同十三年十二月十日辛巳、大和國地震フ、

(日本書紀)二十九

十四年十二月壬申朔、辛巳、自西發之地震、

朱鳥元年一月十九日庚申、大和國地震フ、

(日本書紀)二十九

朱鳥元年春正月壬寅朔、庚申、地震、

十一月十七日癸丑、大和國地震フ、

(日本書紀)二十九

高天原廣野<sup>天皇</sup>天皇<sup>持統</sup>朱鳥元年十一月丁酉朔、癸丑、地震、

大寶元年三月二十六日己亥、丹波國地震フコト

三日ニ涉レリ、

(續日本紀)三

大寶元年三月甲戌朔、己亥、丹波國地震三日、

和銅五年六月七日乙巳、大和國地震フ、

(續日本紀)五

和銅五年六月己亥朔、乙巳、地震、

靈龜元年五月二十五日乙巳、遠江國地大ニ震ヒ、

山崩レテ蠶玉河ヲ壅グ、尋テ決潰シテ多ク民家

禾苗ヲ損ゼリ、

(續日本紀)六

和銅八年<sup>靈龜</sup>五月辛巳朔、乙巳、遠江<sup>新築國史</sup>、江地震、山崩壅蠶玉河、水爲之不流、經數十日潰<sup>類聚國史</sup>、没<sup>下ニ流アリ</sup>、没<sup>没</sup>智長下

石田三郡民家百七十餘區、并損苗、

同月二十六日丙午、三河國地大ニ震フ、

(續日本紀)六

丙午、參河國地震、壞正倉四十七、又百姓廬舍、往々陷沒、  
七月十日己丑、大和國地震フ、

(續日本紀)六  
七月庚辰朔、己丑、地震、

同二年一月四日辛巳、大和國地震フ、

(續日本紀)七

靈龜二年正月戊寅朔、辛巳、地震、

養老三年三月二十六日乙卯、大和國地震フ、

(續日本紀)八

養老三年三月庚寅朔、乙卯、地震、

同四年二月十五日戊戌、大和國地震フ、

(類聚國史)百七

養老四年二月甲申朔、戊戌、夜地動、○續紀、コノ地  
動ヲ載セズ、

同五年一月二十四日辛未、大和國地震フ、明日、  
又震フ、

(續日本紀)九

養老五年春正月戊申朔、辛未、地震、○壬申、亦震、

二月七日甲申、大和國地震フ、

(續日本紀)八

二月戊寅朔、甲申、地震、

十二月二十九日、大和國地震フ、

(續日本紀)九

十二月癸酉朔、辛丑、地震、

天平四年七月十五日丙辰、大和國地震フ、

(續日本紀)十

天平四年秋七月壬寅朔、丙辰、地震、

十二月二十二日辛卯、大和國地震フ、

(續日本紀)十一

十二月庚午朔、辛卯、地震、

同六年四月七日戊戌、畿内七道諸國地大ニ震フ、

(續日本紀)十二

天平六年夏四月壬辰朔、戊戌地大震、○類聚國史、大  
地震ニ作レリ、壞天下百  
姓廬舍、壓死者多、山崩河壅、地往々折○類聚國史、折  
裂不可勝  
數、

癸卯、遣使畿内七道諸國、檢看破地震神社、

戊申、詔曰、今月七日地震殊常、恐動山陵、宜遣諸王真人、副土師宿禰一人、檢  
看諸所八處、及有功王之墓、又詔曰、地震之災、恐由政事有闕、凡厥庶寮、勉理  
職業、自今以後、若不改勵、隨其狀迹、必將貶黜焉、

秋七月庚申朔、辛未、詔曰、朕撫育黎元、積歷年歲、風化尙難、罔聞未空、並且  
忘寐、憂勞在茲、頃者天顯異、地震震動、良由朕訓導不明、民多入罪、貴在

於大隅國檢問、并請開神命、  
○壬子、八月十五日ナリ、今月二十三日トイヘルハ、翌、十月ナルベシ、

十二月十六日丁亥、山城國地震フ、

(續日本紀)十四

十二月壬申朔、丁亥、地震、

同十五年七月十七日庚寅、山城國地震フ、

(續日本紀)十五

天平十五年秋七月戊戌朔、庚寅、地震、

同十六年五月十二日庚戌、肥後國地震フ、

(續日本紀)十五

天平十六年五月癸亥朔、庚戌、肥後國雷雨地震、八代、天草、  
葦北三郡官舍、并田二百九十餘町、民家四百七十餘區、人千  
五百二十餘口、被水漂沒、山崩二百八十餘所、壓死人四十餘  
人、并加賑恤、

同十七年四月二十七日甲寅、美濃、攝津兩國地大  
ニ震フ、美濃最モ甚シ、多ク人家ヲ壞レリ、餘震  
月ヲ越エテ止マズ、

(續日本紀)十六

天平十七年夏四月戊子朔、甲寅、是日通夜地震三日三夜、美

九月二十四日壬午、大和國地震フ、

(續日本紀)十一

九月己未朔、壬午、地大震、

同九年十月十九日己未、大和國地震フ、

(續日本紀)十二

天平九年冬十月辛丑朔、己未、地震、

同十年九月六日辛丑、大和國地震フ、

(續日本紀)十三

天平十年九月丙申朔、辛丑、地震、

同十四年三月二十四日己巳、山城國地震フ、

(續日本紀)十四

天平十四年三月丙午朔、己巳、地震、

十月二十三日甲午、大隅國是日ヨリ二十八日ニ  
至ルマデ空中聲アリ、地大ニ震動セリ、

(續日本紀)十五

十二月壬寅朔、壬子、大隅國司言、從今月二十三日未時至二  
十八日、空中有聲如大鼓、野雉相驚、地大震動、○丙寅、遣使

(續日本紀)十五

天平九年、十年、十四年、十五年、十六年、十七年

天平十七年、十八年

六

濃國櫓館正倉、佛寺堂塔、百姓廬舍、觸處崩壞、  
五月戊午朔、地震、  
己未、地震、令京師諸寺、限一七日轉讀最勝王經、  
庚申、地震、  
辛酉、地震、  
壬戌、地震、日夜不止、  
癸亥、地震、  
甲子、地震、  
乙丑、地震、於大安、藥師、元興、興福四寺、限三七日令讀大王  
集經、  
丙寅、地震、  
丁卯、地震、讀大般若經於平安宮、  
癸酉、地震、  
乙亥、地震、  
是月、地震異常、往々拆裂、水泉涌出、  
七月十七日壬申、攝津國地震フ、明日、又震フ、  
(續日本紀)十六  
秋七月丙辰朔、壬申、地震、  
癸酉、地震、  
八月二十四日己酉、攝津國地震フ、

(續日本紀)十六  
八月丙戌朔、己酉、地震、  
同月二十九日甲寅、攝津國地震フ、  
(續日本紀)十六  
甲寅、地震、  
九月二日丙辰、攝津國地震フ、  
(續日本紀)十六  
九月乙卯朔、丙辰、地震、  
同十八年一月十四日丙寅、大和國地震フ、  
(續日本紀)十六  
天平十八年春正月癸丑朔、丙寅、地震、  
同月二十九日辛巳、大和國地震フ、夜又震フ、  
(續日本紀)十六  
辛巳地震、夜又震、  
同月三十日壬午、大和國地震フ、  
(續日本紀)十六  
六月五日丙戌、大和國地震フ、  
(續日本紀)十六

六月壬午朔、丙戌、地震、  
九月十三日壬戌、大和國地震フ、  
(續日本紀)十六  
九月庚戌朔、壬戌、地震、  
閏九月十三日辛卯、大和國地震フ、  
(續日本紀)十六  
閏九月己卯朔、辛卯、地震、  
同十九年五月十二日丁亥、大和國地震フ、  
(續日本紀)十七  
天平十九年五月丙子朔、丁亥、地震、  
天平勝寶四年一月十一日己丑、大和國地震フ、  
(續日本紀)十八  
天平勝寶四年春正月己卯朔、己丑、地動、  
十月一日甲戌、大和國地震フ、明日又震フ、  
(續日本紀)十八  
冬十月甲戌朔、地震、○乙亥又震、  
天平寶字六年五月九日丁亥、美濃、飛驒、信濃諸  
國地大ニ震フ、  
(續日本紀)三十四

天平寶字六年五月己卯朔、丁亥、美濃、飛驒、信濃等國地震、  
賜被損者穀家二斛、  
天平神護二年六月五日己丑、大隅國神造新島、地  
震動シテ息マズ、居民多ク流亡セリ、  
(續日本紀)三十七  
天平神護二年六月乙酉朔、己丑、大隅國神造新島、震動不息、  
以故民多流亡、仍加賑恤、  
寶龜四年二月十七日壬戌、大和國地震フ、  
(續日本紀)三十一  
寶龜四年二月丙午朔、壬戌、地動、  
同月三十日乙亥、大和國地震フ、  
(續日本紀)三十二  
乙亥、地震、  
八月二十九日壬申、大和國地震フ、  
(續日本紀)三十二  
八月甲辰朔、壬申、地動、  
十月一日癸卯、大和國地震フ、  
(續日本紀)三十三  
冬十月癸卯朔、地震、

天平十九年 天平勝寶四年 天平寶字六年 天平神護二年 寶龜四年

七

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

同月四日丙午、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十三  
 丙午、地震、  
 同六年二月八日辛未、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十三  
 寶龜六年二月甲子朔、辛未、地震、  
 五月四日丙申、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十三  
 五月癸巳朔、丙申、地震、  
 十月六日丙寅、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十三  
 冬十月辛酉朔、丙寅、地震、  
 甲申、大穰、以風雨及地震也、  
 同七年十月九日癸巳、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十四  
 寶龜七年冬十月乙酉朔、癸巳、地震、  
 十一月二日丙辰、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十四  
 十一月乙卯朔、丙辰、地震、

同九年五月二十二日丁卯、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十五  
 寶龜九年五月丙午朔、丁卯、寅時地震、  
 同月二十六日辛未、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十五  
 辛未、又震、  
 天應元年三月六日乙丑、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十六  
 天應元年三月庚申朔、乙丑、地震、  
 五月四日壬戌、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十六  
 五月己未朔、壬戌、地震、  
 同月十三日辛未、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十六  
 辛未、地震、  
 六月十二日己亥、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十六  
 六月戊子朔、己亥、地動、類聚國史、地動ニ作レリ、  
 同月二十二日己酉、大和國地震フ、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

己酉、地震、  
(續日本紀) 三十六  
 十月十日乙未、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十六  
 冬十月丙戌朔、乙未、地震、  
 十一月三日丁巳、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十六  
 十一月乙卯朔、丁巳、地震、  
 同月二十七日辛巳、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十六  
 辛巳、地震、  
 十二月十二日丙申、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十六  
 十二月乙酉朔、丙申、地震、  
 同月二十四日戊申、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十六  
 戊申、地震、  
 延曆元年閏一月十三日丙申、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十七

天應二年〇延曆元年正月甲申朔、丙申、地震、  
 同月十五日戌戌、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十七  
 戊戌、地震、  
 二月十九日壬申、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十七  
 二月甲寅朔、壬申、地動、  
 六月十四日乙丑、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十七  
 六月壬子朔、乙丑、是日地震、  
 七月二十五日丙午、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十七  
 秋七月壬午朔、丙午、是日地震、  
 同二年一月二十三日庚子、大和國地震フ、  
(續日本紀) 三十七  
 延曆二年春正月戊寅朔、庚子、是日地震、  
 同四年五月二十七日辛酉、山城國地震フ、  
(續日本紀) 三十九  
 延曆四年五月乙未朔、辛酉、地震、

延曆四年、五年、九年、十一年、十二年、十三年、十六年、十七年

九月三日乙未、山城國地震フ、

(續日本紀)<sup>三十九</sup>

九月癸巳朔、乙未、地震、

同五年一月二十八日己未、山城國地震フ、

(續日本紀)<sup>三十九</sup>

延曆五年春正月壬辰朔、己未、地震、

同九年十一月十五日丁丑、山城國兩度地震フ、

(續日本紀)<sup>四十四</sup>

延曆九年十一月癸亥朔、丁丑、辰時地震、巳時又震、

十二月十三日甲辰、山城國地震フ、

(續日本紀)<sup>四十四</sup>

十二月壬辰朔、甲辰、地震、

同十一年一月二十七日壬午、山城國地震フ、

(類聚國史)<sup>七</sup>

延曆十一年正月丙辰朔、壬午、地震、

同十二年八月三十日丙子、山城國地震フ、

(類聚國史)<sup>七</sup>

延曆十二年八月丁未朔、丙子、地震、

十月十五日庚申、山城國地震フ、

(類聚國史)<sup>七</sup>

延曆十二年十月丙午朔、庚申、地震、

同十三年一月十五日己丑、山城國地震フ、

(類聚國史)<sup>七</sup>

延曆十三年正月乙亥朔、己丑、地震、

六月十三日甲寅、山城國地震フ、

(類聚國史)<sup>七</sup>

六月壬寅朔、甲寅、地震、

九月一日辛未、山城國地震フ、

(類聚國史)<sup>七</sup>

九月辛未朔、地震、

同月一日壬申、山城國地震フ、

(類聚國史)<sup>七</sup>

壬申、地震、

同十六年八月十四日丁卯、山城國京都地震フ、

(類聚國史)<sup>七</sup>

延曆十六年八月甲寅朔、丁卯地震暴風、左右京坊門百姓屋

舍、倒仆者多、

同十七年四月十日庚申、京都地震フ、

(類聚國史)<sup>七</sup>

延曆十七年四月辛亥朔、庚申、地震、

同十八年十一月四日甲辰、京都地震フ、

(日本後紀)<sup>八</sup>

延曆十八年十一月辛丑朔、甲辰、地震、

同二十三年八月十一日癸丑、京都地震フ、

(日本後紀)<sup>十八</sup>

延曆二十三年八月癸卯朔、癸丑、地震、

九月二十七日戊戌、京都地震フ、

(日本後紀)<sup>十三</sup>

九月壬申朔、戊戌、地震、

同二十四年一月二十五日乙未、京都地震フ、

(日本後紀)<sup>十三</sup>

延曆二十四年春正月辛未朔、乙未、地震、

七月十七日甲申、京都地震フ、

(日本後紀)<sup>十三</sup>

秋七月戊辰朔、甲申、地震、

八月九日乙巳、京都地震フ、

(日本後紀)<sup>十三</sup>

八月丁酉朔、乙巳、地震、

十二月五日庚子、京都地震フ、

(日本後紀)<sup>十三</sup>

十二月丙申朔、庚子、地震、

大同二年五月二十五日壬子、京都強震アリ、

(類聚國史)<sup>七</sup>

大同二年五月戊子朔、壬子、地大震、

弘仁元年六月二十六日甲午、是夜、京都地震フ、

(類聚國史)<sup>七</sup>

大同五年<sup>〇弘仁六年</sup>六月己巳朔、甲午、夜地震、

同二年十二月十六日丙子、京都地震フ、

(日本後紀)<sup>三十一</sup>

弘仁二年十二月辛酉朔、丙子、地震、

同七年十月八日己亥、京都地震フ、

(類聚國史)<sup>七</sup>

弘仁七年十月壬辰朔、己亥、地震、

同八年十二月十三日丁卯、京都地震フ、

(類聚國史)<sup>七</sup>

弘仁八年十二月乙卯朔、丁卯、地震、

延曆十八年、二十三年、二十四年 大同二年 弘仁元年、二年、七年、八年

震災豫防會查報告第四十六號

甲

同月十八日壬申、京都地震フ、

(類聚國史) 堀

壬申、地震、

同月二十日甲戌、京都地震フ、

(類聚國史) 堀

甲戌、地震、

同九年七月、相摸、武藏下總、常陸、上野、下野等諸國、地大ニ震フ、

(類聚國史) 堀

弘仁九年七月、相摸、武藏、下總、常陸、上野、下野等國、地震、山崩谷埋數里、壓死百姓不可勝計、

八月庚午、遣使詣國、巡省地震、其損甚者、加賑恤、詔曰、朕以醜味飲若資、圖、撫育之誠、無忘武步、主風猶爵、帝載未淵、管轄之臻、此爲特選、如聞七野、國等境、地震爲災、水潦相仍、人物凋損、雖云天道高遠不可得言、固應政術有虧、致接靈譴、自貽民瘼、嗚朕之由、薄德厚顏、愧于天下、靜言厥咎、實所與嘆、豈有民危而君獨安、子憂而父不念者也、所以殊降使者、就加存慰、其有因震潦居業窮乏者、使等與所在官司、同辦蠲免今年租稅、并不論民夷、以正稅賦恤、助修屋宇、使免飢寒、賑沒之徒、速爲蠲免、務盡憐愍之旨、副朕迴瞻之心、九月辛卯詔曰、云云、比者地震害及黎元、吉凶由人、朕不自作、或恐漢汗飛越、力失帖心、降茲厚譴、以特協與、畏天之威、不違靈譴、決之龜策、時行告誓、普天

同十四年六月二十四日丁未、京都地震フ、

(類聚國史) 堀  
弘仁十四年六月甲申朔、丁未、地震、  
八月十二日癸巳、京都地震フ、  
(類聚國史) 堀  
八月壬午朔、癸巳、地震、  
十二月九日乙丑、京都地震フ、  
(類聚國史) 堀  
十二月辛巳朔、乙丑、地震、  
天長二年一月十七日辛酉、京都地震フ、  
(類聚國史) 堀  
天長二年正月乙巳朔、辛酉、申刻地震、  
二月二十六日庚子、京都地震フ、  
(類聚國史) 堀  
二月乙亥朔、庚子、地震、  
同三年一月五日壬申、京都地震フ、  
(類聚國史) 堀  
天長三年正月戊辰朔、壬申、地震、  
同月十四日辛巳、京都地震フ、  
(類聚國史) 堀

震災豫防會查報告第四十六號

甲

辛巳、地震、

同月二十三日庚寅、京都地震フ、

(類聚國史) 堀

庚寅、地震、

二月二十四日辛酉、京都地震フ、

(類聚國史) 堀

二月戊戌朔、辛酉、地震、

四月十二日己酉、京都地震フ、

(類聚國史) 堀

四月戊戌朔、己酉、地震、

六月六日壬寅、京都地震フ、

(類聚國史) 堀

六月丁酉朔、壬寅、地震、

十一月二十二日乙酉、京都地震フ、

(類聚國史) 堀

十一月甲子朔、乙酉、地震、

十二月十三日乙巳、京都地震フ、

(類聚國史) 堀

十二月癸巳朔、乙巳、地震、

天長四年

二三

同四年四月十七日戊申、京都地震フ、

(類聚國史) 堀

天長四年四月壬辰朔、戊申、地震、

七月十二日辛未、京都地大ニ震ヒ、舍屋多ク頽

レ、餘震年ヲ越エタリ、

(類聚國史) 堀

七月庚申朔、辛未、地震、多頽舍屋、一日之内大震二度、小動

七八度、

癸酉、地動不止、亥刻地大震、每地震皆有聲、

甲戌、震動、

乙亥、地震二度、

戊寅、地大震二度、

庚辰、地震、

辛巳、地震、

癸未、卯刻地震、午四刻地震、夜半地大震、

甲申震動、雨降、戌刻地震、

丙戌、地大震、

戊子、地震、

己丑、地震、午刻亦大動、未刻亦動、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

八月壬辰、地震、  
 甲午、地震、  
 乙未、午刻地震、子刻地震、丑刻亦地震、  
 丁酉、地震、  
 辛丑、地震、  
 癸卯、地動、有聲如雷、  
 甲辰、地震、  
 乙巳、申刻地震、  
 戊申、地震、  
 辛亥、地震、  
 癸丑、辰刻地動、酉刻又地動、  
 九月庚申、地震、聲如雷、辛酉亦如之、  
 丙寅、地動、  
 丁卯地動、聲如雷、戊辰亦如之、  
 己巳、地動、  
 壬申、地震有聲、  
 甲戌、地大震有聲、  
 己卯、地震、聲如雷、  
 辛巳、地震、聲亦如雷、  
 十月庚寅、地震、聲如雷、寅刻又地動、

壬辰、酉刻地震、  
 己亥、地震、聲如雷、寅刻又地震、  
 十一月癸酉、地震、  
 庚辰、地大震、聲如雷、  
 壬午、地震、  
 丁亥、地震、  
 十二月戊子、地震、  
 己丑、地震、  
 辛丑、屈請清行僧百口於大極殿、轉讀大般若經三箇日、爲停地震、  
 癸卯、地震、雪降、  
 丙午、地震、  
 五年二月辛卯、地震、  
 戊戌、地震、  
 辛丑、地震、  
 三月己未、地震、  
 丙寅、地震、  
 六月丁巳、地震、  
 己未、地震、  
 己卯、地震、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

〔天長五年〕七月壬子、詔曰、朕以非康、不親稼穡、道阻歲用、化愆中孚、春冰兢々、日慎無劬、秋駕憫々、夕惕何忘、而薄德靡明、細心未高、至和有虧、普微荐臻、頃者坤德暫叙、山崩地震、妖不自作、咎從由人、疑是八政或乖、一物失所、歎靜言厥過、貴在朕躬、黃畏天威、無志察察、其天下肆行有流滯者、有司覆審情狀、令得申理、又收尋道類、掩骼埋胔、斑白不提、指事使人、老丁之傷、永從寬免、八十已上、及饑寒孤獨、不能自存者、簡賜物、早以昭示、咸使聞知矣、  
 〔五年〕八月甲子、右大臣從三位兼行皇太子傳藤原朝臣緒嗣等言、臣聞陰陽平分帝德修以休、若天地何心、卓道虧以震、神理不述、冥符契合者、伏惟皇帝陛下得一居以、通三取極、無窮和、交區負、神聖玉葉、泛滂宇而飛、靈芝命案、犯丹墀而吐瑞、金雲、盛明堂不宜乎、臣等伏見去月廿九日明詔、坤德暫叙、山崩地震、引咎明、密噴容、臣等恐伏愧慙、如實奏、夫靈籙之來、或緣朕、災眚之興、未必元首、是以含擾生、嗚呼漢主、其撞地、罪歸宋臣、臣等愚竊未効、天工永曠、不曾消解於和、而可勞於平均、遂使臣下之過、翻爲君上之勞、方知靈籙、爲焦心之佩、愧極垂陰、非涼身之地、不任屏營慙之至、奉表以聞、

天長五年十月五日丁巳、京都地震フ、  
 〔類聚國史〕  
 天長五年十月癸丑朔、丁巳、地震動、  
 同月二十二日甲戌、京都地震強ク震フ、  
 〔類聚國史〕  
 甲戌、大地震、  
 同月二十三日乙亥、京都地震フ、  
 乙亥、地震、

天長五年、六年、七年

十一月二十五日丁未、京都地震フ、  
 〔類聚國史〕  
 十一月癸未朔、丁未、地震、  
 同六年三月一日庚辰、京都強震アリ、  
 〔類聚國史〕  
 天長六年三月庚辰朔、庚辰、地大震、  
 九月六日癸未、京都地震フ、  
 〔類聚國史〕  
 九月戊寅朔、癸未、地震、  
 十月二十一日乙卯、京都地震フ、  
 〔類聚國史〕  
 十月丁未朔、丁卯、地震、  
 同七年一月三日戊寅、出羽國地大ニ震ヒ、秋田城、四天王寺丈六佛像、四王堂舍等、悉ク倒壊セリ、  
 〔類聚國史〕  
 天長七年正月丙子朔、癸卯、出羽國驛傳奏云、鎮秋田城國司正六位上行介藤原朝臣行則、今月三日酉時、驟偶、今日辰刻大地震動、響如雷震、登時城廓官舍、并四天王寺丈六佛像、四王堂舍等、皆悉顛倒、城內屋仆、擊死百姓十五人、支體折損之類、二百餘人也、歷代以來、未曾有聞、地之崩、或處許丈、或處廿許丈、無處不崩、又城邊大河云、秋田河、其水涸盡、流細

震災防調會報告第四十六號

甲

如溝、疑是河底辟分、水漏通海歟、吏民騷動、未熟尋見、添河  
新別兩岸各崩塞、其水汎溢、近側百姓、懼營暴流、兢陟山崗、  
理須細錄損物馳牒、而震動一時七八度、風雪相并、迄今不止、  
後害難知、官舍埋雪、不能辨錄、夫邊要之固、以城爲本、今已  
頽落、何支非常、仍須差諸那援兵、相副見兵、備不虞者、臣未  
審商量、事在意外、仍且差援兵五百人配遣、准令馳驛言上、但  
損物色目、細錄進上、

四月戊辰、詔曰、朕以非昧祇禱、實畏三靈、震動四海、災化未寧、皇祚尙  
儲、管微之嘆、不招而臻、如聞出羽國地震爲災、山河致變、城宇頽毀、人物損  
傷、百姓無辜、奄遭非命、誠以政道有虧、降斯譴誡、朕之震怒、懸乎天下、靜念  
厥咎、其倍納隍、夫漢朝山崩、據條德以攘災、周郊地震、感警言而研慮、然則越  
已濟民之道、何能不仰古哉、所以特降使臣、就加存撫、其百姓居業毀陷者、使  
等與所在官吏議賑、脫常平租調、并不論民夷、開倉賑助、修屋宇勿使失職、  
賑亡之倫、早從賑恤、務極寬惠、式稱朕意、  
五月己卯、風自曾於大極殿、轉覆大能者經一七日、爲餘地震及毀壞之災也、

同月十二日丁亥、京都地震フ、

(類聚國史) 增  
丁亥、地震、

同月二十二日丁酉、京都地震フ、

(類聚國史) 增  
丁酉、地震、

八月十四日乙卯、京都地震フ、

(類聚國史) 增

八月壬寅朔、乙卯、地震、

十一月五日乙亥、京都地震フ、

(類聚國史) 增  
十一月辛未朔、乙亥、地震、

同八年三月二十一日己未、京都地震フ、

(類聚國史) 增  
天長八年三月己亥朔、己未、地震、

六月十四日庚辰、京都地震フ、

(類聚國史) 增  
六月丁卯朔、庚辰、地震、

八月二十六日辛卯、是夜、京都地震フコト三次、

(類聚國史) 增  
八月丙寅朔、辛卯、子刻地震三度、

同九年一月十日甲辰、京都地震フ、

(類聚國史) 增  
天長九年正月乙未朔、甲辰、地震、

同月二十七日辛酉、京都地震フ、

(類聚國史) 增  
辛酉、地震、

五月七日戊戌、京都地震フ、

震災防調會報告第四十六號

甲

(類聚國史) 增  
五月壬辰朔、戊戌、地震、

九月十四日癸卯、京都地震フ、

(類聚國史) 增  
九月庚寅朔、癸卯、地震、

同月十八日丁未、京都地震フ、

(類聚國史) 增  
丁未、地震、

同月二十一日庚戌、京都地震フ、

(類聚國史) 增  
庚戌、丑時地震、

同月二十二日辛亥、京都地震フ、

(類聚國史) 增  
辛亥、地震、

同十年二月二十四日辛巳、京都強震アリ、

(類聚國史) 增  
天長十年二月戊午朔、辛巳、巳刻地大震、

六月二十七日癸未、京都地震フ、

(續日本後紀) 三

天長十年六月丁巳朔、癸未、地震、

承和元年六月十八日丁酉、京都地震フ、

(續日本後紀) 三  
承和元年六月庚辰朔、丁酉、地震、

同二年三月二日丁未、京都地震フ、

(續日本後紀) 四  
承和二年三月丙午朔、丁未、地震、

同三年三月十二日辛亥、京都地震フ、

(續日本後紀) 五  
承和三年三月庚子朔、辛亥、地震、

五月二十日戊午、京都強震アリ、

(續日本後紀) 五  
五月己亥朔、戊午、大地震、

六月十三日庚戌、京都地震フ、

(續日本後紀) 五  
六月戊戌朔、庚戌、地震、

同四年六月十九日庚戌、京都地震フ、

(續日本後紀) 六  
承和四年六月壬辰朔、庚戌、地震、



號六十四第告報會查關防豫災震

甲

七月十六日丁丑、京都地震フ、

(續日本後紀)六

秋七月壬戌朔、丁丑、地震、

九月二日壬戌、京都地震フ、

(續日本後紀)六

九月辛酉朔、壬戌、地震、

同五年五月二十八日甲申、京都地震フ、

(類聚國史)七

承和五年五月丁巳朔、甲申、地震、○續日本後紀、コレ及ビ、六月二日地震フ逸セリ、

六月二日戊子、京都地震フ、

(類聚國史)七

六月丁亥朔、戊子、地震、

同六年四月七日戊午、京都地震フ、

(續日本後紀)八

承和六年夏四月壬子朔、戊午、地震、

七月八日丁亥、京都地震フ、

(續日本後紀)八

秋七月庚辰朔、丁亥、地震、

同七年一月十三日庚寅、京都地震フ、

(續日本後紀)九

承和七年春正月戊寅朔、庚寅、地震、

十月十二日甲寅、京都地震フ、

(續日本後紀)九

冬十月癸卯朔、甲寅、地震、

同八年二月十三日甲寅、信濃國地大ニ震フ、

(續日本後紀)十

承和八年二月壬寅朔、甲寅、信濃國言、地震、其聲如雷、一夜

間凡十四度上ニ九ノ字アリ、墻屋倒頽、公私共損、

七月、是月、伊豆國地大ニ震フ、

(續日本後紀)十

秋七月己卯朔、癸酉、○五昭曰、上之無私、運神功而下濟、至人忘己、推恩德而散仁、是以四配未艾、舜貽況首之憂、一物有違、萬發危之軫、朕寧不命、祇守宗

祿、陶萬機而停食、唯人獲而失寐、而惠化罔孚、至道猶醇、皆微之戒、不嘗而臻、如聞伊豆國地震爲憂、星落不完、人物損傷、或破屋、或震屋、或震屋、必照批政、瞻言往覆、內媿予懷、傳不云乎、人惟邦本、々固邦寧、朕之中機、臨切字育、故令殊親中使、就加慰撫、其人居散逸、生業陷失者、使等與所在國吏辯量、除當年租調、并開倉賑救、助修屋宇、給亡之徒、務從辦理、夫化之所被、無隔華夷、惠之攸覃、必該中外、宜不論民夷、普施優恤、詳賜寬弘之愛、副朕推滂之願、

○地震ノ日ハ、他ニ考フベキナシ、

同九年二月三日戊辰、京都地震フ、

(續日本後紀)十一

同十年五月十三日辛丑、京都地震フ、

(續日本後紀)十三

承和十年五月己丑朔、辛丑、地震、

十一月九日癸巳、京都地震フ、

(續日本後紀)十三

十一月乙酉朔、癸巳、地震、

同十二年八月四日戊寅、是夜、京都地震フ、

(續日本後紀)十五

承和十二年八月乙亥朔、戊寅、此夜地震、

同月二十五日己亥、京都地震フ、

(續日本後紀)十五

己亥、地震、

○コノ地震、流布本ニハ缺ケタリ、今細非真藏藏古抄本、豐宮崎文庫本、類聚國史等ニ據リテコレヲ補ヘリ、

同十三年二月二十七日戊戌、京都地震フ、

(續日本後紀)十六

承和十三年二月壬申朔、戊戌、地震、

嘉祥元年二月二十二日壬子、京都地震フ、

(續日本後紀)十六

承和十五年 〇嘉祥 二月辛卯朔、壬子、地震、聲如雷、群犬驚吠、

甲

號六十四第告報會查關防豫災震

承和九年二月丙寅朔、戊辰、地震、

同月二十九日甲午、京都地震フ、

(續日本後紀)十一

甲午、地震、

三月十六日辛亥、京都地震フ、

(續日本後紀)十二

三月丙申朔、辛亥、地震、

六月十五日戊寅、京都地震フ、

(續日本後紀)十二

六月甲子朔、戊寅、地震、

八月十四日乙亥、京都地震フ、

(續日本後紀)十二

八月壬戌朔、乙亥、地震、

十一月十四日甲辰、京都地震フ、

(續日本後紀)十二

十一月辛卯朔、甲辰、地震、

十二月十二日壬申、京都地震フ、

(續日本後紀)十三

十二月辛酉朔、壬申、地震、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

○類聚國史、單ニ地震ニ作レリ、

三月八日丁卯、京都地震フ、

(續日本後紀) 十八

三月庚申朔、丁卯、大地頻震、○コレ及ビ下ノ二震ハ、類聚國史ニ載セズ、

同月二十八日丁亥、京都地震フ、

(續日本後紀) 十八

丁亥、地震、

四月三日壬辰、京都地震フ、

(續日本後紀) 十八

四月庚寅朔、壬辰、地震、

五月二十二日庚辰、京都地震フ、

(續日本後紀) 十八

五月己未朔、庚辰、是日地震、

六月二十四日辛亥、京都地震フ、

(續日本後紀) 十八

六月戊子朔、辛亥、地震、

同月二十五日壬子、京都地震フ、

(續日本後紀) 十八

壬子、地震、

十月七日癸巳、京都地震フ、

(續日本後紀) 十八

冬十月丁亥朔、癸巳、地震、

同月十三日己亥、京都地震フ、

(類聚國史) 埋

嘉祥元年十月己亥、地震、

同月二十日丙午、京都地震フ、

(續日本後紀) 十八

丙午、地震、

十二月二日丁亥、京都地震フ、

(續日本後紀) 十八

十二月丙戌朔、丁亥、地震、

同二年三月十日甲子、京都地震フ、

(續日本後紀) 十八

嘉祥二年三月乙卯朔、甲子、地震、

四月十三日甲申、京都地震フ、

(續日本後紀) 十八

夏四月甲申朔、丙申、地震、

七月四日乙卯、京都地震フ、

(續日本後紀) 十九

秋七月壬子朔、乙卯、地震、

同月十九日庚午、京都地震フ、

(續日本後紀) 十九

庚午、地震、

同三年一月三日壬午、京都地震フ、

(續日本後紀) 二十

嘉祥三年春正月庚辰朔、壬午、地震、

同月二十三日壬寅、京都地震フ、

(續日本後紀) 二十

壬寅、地震、

二月二十一日庚午、京都地震フ、

(續日本後紀) 二十

二月庚戌朔、庚午、地震、

三月五日癸未、京都地震フ、

(續日本後紀) 二十

三月己卯朔、癸未、地震、

同月二十一日己亥、京都地震フ、

(續日本後紀) 二十

己亥、地震、

四月六日癸丑、京都地震フ、

(文德實錄) 一

嘉祥三年夏四月戊申朔、癸丑、地震、

同月十五日壬戌、京都地震フ、

(文德實錄) 一

壬戌、地震、

八月二十六日辛未、京都地震フ、

(文德實錄) 二

八月丙午朔、辛未、地震、自西北來、鷄雉皆驚、

十月十六日庚申、出羽國地大ニ震ヒ、國府井口ノ

地、山谷處ヲ易フ、又海波ヲ颶ゲ、壓死スルモノ

甚ダ衆シ、

(文德實錄) 二

冬十月乙巳朔、庚申、出羽國上言、地大震裂、山谷易處、壓死

者衆、

十一月甲戌朔、丙申、詔曰、紫極高映、運亨邇而不曾、披風降居、播慈愛而無

恃、故助華繼嗣、未隔於勳勞、禹覆垂風、猶同於含育、朕奉先朝、虔撫令嗣、

食荼誓以銷神、唯恐庶以刻思、而今至誠不暢、小信未孚、陰德備和、柔祇告譴、

出羽州壤、備應銅龍之機、送府黎甦、空被暴害之害、邑居震蕩、陷辱載而不安、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

嘉祥三年 仁壽元年

城樓傾頽、想觀感而益恐、或流子視、或至於死傷、獨作母臨、何憐於拯救、宜聽  
其便、就服恩光、其被災尤甚、不能自存、使國商並、倘免租調、并不問民狀、開  
介庫貸其生業、莫使重困、崩地毀屋之下、所有殘屍露骸、官爲收埋、務中憐  
恤、庶俾瘞凍者知狹穢之溫、阻飢者得廉糶之飽、

(三代實錄) 五十

仁和三平五月廿日癸巳、式部省奏請國餘錢擬郡司擬文(中略)先是、出羽守從  
五位下坂上大宿禰茂樹曾上、國府在出羽郡井口地、即是去延曆年中、陸奧守  
從五位上小野朝臣守、攝大將軍從三位坂上大宿禰田村麻呂論奏所建也、去  
嘉祥三年、地大震動、形勢變改、既成雲泥、加之海水漲移、追府六里所、大川崩  
潰、去道一町餘、兩端受害、無力隨遷、運送之期在於日暮、望請、運送最上郡  
大山鄉保寶土野、據其險固、避彼危殆者(下略)

仁壽元年一月十二日乙酉、京都地震フ、

(文德實錄) 三

嘉祥四年○仁壽 春正月甲戌朔、乙酉、地震、

二月二日乙巳、京都地震フ、

(文德實錄) 三

二月甲辰朔、乙巳、地震、

三月十五日丁亥、京都地震フ、

(文德實錄) 三

三月癸酉朔、丁亥、地震、

四月四日丙午、京都地震フ、

(文德實錄) 三

夏四月癸卯朔、丙午、地震、

同月二十九日辛未、京都地震フ、

(文德實錄) 三

辛未晦、地震、

五月十一日壬午、京都地震フ、

(文德實錄) 三

五月壬申朔、壬午、地震、

同月二十四日乙未、京都地震フ、

(文德實錄) 三

乙未、地震、

七月八日戊寅、京都地震フ、

(文德實錄) 三

秋七月辛未朔、戊寅、地震、

十月五日癸卯、京都地震フ、

(文德實錄) 三

冬十月己亥朔、癸卯、地震、

同月十三日辛亥、京都地震フ、

(文德實錄) 三

辛亥、地震、

十一月二十一日己丑、京都地震フ、

(文德實錄) 三

十一月己巳朔、己丑、地震、

同二年二月三日庚子、京都地震フ、

(文德實錄) 四

仁壽二年二月戊戌朔、庚子、地震、

三月十二日戊寅、京都地震フ、

(文德實錄) 四

三月丁卯朔、戊寅、地震、

四月十八日甲寅、京都地震フ、

(文德實錄) 四

夏四月丁酉朔、甲子、地震、

六月三日戊戌、京都地震フ、

(文德實錄) 四

六月丙申朔、戊戌、地震、

八月二十九日癸亥、京都地震フ、

(文德實錄) 四

八月乙未朔、癸亥晦、地震、

閏八月二十二日乙酉、京都地震フ、

(文德實錄) 四

閏八月甲子朔、乙酉、地震、

九月八日辛丑、京都地震フ、

(文德實錄) 四

九月甲午朔、辛丑、地震、

十月五日丁卯、京都地震フ、

(文德實錄) 四

冬十月癸亥朔、丁卯、地震、

同月十八日庚辰、京都地震フ、

(文德實錄) 四

庚辰、地震、有聲如雷、

十一月七日己亥、京都地震フ、

(文德實錄) 四

十一月癸巳朔、己亥、地震、

同三年一月十三日甲辰、京都地震フ、

(文德實錄) 五

仁壽三年春正月壬辰朔、甲辰、地震、

同月五日丙午、京都地震フ、

(文德實錄) 五

震災豫防會告報第四十六號

甲

丙午、地震、

○コノ地震、流布本ニ載セズ、今一本及ビ類聚國史ニ據リテ之ヲ補ヘリ、

三月十八日戊申、京都地震フ、

(文德實錄)五

三月辛卯朔、戊申、地震、

四月二日壬戌、京都地震フ、

(文德實錄)五

夏四月辛酉朔、壬戌、地震、

七月四日癸巳、京都地震フ、

(文德實錄)五

秋七月庚寅朔、癸巳、地震、

同月十五日甲辰、京都地震フ、

(文德實錄)五

甲辰、地震、

同月二十二日辛亥、京都地震フ、

(文德實錄)五

辛亥、地震、

八月二十四日壬午、京都地震フ、

(文德實錄)五

八月己未朔、壬午、地震、

十月二日己未、京都地震フ、

(文德實錄)五

冬十月戊午朔、未己、地震、

十一月十三日己亥、京都地震フ、

(文德實錄)五

十一月丁亥朔、己亥、地震、

齊衡元年五月十七日庚子、京都地震フ、

(文德實錄)六

仁壽四年 齊衡元年 五月甲申朔、庚子、地震、

六月三十日癸未、京都地震フ、

(文德實錄)六

六月甲寅朔、癸未、地震、

八月一日癸丑、京都地震フ、

(文德實錄)六

八月癸丑朔、地震、

九月二十日壬寅、京都地震フ、

(文德實錄)六

九月癸未朔、壬寅、地震、

震災豫防會告報第四十六號

甲

十一月三日甲申、京都地震フ、

(文德實錄)六

十一月壬午朔、甲申、地震、

同月二十二日癸卯、京都地震フ、

(文德實錄)六

癸卯、地震、

同二年四月二日庚戌、京都地震フ、

(文德實錄)七

齊衡二年夏四月己酉朔、庚戌、地震、

五月十日丁巳、京都地震フ、

(文德實錄)七

五月戊申朔、丁巳、地震、

同月十一日戊午、京都地震フ、

(文德實錄)七

戊午、地震、

六月二十一日戊戌、京都地震フ、

(文德實錄)七

六月戊寅朔、戊戌、地震、

同月二十五日壬寅、京都地震フ、

(文德實錄)七

壬寅、地震、

七月二十六日壬申、京都地震フ、

(文德實錄)七

秋七月丁未朔、壬申、地震、

八月一日丁丑、京都地震フ、

(文德實錄)七

八月丁丑朔、地震、

同月二日戊寅、京都地震フ、

(文德實錄)七

戊寅、地震、

同月二十五日辛丑、京都地震フ、

(文德實錄)七

辛丑、地震、

九月九日乙卯、是夜、京都地震フ、

(文德實錄)七

九月丁未朔、乙卯、是夜、地震、

同月十日丙辰、京都地震フ、

(文德實錄)七

震災豫防會報告第四十六號

甲

丙辰、地亦震、  
 同月十九日乙丑、京都地震フ、  
 (文德實錄)七  
 乙丑、地震、  
 同月二十日丙寅、京都地震フ、  
 (文德實錄)七  
 丙寅、地亦震、  
 同月二十九日乙亥、京都地震フ、  
 (文德實錄)七  
 乙亥晦、地震、  
 十月三日戊寅、京都地震フ、  
 (文德實錄)七  
 冬十月丙子朔、戊寅、地震、  
 十一月十五日庚申、京都地震フ、  
 (文德實錄)七  
 十一月丙午朔、庚申、地震、  
 十二月十二日丁亥、京都地震フ、  
 (文德實錄)七  
 十二月丙子朔、丁亥、地震、

同三年二月二十日癸巳、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 齊衡三年二月甲戌朔、癸巳、地震、有聲如雷、  
 同月二十一日甲午、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 甲午、地亦震、  
 三月、是月、京都地震、震ヒ、屋舍佛塔等傾毀セリ、  
 (文德實錄)八  
 三月、是月、地震、震、京師及城南、或屋舍毀壞、或佛塔倚傾、  
 四月一日癸酉、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 夏四月癸酉朔、地震、  
 同月二日甲戌、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 甲戌、地震、  
 六月一日壬申、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 六月壬申朔、地震、  
 同月二日癸酉、京都地震フ、

震災豫防會報告第四十六號

甲

(文德實錄)八  
 癸酉、地亦震、  
 七月十六日丙辰、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 秋七月辛丑朔、丙辰、地震、  
 同月十八日戊午、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 戊午、地震、  
 同月二十八日戊辰、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 戊辰、地震、  
 九月二十一日辛酉、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 九月辛丑朔、辛酉、地震、  
 同月二十五日乙丑、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 乙丑、地震、  
 十月一日辛未、京都地震フ、  
 (文德實錄)八

冬十月辛未朔、地震、  
 同月十八日戊子、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 戊子、地震、  
 同月二十四日甲午、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 甲午、地震、  
 同月二十五日乙未、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 乙未、地亦震、  
 十一月一日庚子、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 十一月庚子朔、地亦震、  
 同月二日辛丑、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 辛丑、地震、  
 同月十四日癸丑、京都地震フ、  
 (文德實錄)八  
 癸丑、地震、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

十二月十日己卯、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>八</sup>

十二月庚午朔、己卯、地震、

天安元年二月二日庚午、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>九</sup>

齊衡四年<sup>○</sup>天安元年二月己巳朔、庚午、地震、

同月七日乙亥、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>九</sup>

乙亥、地震、

同月十四日壬午、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>九</sup>

壬午、地震、

同月十六日甲申、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>九</sup>

甲申、地震、

同月二十一日己丑、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>九</sup>

己丑、地震、

四月二十日丁亥、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>九</sup>

夏四月戊辰朔、丁亥、地震、

五月十一日丁未、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>九</sup>

五月丁酉朔、丁未、地震、

同月二十日丙辰、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>九</sup>

丙辰、地震、

七月八日癸卯、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>九</sup>

七月丙申朔、癸卯、地震、

(類聚國史)<sup>三</sup>

天安元年秋七月癸卯、地大震、

(參考)

(文德實錄)<sup>九</sup>

秋七月丙申朔、己亥、<sup>○</sup>雷雨、<sup>○</sup>霹靂有聲如雷四度、<sup>○</sup>辛丑、<sup>○</sup>六乾維有聲如雷五

六度、又霹靂時々有聲如雷、<sup>○</sup>癸卯、<sup>○</sup>八地震、<sup>○</sup>乾維兩維有聲如雷、

(文德實錄)<sup>九</sup>

己未、夜地震、其響如雷、

九月二十五日己未、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>九</sup>

九月乙未朔、己未、地震、

十月九日癸酉、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>九</sup>

冬十月乙丑朔、癸酉、地震、

同二年三月二十三日甲申、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>十</sup>

天安二年三月壬戌朔、甲申、地震、

四月二十三日甲寅、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>十</sup>

夏四月壬辰朔、甲寅、地震、

五月二十六日丙戌、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>十</sup>

五月辛酉朔、丙戌、地震、

六月十三日壬寅、京都地震フ、

(文德實錄)<sup>十</sup>

六月庚寅朔、壬寅、地震、

九月二十二日庚辰、京都地震フ、

(三代實錄)<sup>一</sup>

天安二年九月廿二日庚辰、地震、

十一月九日丙寅、京都地震フ、

(三代實錄)<sup>一</sup>

十一月九日丙寅、地震、

十二月十三日庚子、京都地震フ、

(三代實錄)<sup>一</sup>

十二月十三日庚子、地震、

貞觀元年七月二十七日庚辰、京都地震フ、

(三代實錄)<sup>三</sup>

貞觀元年秋七月廿七日庚辰、地震、

八月八日辛卯、京都地震フ、

(三代實錄)<sup>三</sup>

八月八日辛卯、地震、

九月十四日丙寅、京都地震フ、

(三代實錄)<sup>三</sup>

九月十四日丙寅、地震、

十月二十九日辛亥、京都地震強ク震フ、

(三代實錄)<sup>三</sup>

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

號六十四第告報會查關防豫災震

甲

冬十月廿九日辛亥晦、地震、

(類聚國史)堀

貞觀元年十月廿九日辛亥晦、地大震、

十一月十二日癸亥、京都地震フ、

(三代實錄)三

十一月十二日癸亥、地震、

同二年四月二十二日壬寅、京都地震フ、

(三代實錄)四

貞觀二年夏四月廿二日壬寅、地震、

五月五日甲寅、京都地震フ、

(三代實錄)四

五月五日甲寅、地震、雷電雨雹、

同月十八日丁卯、京都地震フ、

(三代實錄)四

十八日丁卯、地震、雷(類聚國史、雷ノ下雨雹、ニ電ノ字アリ、)

六月十七日丙申、京都地震フ、

(三代實錄)四

六月十七日丙申、地震、

同月二十二日辛丑、京都地震フ、

(三代實錄)四

廿二日辛丑、地亦震、

同月二十五日甲辰、京都地震フ、

(三代實錄)四

廿五日甲辰、地震、

七月十四日壬戌、京都地震フ、

(三代實錄)四

秋七月十四日壬戌、地震、

同月十七日乙丑、京都地震フ、

(三代實錄)四

十七日乙丑、地震、

同月二十四日壬申、京都地震フ、

(三代實錄)四

廿四日壬申、地震、

九月七日甲寅、京都地震フ、

(三代實錄)四

九月七日甲寅、地震、

十月七日癸未、京都地震フ、

(三代實錄)四

號六十四第告報會查關防豫災震

甲

冬十月七日癸未、地震、

閏十月一日丁未、京都地震フ、

(三代實錄)四

閏十月丁未朔、地震、

同二十三日己巳、京都地震フ、

(三代實錄)四

廿三日己巳、地震、

十二月四日己酉、京都地震フ、

(三代實錄)四

十二月丙午朔、四日己酉、地震、

同三年一月九日甲申、京都地震フ、

(三代實錄)五

貞觀三年春正月九日甲申、地震、

四月七日辛亥、京都地震フ、

(三代實錄)五

夏四月七日辛亥、地震、

五月十三日丙戌、京都地震フ、

(三代實錄)五

五月十三日丙戌、地震、

同月十九日壬辰、京都地震フ、

(三代實錄)五

十九日壬辰、地震、

同月二十日癸巳、京都地震フ、

(三代實錄)五

廿日癸巳、地震、

六月二十三日丙寅、京都地震フ、

(三代實錄)五

六月廿三日丙寅、地震、

八月十七日戊午、京都地震フ、

(三代實錄)五

八月十七日戊午、地震、

同四年一月十一日庚辰、京都地震フ、

(三代實錄)六

貞觀四年春正月十一日庚辰、地震、

同月二十五日甲午、京都地震フ、

(三代實錄)六

廿五日甲午、地震、

二月十七日丙辰、京都地震フ、

貞觀四年

(三代實錄)\* 二月十七日丙辰、地震、  
 同月二十五日甲子、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 廿五日甲子、地震、  
 三月十一日己卯、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 三月十一日己卯、地震、  
 同月二十八日丙申、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 廿八日丙申、地震、  
 五月十六日癸未、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 五月十六日癸未、地震、  
 六月十六日癸丑、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 六月十六日癸丑、地震、  
 七月二十一日戊子、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 七月二十一日戊子、京都地震フ、

七月廿一日戊子、地震、  
 同月二十七日甲午、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 廿七日甲午、地震、  
 九月十五日辛巳、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 九月十五日辛巳、地震、  
 同月二十一日丁亥、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 廿一日丁亥、地震、  
 同月二十四日庚寅、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 廿四日庚寅、地震、  
 同月二十九日乙未、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 廿九日乙未、地震、  
 十月九日甲辰、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 十月九日甲辰、地震、

三三

同月二十八日癸亥、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 廿八日癸亥、地震、  
 十一月三日丁卯、京都地強ク震フ、  
 (三代實錄)\* 十一月三日丁卯、地大震動、  
 (類聚國史) 十一日三月三日丁卯、地震、  
 十二月十六日庚戌、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 十二月十六日庚戌、地震、  
 同月二十七日辛酉、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 廿七日辛酉、地震、  
 同五年二月四日丁酉、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 貞觀五年二月四日丁酉、地震、  
 四月十四日丙午、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 夏四月十四日丙午、地震、

六月十七日戊申、越中、越後兩國、地大ニ震フ、  
 (三代實錄)\* 六月十七日戊申、越中、越後等國、地大震、駿谷易處、水泉  
 涌出、壞民廬舍、壓死者衆、自此以後、每日常震、  
 閏六月九日庚午、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 閏六月九日庚午、地震、  
 八月八日戊辰、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 八月八日戊辰、地震、  
 九月八日丁酉、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 九月八日丁酉、地震、  
 十一月十三日壬寅、京都地震フ、  
 (三代實錄)\* 十一月十三日壬寅、地震、  
 同六年七月十七日辛丑、駿河國富士山火ヲ噴キ、  
 土石鑠流シテ甲斐國八代郡本栖、剗ノ兩湖、及ヒ  
 民家ヲ埋没ス、

貞觀五年、六年

三三



號六十四第告報會查調防豫災震

甲

(三代實錄)八

貞觀六年七月十七日辛丑、甲斐國言、駿河國富士大山、忽有暴火、燒碎崗巒、草木焦熱、土鏗石流、埋八代郡本栖並剗兩水海、水熱如湯、魚鼈皆死、百姓居宅、與海共埋、或有宅無人、其數難記、兩海以東亦有水海、名曰河口海、火焰赴河口海、本栖剗等海、未燒埋之前、地大震動、雷電暴雨、雲霧晦冥、山野難辨、然後有此災異焉、

八月五日己未、下知甲斐國司云、駿河國富士山火、彼國言上、夾之著龜云、淺間名神廟宜觀等不動靈殿之所致也、仍應鎮謝之狀、告知國訖、宜亦奉幣解謝焉、

九月四日戊子、京都地震フ、

(三代實錄)九

九月四日戊子、地震、

同月二十六日庚戌、京都地震フ、

(三代實錄)九

廿六日庚戌、地震、

十月三日丙辰、肥後國阿蘇山ノ神池震動シ、池水空中ニ沸騰ス、又比賣神嶺ノ一石神頽崩セリ、

(三代實錄)九

十二月廿六日己卯、太宰府言、肥後國阿蘇郡正二位勳五等健甞龍命神靈池、去十月三日夜、有聲震動、池水沸騰空中、東西洒落、其落東方者如有延緩、廣十許町、水色如漿、粘著草木、雖經旬日不消解、又比賣神嶺、元來有三石神、高四許丈、同夜

一石神頽崩、府司等決之龜筮云、應有火疫之災、

(三代實錄)九

同月九日壬戌、京都地震フ、

冬十月九日壬戌、地震、

(三代實錄)九

同月十二日乙丑、京都強震アリ、

同七年一月十四日丙申、京都地震フ、

(三代實錄)十

貞觀七年春正月十四日丙申、地震、

同月二十九日辛亥、京都地震フ、

(三代實錄)十

廿九日辛亥、地震、

三月二十二日癸卯、京都地震フ、

(三代實錄)十

三月廿二日癸卯、地震、

四月十二日壬戌、京都地震フ、

(三代實錄)十

夏四月十二日壬戌、地震、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

九月二十四日壬寅、京都地震フ、

(三代實錄)十一

九月廿四日壬寅、地震、

十一月一日戊寅、京都地震フ、

(三代實錄)十一

十一月戊寅朔、地震、

同月十四日辛卯、是夜、京都地震フ、

(三代實錄)十一

十四日辛卯、是夜、地震、

十二月二日己酉、京都地震フ、

(三代實錄)十一

十二月戊申朔、二日己酉、地震、

同八年一月二十五日壬寅、京都地震フ、

(三代實錄)十二

貞觀八年春正月廿五日壬寅、地震、

閏三月五日庚戌、京都地震フ、

(三代實錄)十二

閏三月五日庚戌、地震、

六月七日庚辰、京都地震フ、

(三代實錄)十三

六月七日庚辰、地震、

同月十六日己丑、京都地震フ、

(三代實錄)十三

十六日己丑、地震、

八月十五日丁亥、京都地震フ、

(三代實錄)十三

八月十五日丁亥、地震、

十月十九日庚寅、京都地震フ、

(三代實錄)十三

冬十月十九日庚寅、地震、

十一月七日戊申、是夜、京都地震フ、

(三代實錄)十三

十一月七日戊申、此夜地震、

十二月十日辛巳、京都地震フ、

(三代實錄)十三

十二月十日辛巳、地震、

同九年一月二十日己酉、豐後國速見郡鶴見山ノ

三池震動シ、沙泥ヲ飛シテ數里外ニ及ベリ、

(三代實錄)十四

二月廿六日丙申、太宰府言、從五位上火男神、從五位下火賣神二社、在豐後國速見郡鶴見山嶺、山頂有三池、一池泥水色青、一池黑、一池赤、去正月廿日地震、其聲如雷、俄而鼻如硫黃、遍滿國內、磐石飛亂、上下無數、石大者方丈、小者如甕、雲黑、夜炎火熾、沙泥雪散、積於數里、池中元出溫泉、泉水沸騰、自成河流、山脚道路、往還不通、溫泉之水、入於衆流、魚醉死者千萬數、其震動之聲、經歷三日、

同月二十七日戊辰、京都地震フ、

(三代實錄)十五

貞觀九年、春正月廿七日戊辰、地震、

二月一日辛未、京都地震フ、

(三代實錄)十四

二月辛未朔、地震、

五月十二日庚戌、肥後國阿蘇山震動シテ、二百五十餘丈崩レタリ、

(三代實錄)十四

八月六日壬申、太宰府言、肥後國阿蘇郡正二位勳五等健磐龍命神、正四位下藤原所居山嶺、去五月十一日夜奇光照耀、十二日朝震動乃崩、廣五十餘丈、長二百五十餘丈、

八日甲戌、下知太宰府、令豐後國阿蘇郡山嶺之能將、

同月十三日辛亥、京都地震フ、

(三代實錄)十四

五月十三日辛亥、地震、

六月三十日丁酉、京都地震フ、

(三代實錄)十四

六月卅日丁酉、地震、

七月二十五日壬戌、京都地震フ、

(三代實錄)十四

秋七月廿五日壬戌、地震、

八月十四日庚辰、京都地震フ、

(三代實錄)十四

八月十四日庚辰、地震、

同月二十五日辛卯、京都地震フ、

(三代實錄)十四

廿五日辛卯、地震、

九月六日壬寅、京都地震フ、

(三代實錄)十四

九月六日壬寅、地震、

十月五日庚午、京都地震フ、

(三代實錄)十四

冬十月五日庚午、地震、

同十年四月十三日丁丑、京都地震フ、

(三代實錄)十五

貞觀十年四月十三日丁丑、地震、

四月二十八日壬辰、京都地震フ、

(三代實錄)十五

四月廿八日壬辰、地震、

五月十九日壬子、京都地震フ、

(三代實錄)十五

五月十九日壬子、地震、

七月八日己亥、播磨、山城二國、地大ニ震フ、

(三代實錄)十五

秋七月八日己亥、地震、内外垣屋、往々頽破、十五日丙午、播磨國言、今月八日地大震動、諸郡官舍、諸定額寺堂塔、皆盡頽倒、

同月九日庚子、京都地震フ、

(三代實錄)十五

九日庚子、地震、

同月十二日癸卯、京都地震フ、

(三代實錄)十五

十二月癸卯、地震、

同月十三日甲辰、京都地震フ、

(三代實錄)十五

十二月甲辰、地震、

同月十六日丁未、京都地震フ、

(三代實錄)十五

十六日丁未、地震、

同月二十日辛亥、京都地震フ、

(三代實錄)十五

廿日辛亥、地震、

同月二十一日壬子、京都地震フ、

(三代實錄)十五

廿一日壬子、地震、

八月十日辛未、京都地震フ、

(三代實錄)十五

八月十日辛未、地震、

同月十二日癸酉、京都地震フ、

(三代實錄)十五

十二日癸酉、地震、

震災防備會報告第四十六號

甲

同月十四日乙亥、京都地震フ、

(三代實錄)十五

十四日乙亥、地震、

同月十六日丁丑、京都地震フ、

(三代實錄)十五

十六日丁丑、地震、

同月二十九日庚寅、京都地震フ、

(三代實錄)十五

廿九日庚寅、地震、

九月七日丁酉、京都地震フ、

(三代實錄)十五

九月七日丁酉、地震、

十月二十七日丁亥、京都地震フ、

(類聚國史)埋

十月廿七日丁亥、地震、

十一月二十七日丙辰、京都地震フ、

(三代實錄)十五

十一月廿七日丙辰、地震、

十二月一日庚申、京都地震フ、

(三代實錄)十五

十二月庚申朔、地震、

同月十日己巳、京都地震フ、

(三代實錄)十五

十日己巳、地震、

同月十六日乙亥、京都地震フ、

(三代實錄)十五

十六日乙亥、地震、

同十一年二月四日壬辰、是夜、京都地震フ、

(三代實錄)十六

貞觀十一年二月四日壬辰、是夜地震、

同月二十九日丁巳、京都地震フ、

(三代實錄)十六

廿九日丁巳、地震、

五月二十六日癸未、陸奥國地大ニ震ヒテ城邑ヲ

破壊シ、海嘯哮吼シテ溺死太多シ、

(三代實錄)十六

五月廿六日癸未、陸奥國地大震動、流光如晝隱映、頃之、人民

叫呼、伏不能起、或屋仆壓死、或地裂埋殘、馬牛駭奔、或相昇

震災防備會報告第四十六號

甲

踏、城廓倉庫、門櫓垣壁、頽落顛覆、不知其數、海口哮吼、聲似雷震、驚濤涌潮、沂河漲長、忽至城下、去海數百里、浩浩不弁其涯、原野道路、愆為滄溟、乘船不遑、登山難及、溺死者千許、資產苗稼、殆無孑遺焉、

九月七日辛酉、以從五位上行左衛門權佐兼因幡權介紀朝臣春枝、為檢校陸奥國地震使、判官一人、主面一人、

冬十月十三日丁酉、詔曰、維皇代、未隔於憂勞、號舜時、猶均於憂勞、豈唯地震周日、烟文於景實朝、早流於年、鴻帝以之即己、朕以冥味、欽若鴻圖、俯德以奉靈心、茲政而從民、思使華土之內、同保福於途生、編戶之間、共銷災於非命、而迄化同季、至誠不惑、上至隆讓、以賦斂方、如陸奥國境地震尤甚、或海水暴溢而為患、或城宇頽壓而致殃、百姓何辜、罹斯禍毒、憮然愧懼、實深在予、今遣使者、就相慰問、使與國司、不論民夷、動自臨撫、既死者盡加收殮、其存者詳察賑恤、其被害太甚者、勿論租調、錄登孤寡、不能自立者、在所附放、厚宜支濟、務盡神恤之旨、俾若朕親觀焉、

七月七日癸亥、京都地震フ、

(三代實錄)十六

秋七月七日癸亥、地震、

九月二十五日己卯、京都地震フ、

(三代實錄)十六

九月廿五日己卯、地震、

十二月十三日丙申、是夜、京都地震フ、

(三代實錄)十六

十二月十三日丙申、是夜地震、

同月二十三日丙午、京都地震フ、

(三代實錄)十六

廿三日丙午、地震、

同十二年一月十六日己巳、京都地震フ、

(三代實錄)十七

貞觀十二年正月十六日己巳、地震、

三月七日己未、京都地震フ、

(三代實錄)十七

三月七日己未、地震、

五月六日丁巳、京都地震フ、

(三代實錄)十九

五月六日丁巳、地震、

十月七日乙酉、京都地震フ、

(三代實錄)十七

冬十月七日乙酉、地震、

十一月二十五日癸酉、京都地震フ、

(三代實錄)十九

十一月廿五日癸酉、地震、

同十三年七月十日甲寅、京都地震フ、

(類聚國史)埋

震災豫防會查報告第四十六號

甲

貞觀十三年七月十日甲寅、地震、  
 同月二十五日己巳、京都地震フ、  
 (類聚國史) 七  
 廿五日己巳、地震、  
 八月七日辛巳、京都地震フ、  
 (類聚國史) 七  
 八月七日辛巳、地震、  
 同月十七日辛卯、京都地震フ、  
 (類聚國史) 七  
 十七日辛卯、地震、  
 九月二日乙亥、京都地震フ、  
 (類聚國史) 七  
 九月甲戌朔、二日乙亥、地震、  
 同月二十八日辛丑、京都地震フ、  
 (三代實錄) 三  
 貞觀十三年九月廿八日辛丑、地震、  
 十一月二十二日甲午、京都地震フ、  
 (三代實錄) 三  
 十一月廿二日甲午、雷、地震、

同月二十九日辛丑、京都地震フ、  
 (三代實錄) 三  
 廿九日辛丑晦、地震、  
 同十四年一月二十二日癸巳、京都地震フ、  
 (三代實錄) 三  
 貞觀十四年春正月廿二日癸巳、地震、  
 三月二十七日丁酉、京都地震フ、  
 (三代實錄) 三  
 三月廿七日丁酉、地震、  
 六月十六日乙卯、京都地震フ、  
 (類聚國史) 七  
 貞觀十四年六月十六日乙卯、地震、  
 同月二十四日癸亥、京都地震フ、  
 (類聚國史) 七  
 廿四日癸亥、地震、  
 同月二十九日戊辰、京都地震フ、  
 (類聚國史) 七  
 廿九日戊辰、地震、  
 七月二十七日乙未、京都地震フ、

震災豫防會查報告第四十六號

甲

(類聚國史) 七  
 七月廿七日乙未、地震、  
 九月一日戊辰、京都地震フ、  
 (三代實錄) 三  
 九月戊辰朔、地震、  
 同月三十日丁酉、京都地震フ、  
 (三代實錄) 三  
 卅日丁酉、地震、  
 十月二日己亥、是夜、京都地震フ、  
 (三代實錄) 三  
 冬十月二日己亥、夜地震、  
 十一月十七日癸未、京都地震フ、  
 (類聚國史) 七  
 十一月十七日癸未、地震、  
 同月二十三日己丑、京都地震フ、  
 (三代實錄) 三  
 十一月廿三日己丑、地震、  
 同月二十八日甲午、京都地震フ、  
 (三代實錄) 三

廿八日甲午、地震、  
 十二月三日己亥、京都地震フ、  
 (三代實錄) 三  
 十二月丁酉朔、三日己亥、地震、  
 同十五年一月二十日丙戌、京都地震フ、  
 (三代實錄) 三  
 貞觀十五年春正月廿日丙戌、地震、  
 二月二日丁酉、京都地震フ、  
 (三代實錄) 三  
 二月二日丁酉、地震、  
 同月十八日癸丑、京都地震フ、  
 (三代實錄) 三  
 十八日癸丑、地震、  
 三月十六日庚辰、京都地震フ、  
 (三代實錄) 三  
 三月十六日庚辰、地震、  
 四月十四日戊申、京都地強ク震フ、  
 (三代實錄) 三  
 夏四月十四日戊申、地大震動、

貞觀十五年、十六年

四二

同月十八日壬子、京都地震フ、  
(類聚國史)增

貞觀十五年四月十八日壬子、地震、

同月二十四日戊午、京都地震フ、

(三代實錄)三十三

四月廿四日戊午、地震、

五月一日甲子、京都地震フ、

(三代實錄)三十三

五月甲子朔、地震、

同月十一日甲戌、京都地震フ、

(類聚國史)增

五月十一日甲戌、地震、

六月十四日丁未、京都地震フ、

(三代實錄)三十四

六月甲午朔、十四日丁未、地震、

九月十三日乙亥、京都地震フ、

(類聚國史)增

九月十三日乙亥、地震、

十月二十九日庚申、京都地震フ、

(類聚國史)增

十月廿九日庚申、地震、

同十六年二月十四日甲辰、京都地震フ、

(類聚國史)增

貞觀十六年二月十四日甲辰、地震、

三月十六日乙亥、京都地震フ、

(類聚國史)增

三月十六日乙亥、地震、

同月二十一日庚辰、京都地震フ、

(類聚國史)增

廿一日庚辰、地震、

同月二十五日甲申、京都地震フ、

(類聚國史)增

廿五日甲申、地震、

四月一日己丑、京都地震フ、

(類聚國史)增

夏四月己丑朔、地震、

閏四月十八日丙子、京都地震フ、

(類聚國史)增

閏四月十八日丙子、地震、

貞觀十六年、十七年

四三

同月二十三日辛巳、京都地震フ、

(類聚國史)增

廿三日辛巳、地震、

五月四日辛卯、京都地震フ、

(類聚國史)增

五月戊子朔、四日辛卯、地震、

六月二十一日丁丑、京都地震フ、

(類聚國史)增

六月廿一日丁丑、地震、

七月二日戊子、京都地震フ、

(三代實錄)三十五

貞觀十六年秋七月丁亥朔、二日戊子地震、

九月十七日壬寅、京都地震フ、

(三代實錄)三十五

九月十七日壬寅、地震、

十一月十三日戊戌、京都地震フ、

(三代實錄)三十五

十一月十三日戊戌、地震、

十二月二十九日癸未、京都強震アリ、

(類聚國史)增

十二月廿九日癸未、酉時地大震動、

同十七年二月十二日丙寅、京都地震フ、

(三代實錄)三十七

貞觀十七年二月十二日丙寅、地震、

同月十八日壬申、京都地震フ、

(類聚國史)增

貞觀十七年二月十八日壬申、地震、

同月二十九日癸未、京都地震フ、

(類聚國史)增

廿九日癸未晦、地震、

三月九日壬辰、京都地震フ、

(類聚國史)增

三月九日壬辰、地震、

同月十四日丁酉、京都地震フ、

(類聚國史)增

十四日丁酉、地震、

六月十日辛酉、京都地震フ、

(類聚國史)增

六月十日辛酉、地震、

七月十三日己巳、京都地震フ、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

(三代實錄)三十七  
 秋七月十三日己巳、地震、  
 八月十四日庚申、京都地震フ、  
(類聚國史)三十七  
 八月十四日庚申、地震、  
 同月十六日丙寅、京都地震フ、  
(類聚國史)三十七  
 十六日丙寅、地震、  
 同十八年五月十四日庚寅、京都地震フ、  
(三代實錄)三十八  
 貞觀十八年五月十四日庚寅、未時地震、  
 同月十五日辛卯、京都地震フ、  
(三代實錄)三十八  
 十五日辛卯、卯尅地震、  
 同月二十一日丁酉、京都地震フ、  
(三代實錄)三十八  
 廿一日丁酉、未尅地震、  
 六月十八日癸亥、京都地震フ、  
(三代實錄)三十九

六月十八日癸亥、酉尅地震、  
 七月二十八日癸卯、京都地震フ、  
(三代實錄)三十九  
 秋七月廿八日癸卯、夜地震、  
 十一月九日壬午、京都地震フ、  
(三代實錄)三十九  
 十一月九日壬午、地震、  
 元慶元年三月十一日壬子、京都強震アリ、  
(三代實錄)三十九  
 元慶元年三月十一日壬子、辰漏上四刻地大震、  
 五月十三日癸丑、京都地震フ、  
(三代實錄)三十九  
 五月十三日癸丑、地震、  
 七月十四日癸丑、京都地震フ、  
(三代實錄)三十九  
 七月十四日癸丑、申尅地震、  
 十月十七日甲申、京都地強ク震フ、  
(三代實錄)三十九  
 十月十七日甲申、地大震、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

同月十八日乙酉、京都地震フ、  
(三代實錄)三十九  
 十八日乙酉、地震、  
 同二年二月二十九日乙未、京都地震フ、  
(三代實錄)三十九  
 元慶二年二月廿九日乙未、地震、  
 三月九日乙巳、京都地震フ、  
(三代實錄)三十九  
 三月九日乙巳、地震、  
 七月四日丁酉、京都地震フ、  
(三代實錄)三十九  
 秋七月四日丁酉、地震、  
 同月十一日甲辰、京都地震フ、  
(三代實錄)三十九  
 十一月甲辰、夜地震、  
 同月二十五日戊午、京都地震フ、  
(三代實錄)三十九  
 廿五日戊午、地震、  
 九月二十九日辛酉、相摸、武藏兩國、地大ニ震ヒ、

公私ノ屋舎破倒シテ一モ全キモノナシ、是日關  
 東諸國皆震フ、  
(三代實錄)三十九  
 九月廿九日辛酉、夜地震、是日、關東諸國地大震裂、相摸武  
 藏、特爲尤甚、其後五六日、震動未止、公私屋舎、一無全者、或  
 地窓(類聚國史)三十九陥、往還不通、百姓壓死、不可勝計、  
(同書)三十九  
 元慶五年冬十月三日戊寅、相摸國國分寺、金色藥師丈六像一  
 體、挾侍菩薩像二體、元慶三年九月二十九日、遭地震皆悉摧  
 破、其後火燒損、皇請改造、以修御願、又依太政官去貞觀十五  
 年七月二十八日符、以泅河寺爲國分尼寺、而同日地震、堂舎  
 頽壞、請仍舊以本尼寺爲國分尼寺、詔並許之、  
 十月九日辛未、京都地震フ、  
(三代實錄)三十九  
 冬十月九日辛未、地震、  
 同三年三月七日丁酉、京都地震フ、  
(三代實錄)三十九  
 元慶三年三月七日丁酉、地震、  
 同月八日戊戌、京都地震フ、

震災防調會報告第四十六號

甲

(三代實錄) 三十五  
八日戊戌、地震、

同月二十二日壬子、京都強震アリ、續デ又震フ、

(三代實錄) 三十五

廿二日壬子、午一剋地大震動、四剋亦震、

同月二十九日己未、京都地震フ、

(三代實錄) 三十五

廿九日己未晦、地震、

四月二日辛酉、京都地震フ、

(三代實錄) 三十五

夏四月二日辛酉、地震、

(類聚國史) 垣

元慶三年四月二日辛酉、夜地震、

○國史夜ニ作り、實錄ト合ハズ、然レドモ今正ヲ執ルベキナシ、

同月七日丙寅、是夜、京都地震フ、

(類聚國史) 垣

七日丙寅、夜地震、

五月十五日甲辰、京都地震フ、

(類聚國史) 垣

五月十五日甲辰、地震、

六月十六日乙亥、京都地震フ、

(三代實錄) 三十六

六月十六日乙亥、地震、

七月十九日丁未、京都地震フ、

(三代實錄) 三十六

秋七月十九日丁未、地震、

八月二日己未、京都地震フ、

(三代實錄) 三十六

八月二日己未、地震、

同月十四日辛未、京都地震フ、

(三代實錄) 三十六

十四日辛未、地震、

同四年二月二十四日戊申、京都地震フ、

(三代實錄) 三十七

元慶四年二月廿四日戊申、地震、

同月二十八日壬子、京都地震フ、

(三代實錄) 三十七

廿八日壬子、地震、

四月二日乙酉、京都強震アリ、

震災防調會報告第四十六號

甲

(三代實錄) 三十七

四月二日乙酉、大地震、

同月五日戊子、京都地震フ、

(三代實錄) 三十七

五日戊子、地震、

同月十日癸巳、京都地震フ、

(三代實錄) 三十七

十日癸巳、地震、

五月五日戊午、京都地震フ、

(三代實錄) 三十七

五月五日戊午、地震、

七月十七日己巳、京都地震フ、

(三代實錄) 三十八

秋七月十七日己巳、地震、

十月一日辛巳、是夜、京都地震フ、

(三代實錄) 三十八

十月辛巳朔、夜地震、

同月二日壬午、京都地震フ、

(三代實錄) 三十八

二月壬午、地亦震、

同月三日癸未、京都地震フ、

(三代實錄) 三十八

三日癸未、地震、

同月十四日甲午、出雲國地大ニ震ヒ、官舎民屋多ク顛倒セリ、是日、京都モ地強ク震ヘリ、

(類聚國史) 垣

元慶四年十月十四日甲午、地大震、

(三代實錄) 三十八

廿七日丁未、出雲國言、今月十四日、地大震動、境内神社佛寺官舎、及百姓居廬、或顛倒或傾倚、損傷者衆、其後迄于二十二日、晝一二度、夜三四度、微々震動、猶未休止、

○實錄、コノ地震ヲ明年ニモ記載セリ、蓋、錯簡ナルベシ、

十一月二十五日乙亥、是夜、京都地震フ、

(三代實錄) 三十九

十一月二十五日乙亥、是夜、地震、

十二月四日癸未、是夜、京都地強ク震フ、

(三代實錄) 三十九

十二月四日癸未、是夜、地大震動、五六過乃止、

同月六日乙酉、是夜、京都地大ニ震ヒ、宮城ノ垣

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

牆及官廳民廬多シ頽損シ、餘震日ヲ涉レリ、

(三代實錄)三十九

十二月六日乙酉、子時地大震動、自夜迄旦十六度震、大極殿西北隅壁增長石八間破裂、宮城垣牆、京師廬舍、頽損者往々甚衆矣、

七日丙戌、陰陽寮奏言、地震之徵、合慎兵賊飢疫、是夜自戌至子、地亦震動、

八日丁亥、自辰至丑、其間地四震、

九日戊子、夜地震二度、

十日己丑、是日地惣五震、

十一日庚寅、是日地數度震動、

十二日辛卯、子一尅地大震、寅四尅小震、

十三日壬辰、地震、

十四日癸巳、地震、

十七日丙申、地震、

十八日丁酉、地震、

十九日戊戌、戌時天有聲二度、地亦震、

廿一日庚子、戌一尅空中有聲、丑刻地震、

廿二日辛丑、辰時地大震、二動而止、

廿三日壬寅、地震、

廿四日癸卯、地震、

廿五日甲辰、地震、

廿九日戊申、地震、

同五年一月六日乙卯、京都地震フ、

(三代實錄)三十九

元慶五年正月六日乙卯、酉時地震、

同月十一日庚申、京都地震フ、

(三代實錄)三十九

十一日庚申、地震、

同月十二日辛酉、京都地震フ、

(三代實錄)三十九

十二日辛酉、地震、

同月十四日癸亥、京都地震フ、

(三代實錄)三十九

十四日癸亥、地震、

同月十六日乙丑、京都地震フ、

(三代實錄)三十九

十六日乙丑、地震、

二月三日辛巳、京都地震フ、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

(三代實錄)三十九

二月三日辛巳、地震、是日、於建禮門前修大祓、

同月二十三日辛丑、京都地震フ、

(三代實錄)三十九

廿三日辛丑、地震、

四月三日庚辰、京都地震フ、

(類聚國史)四

元慶五年四月三日庚辰、地震、

同月四日辛巳、京都地震フ、

(三代實錄)三十九

四月四日辛巳、地震、

五月十三日庚申、京都地震フ、

(三代實錄)三十九

五月十三日庚申、地震、

六月二十五日辛丑、京都地震フ、

(三代實錄)三十九

六月廿五日辛丑、地震、

九月十九日甲子、京都地震フ、

(三代實錄)四十一

九月十九日甲子、地震、

同月二十日乙丑、京都地震フ、

(三代實錄)四十一

廿日乙丑、亦震、

同月二十一日丙寅、京都兩次地震フ、

(三代實錄)四十一

廿一日丙寅、二度震、

十月五日庚辰、是夜、京都地震フ、

(三代實錄)四十一

冬十月五日庚辰、夜地震、

同月七日壬午、京都地震フ、

(三代實錄)四十一

七月壬午、地震(類聚國史、コノ地震ヲ載セス)

十二月八日壬午、京都地震フ、

(三代實錄)四十一

十二月八日壬午、地震、

同六年三月二十四日丙寅、京都地震フ、

(三代實錄)四十一

元慶六年三月廿四日丙寅、地震、



震災防備會報告第四十六號

甲

六月十九日庚寅、京都地震フ、

(三代實錄) 四十二

六月十九日庚寅、地震、

九月四日癸酉、京都地震フ、

(三代實錄) 四十三

九月四日癸酉、地震、

十一月十六日甲申、京都地震フ、

(三代實錄) 四十三

十一月十六日甲申、申時地震、

同七年六月三日丁酉、京都地震フ、

(三代實錄) 四十三

元慶七年六月三日丁酉、地震、

同月二十八日壬戌、京都地震フ、

(三代實錄) 四十三

廿八日壬戌、地震、

十月二十九日壬戌、京都地震フ、

(三代實錄) 四十七

十月廿九日壬戌、地震、

同八年四月十四日甲辰、京都地震フ、

(三代實錄) 四十五

元慶八年夏四月十四日甲辰、大風雨、亥時地震有聲、月在房宿、

同月十六日丙午、京都地震フ、

(三代實錄) 四十五

十六日丙午、霜降氣寒、未時雷電、申時地震、

六月二十九日戊午、京都地震フ、

(三代實錄) 四十六

六月廿九日戊午晦、地震、

十一月六日癸亥、是夜、京都地震フ、

(三代實錄) 四十六

十一月六日癸亥、夜地震、

仁和元年二月十六日壬寅、京都地震フ、

(三代實錄) 四十七

仁和元年二月十六日壬寅、地震、

三月十五日庚午、京都地震フ、

(三代實錄) 四十七

三月十五日庚午、地震、

五月二十六日庚戌、京都地震フ、

震災防備會報告第四十六號

甲

(三代實錄) 四十七

五月廿六日庚戌、地震、

七月十九日辛丑、京都地震フ、

(三代實錄) 四十八

七月十九日辛丑、地震、

九月十三日甲午、京都地震フ、

(三代實錄) 四十八

九月十三日甲午、酉魁地震、

同月十四日乙未、京都地震フ、

(三代實錄) 四十八

十四日乙未、卯時地震、

十二月二十日庚午、是夜、京都地震フ、

(三代實錄) 四十八

十二月廿日庚午、巳時、天東南有聲、如高樓墮落、夜分地震、

有聲如雷、

同二年三月二十一日庚子、京都地震フ、

(三代實錄) 四十九

仁和二年三月廿一日庚子、地震、

四月十三日壬戌、京都地震フ、

(三代實錄) 四十八

夏四月十三日壬戌、大地震、

(類聚國史) 七

仁和二年四月十三日壬戌、地震、

五月二十四日癸卯、是夜、安房國黑雲アリ、南海ヨリ群起シ、雷鳴地震通宵止マズ、明曉之ヲ望メ

バ、砂石粉土、山野田園ニ遍ホシ、

(三代實錄) 四十八

八月四日庚戌、勅令安房上總等國、重警不虞、先是安房國言

上、去五月二十四日夕、有黑雲、自南海群起、其中現電光、雷

鳴地震、通夜不止、二十六日曉、雷電風雨、巳時天色清明、砂

石粉土、遍滿地上、山野田園、无所不降、或所厚二三寸、或處

僅蔽地、稼苗草木、皆悉凋枯、馬牛食黏粉草、死斃甚多、陰陽

察占云、鬼氣御靈、忿怒成祟、彼國可慎疫癘之患、又國東南將

有兵賊之亂、由是預令戒嚴、

六月十五日癸亥、京都強震アリ、

(三代實錄) 四十九

六月十五日癸亥、地大震、

九月十一日丙戌、京都地震フ、

(三代實錄) 四十九

九月十一日丙戌、午刻地震、

同三年五月二十九日壬寅、京都地震フ、

(三代實錄) 平

仁和三年五月廿九日壬寅晦、地震、

七月二日癸酉、是夜、京都地震フ、

(三代實錄) 平

秋七月壬申朔、二日癸酉、夜地震、

同月六日丁丑、是夜、京都地又震フ、

(三代實錄) 平

六日丁丑、是夜地震、

同月三十日辛丑、山城、攝津以下五畿七道諸國、

地大ニ震フ、京都東西兩京ノ廬舍顛倒シ、壓死セ

ルモノ衆シ、近海ノ地、海嘯奔溢シ、就中、攝津書

ヲ被ルコト最モ甚シ、餘震日ヲ經レドモ止マズ、

(三代實錄) 平

卅日辛丑、申時地大震動、經歷數尅、震猶不止、

天皇出仁壽殿、御紫宸殿南庭、命大藏省立七丈帳二爲御在

所、諸司舍屋、及東西京廬舍、往々顛覆、壓殺者衆、或有失神

頓死者、亥時亦震三度、五畿內七道諸國、同日大震、官舍多

損、海潮漲陸、溺死者不可勝計、其中攝津國尤甚、夜中東西有

聲如雷者二、

八月壬寅朔、晝夜地震二度、

二日癸卯、晝地震三度、

四日乙巳、地震五度、

五日丙午、晝地震五度、夜大震、京師人民、出自廬舍、居于衢

路、

六日丁未、停釋奠之禮、去月卅日、木工寮將領奏千本、檢按修

造職院、驚恐地震、失神而死、供祭諸司、觸此穢也、

九日庚戌、未時地震、

十三日甲寅、地震、

十四日乙卯、子時地震、

十六日丁巳、寅時地震、

廿二日癸亥、是夜子時地震、

廿三日甲子、未尅地震、

# 大日本地震史料

卷之二

自昌泰元年  
至正平十二年

昌泰元年五月七日乙亥、京都地鳴リ三回、

(日本紀略) 一

昌泰元年五月七日乙亥、地鳴三度、其聲似雷、

七月二十七日乙未、京都強震アリ、

(日本紀略) 一

七月廿七日乙未、大地震、

同二年九月七日戊戌、京都地震フ、

(日本紀略) 一

昌泰二年九月七日戊戌、地震、

延喜二年七月二十四日丁卯、京都地震フ、

(扶桑略記)

延喜二年七月廿四日丁卯、巳刻地震、其響如亂聲、自遠響來

振動、

同四年十一月十二日壬申、京都地震フ、

(扶桑略記)

延喜四年十一月十二日壬申、酉刻地震、

同六年三月一日甲寅、京都地震フ、

(扶桑略記)

延喜六年三月一日甲寅、午刻地震、

同九年二月七日癸卯、京都地震フ、

(扶桑略記)

延喜九年二月七日癸卯、未刻地震、

同十一年一月十二日戊戌、是夜、京都地震フ、

(貞信公記)

延喜十一年正月十三日、此夜地震、鳴雷、

同十二年一月十一日庚寅、京都地震フ、

(扶桑略記)

延喜十二年正月十一日庚寅、地震、

三月二十一日庚子、京都地震フ、

(扶桑略記)

三月廿一日庚子、午刻地震、

同十六年六月二十九日壬子、京都地震フ、

(扶桑略記)

震災豫防會報第四十六號

甲

〔日本紀略〕  
 延喜十六年六月廿九日壬子、天陰雷鳴、地震、  
 〔扶桑略記〕  
 延喜十六年六月廿九日壬子、雷鳴地震、  
 延長二年十二月十七日辛巳、京都地震フ、  
 〔扶桑略記裏書〕  
 延長二年十二月十七日、戌刻地震良久、  
 同三年五月十九日庚戌、京都強震アリ、  
 〔吏部王記〕  
 延長三年五月十九日晴、午時大地震、  
 同四年一月一日戊午、京都地震フ、  
 〔日本紀略〕  
 延長四年正月一日戊午、地震、  
 〔扶桑略記裏書〕  
 延長四年正月一日戊午、午刻地震、  
 四月十九日乙巳、京都地震フ、  
 〔扶桑略記裏書〕  
 四月十九日乙巳、未刻地震、  
 〔貞信公記〕  
 延長四年四月十九日、地震、

同六年三月八日甲寅、京都地震フ、  
 〔扶桑略記〕  
 延長六年三月八日、卯時地震、  
 四月十七日癸巳、京都地震フ、  
 〔扶桑略記裏書〕  
 四月十七日、卯時地震、  
 六月一日甲戌、京都地震フ、  
 〔扶桑略記裏書〕  
 六月一日、夕地震、  
 承平元年一月十二日辛未、是夜、京都地震フ、  
 〔貞信公記〕  
 承平元年正月十二日、夜地震、  
 三月二日庚申、是夜、京都地震フ、  
 〔扶桑略記裏書〕  
 承平元年三月二日、子刻地震、  
 〔日本紀略〕  
 承平元年三月二日庚申、子刻地震、  
 同二年一月二十五日丁未、京都地震フ、  
 〔日本紀略〕

震災豫防會報第四十六號

甲

承平二年正月廿五日丁未、地震、  
 三月二十一日癸卯、京都地震フ、  
 〔日本紀略〕  
 三月廿一日癸卯、地震、  
 四月一日癸丑、京都地震フ、  
 〔日本紀略〕  
 四月一日癸丑、地震、  
 六月二十六日丁丑、京都地震フ、  
 〔日本紀略〕  
 六月廿六日丁丑、地震、  
 同四年五月二十七日丙寅、京都地震フコト強ク、  
 京中ノ築垣多ク轉倒セリ、  
 〔扶桑略記裏書〕  
 承平四年五月廿七日丙寅、午刻大地震二度、京中所々築垣轉  
 倒、酉刻紫宸殿南方東第二間砌下虹見、  
 同月二十八日丁卯、京都地震フ、  
 〔扶桑略記裏書〕  
 廿八日、卯刻小地震、  
 同月二十九日戊辰、京都又震フ、

〔扶桑略記裏書〕  
 廿九日、巳刻地震、  
 六月三日壬申、京都兩次地震フ、  
 〔扶桑略記裏書〕  
 六月三日庚午朔、卯時地震二度、  
 十月十九日丙戌、京都地震フ、  
 〔日本紀略〕  
 承平四年十月十九日丙戌、地震雷鳴、  
 〔扶桑略記裏書〕  
 十月十九日、辰刻地震、戌刻雷鳴、  
 同五年一月二十八日癸亥、京都地震フ、  
 〔扶桑略記裏書〕  
 承平五年正月廿八日癸亥、地震、  
 二月十九日甲申、京都地震フ、  
 〔扶桑略記裏書〕  
 二月十九日、戌刻地震、  
 同月二十日乙酉、京都地震フ、  
 〔扶桑略記裏書〕  
 二月二十日、午刻地震、

四月七日壬申、京都地震フ、

(扶桑略記裏書)

四月七日、辰刻地震、

同月十五日己卯、京都強震アリ、

(日本紀略)

承平五年四月十五日己卯、地大震、

天慶元年四月十五日壬辰、京都地大ニ震ヒ、宮中  
内膳司頽レ、其他垣墻ノ破壊スルモノ數ヲ知ラ  
ズ、餘震連月止マズ、

(貞信公記)

承平八年、<sup>○天慶元年</sup>四月十五日戌刻、地大震、其□□有聲振

動、參入大内、

十六日、今日震動不休、昨夜内膳司屋臨死者四人、宮城四面  
垣多臥、京中人宅垣□□頽、自□□□害多數、不能具記、

十七日、地震不止、建禮門前有大稜事、依停賀茂祭也、又有地  
震事、内膳人死事、

十八日、地震不止、大内御前□廿一寺爲御息災也、警固、

十九日、地震不止、

廿日、地震不止、内膳炊御口釜破、仍令占申、不吉、令神祇少  
副賴基重祈申、

甲 號六十四第告報會查調防豫災震

甲

廿四日、地震、

廿五日、辛未、仁王會、地震數々、

廿六日、夜地震、

廿七日、地大震、

廿八日甲戌、依天平例可令五十八口寺、延曆寺、並有供寺  
寺三箇日間、轉讀最勝王經、爲地震也、又定賑給口書覆奏事  
等、左金□□、

廿九日、地震、

六月二日丁丑、最勝寺給、自今日始行、

三日、地震振、

十日、地震、

十一日、地震、

十六日、地震、以前日々不止、諸社使立、地震事祈申也、<sup>○下</sup>

廿二日、五畿七道高名神五十四社可奉各度者一人之狀、貞崇  
律師祈申、有告文、

廿九日、昨今小地震、

卅日、地震、

七月三日、夜半地震、地振度々、

八日癸丑、十五大寺、延曆寺、並京邊諸社諸寺、令讀仁王經、  
爲御息災令□地震也、

十一日、聊地震、又度々振、

甲 號六十四第告報會查調防豫災震

甲

廿一日、地震不止、

廿二日、聊地震、

廿三日庚子、聊振、内御修法於台山令行、座主爲阿闍梨、伴僧  
廿八、

廿三日、振動如昨、

廿四日、左右獄所囚□□者卅人、殊可免狀、仰檢非違使別當、  
緣地震也、

廿六日癸卯、臨時御讀經始、百僧也、爲攘地震不祥也、地震、

廿八日、有震動音、

廿九日、曉地震、盡有□□音、度々不止、御讀經竟、賜度□□

五月六日、大地震、後聊鳴、□令不止、

七日、地震、

八日、地震、

十日、御修法延二箇日、地震、

廿一日、大地震後時々振鳴、不休于今、

廿二日戊辰地震、□大臣□□定恩赦事、即參大内、奉行改元、  
詔書朝綱維時共定申、天慶也、

天慶元年、改承平八年五月廿二日戊辰、爲天慶元年、

五月廿三日己巳、地震、左大辨來、令見法洞申元、即仰會赦  
可免事、又□□橋近安等犯過解文、即作依國解、可追捕官符、  
賜當國隣國事、

十二日、地震、  
十三日、地震、内侍所遷清涼殿、<sup>(殿カ)</sup>貴所等同遷、  
十四日、夜地震、

(日本紀略)

天慶元年四月十五日壬辰、地大震、京中垣墻悉以破壞、内膳  
司屋顛倒、壓死者四人、陰陽寮占申、東西有兵亂事、

廿日丁酉、停賀茂祭、依内膳司人死穢也、

廿九日丙午、盡有動音、度々不止、自去十五日至今日十五箇  
日間、地震不休、

五月廿二日戊辰、改元天慶元年、依厄運地震兵革之慎、

廿六日壬申、大雨、河水溢、地震、

六月三日戊寅、雨降、地大震、

廿日乙未、地震、鴨河水大溢、入京師、多漂人屋、

十月九日、奉幣於宇佐八幡宮、祈消地震之災、

(扶桑略記)

天慶元年四月十五日、地大震動、天下舍屋、多以顛倒、地震之  
間、内膳司人死去、依伴觸穢停賀茂祭、陰陽寮占云、東西可有  
兵革、

(康富記)

(地震勘例)

天慶元年四月十五日、地大震動、天下舍屋、多以顛倒、地震之  
間、内膳司人死去、依伴觸穢停賀茂祭、陰陽寮占云、東西可有  
兵革、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

天慶元年四月十五日亥一刻、大地震、宮城百官、東西兩京屋  
舍顛倒、築垣破損、内膳司九間屋顛倒之間、死者四人、令陰陽  
助出雲惟香卜筮地震之由、

〔改元勅文節〕

承平八年五月二十二日、改元天慶、依御儀之上地震也、

十月二十一日甲午、京都地震フ、

〔日本紀略〕

十月廿一日甲午、地頻震、

同二年一月十一日癸丑、京都地震フ、

〔貞信公記〕

天慶二年正月十一日、地震、

二月五日丁丑、是夜、京都二回地震フ、

〔貞信公記〕

二月五日癸酉朔、夜地震二度、

同月八日庚辰、是夜、京都地頻ニ鳴動ス、

〔貞信公記〕

八日、夜度々鳴動、

同月二十一日癸巳、京都地震フ、

〔貞信公記〕

廿一日甲午、地震、○コノ月癸酉朔ナリ、甲午

同月二十九日辛丑、京都地震強ク震フ、

〔吏部王記〕

天慶二年二月二十九日天晴、丑刻大地震、

三月四日丙午、京都又強震アリ、

〔吏部王記〕

三月四日天晴、未刻許大地震、

同月六日戊申、京都地震フ、

〔貞信公記〕

三月六日、有震動、以前日々又如此、

同月 一日癸丑、京都地震フ、

〔貞信公記〕

十一日、地震、

同月十三日乙卯、京都地震フ、

〔貞信公記〕

同月二十三日乙丑、京都地震フ、

〔吏部王記〕

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

三月廿三日癸或晴、及曉更地震、

四月五日丙子、京都地震強ク震フ、

〔和漢合符〕

四月五日、大地震、天王去御殿、於常寧殿前築茅殿御之也、

同月三十日辛丑、是夜、京都地震フ、

〔貞信公記〕

四月卅日、夜半地震、

五月十日辛亥、京都地震フ、

〔貞信公記〕

五月十日、地震、

同月二十七日戊辰、京都地震フ、夜又震フ、

〔貞信公記〕

五月廿七日、早旦地震、夜亦地震、

六月三日癸酉、京都地震フコト強シ、

〔吏部王記〕

六月三日雨下、未下刻大地震、

同月十九日己丑、京都地震強ク震ヘリ、

〔吏部王記〕

六月十九日晴、午時大地震、

同月二十三日癸巳、京都地震フ、

〔貞信公記〕

六月廿三日、曉地震、

七月十六日乙卯、京都地震フ、

〔貞信公記〕

七月十六日、丑刻地震、

同三年三月十日丙子、京都地震フ、

〔貞信公記〕

天慶三年三月十日、地震、

同月十六日辛巳、京都地震フ、

〔貞信公記〕

十六日、地震、

同六年五月一日戊寅、京都地震フ、

〔日本紀略〕

天慶六年五月一日戊寅、地震、

同八年九月十二日乙巳、是夜、京都地震フ、

〔貞信公記〕

天慶八年九月十二日、夜地震、

九月十四日丁未、是夜、京都地震フ、

震災防備會報告第四十六號

甲

〔貞信公記〕  
九月十四日、夜地震、

同九年一月二日甲午、京都地震フ、

〔貞信公記〕

天慶九年正月二日、曉小地震、

二月八日己巳、京都地震フ、

〔日本紀略〕<sup>三</sup>

天慶九年二月八日己巳、地震、

天曆元年二月三日己未、京都地震フ、

〔日本紀略〕<sup>三</sup>

天曆元年二月三日己未、申刻地震、

四月六日辛酉、京都三回地震フ、

〔日本紀略〕<sup>三</sup>

四月六日辛酉、卯刻地震三箇度、

同三年二月九日癸未、京都地震フ、

〔日本紀略〕<sup>三</sup>

天曆三年二月九日癸未、雷發一霹、申刻地震、

天德二年、是歲、京都地震フ、

〔日本紀略〕<sup>四</sup>

九月十一日戊午伊勢例幣也、天皇幸八省院、宣命有辭別、天  
變地震物性等事也、

○地震ノ日、未ダ見ル所ナシ、姑ク是歲ニ掲ク、

康保二年九月二十一日戊子、京都強震アリ、

〔日本紀略〕<sup>四</sup>

康保二年九月廿一日戊子、地大震、

同月二十二日己丑、京都地又震フ、

〔日本紀略〕<sup>四</sup>

廿二日己丑、又震、

同月二十三日庚寅、京都地又震フ、

〔日本紀略〕<sup>四</sup>

廿三日庚寅、又震、

十月一日丁酉、京都地震フ、

〔日本紀略〕<sup>四</sup>

十月一日丁酉、地震、

十一月廿五日辛卯、雷發、依天變地震兵庫火災也、

○是年九月二十一日、二十二日、二十三日ノ地震條ヲ併セ見ルベシ、

安和元年四月七日己未、京都地震フ、

〔日本紀略〕<sup>五</sup>

安和元年四月七日、午刻地震、

震災防備會報告第四十六號

甲

八月三日甲寅、是夜、京都地震フ、

〔日本紀略〕<sup>五</sup>

八月四日乙卯、去夜子刻地震、鳥獸驚鳴、

天祿二年四月六日辛未、是夜、京都又震フ、

〔日本紀略〕<sup>六</sup>

天祿二年四月六日辛未、子刻地震、

七月六日己亥、京都地震フ、

〔日本紀略〕<sup>六</sup>

七月六日己亥、地震、

同三年閏二月十四日甲辰、京都地強ク震フ、

〔日本紀略〕<sup>六</sup>

天祿三年閏二月十四日甲辰、寅刻大地震、申刻宜陽殿鳴、

天延元年三月二十四日戊寅、京都地震フ、

〔日本紀略〕<sup>六</sup>

天延元年三月廿四日戊寅、寅時地震、

九月二十七日丁丑、京都強震アリ、

〔日本紀略〕<sup>六</sup>

九月廿七日、辰刻大地震、

十二月二十日庚子、今日改元天延、依天變地震也、有敕令、免御所、老人賜錢、  
〔改元勅文節類〕

天祿四年十二月二十日改元、<sup>爲天</sup>依天災地震、  
貞元元年四月十一日丁未、是夜、京都強震アリ、

〔日本紀略〕<sup>六</sup>

貞元元年四月十一日丁未、今夜大震、

六月十八日癸丑、山城、近江二國、地大三震ヒ、京

都八省院、豐樂院、東寺、西寺、極樂寺、清水寺、圓覺

寺等顛覆シ、近江國分寺大門倒レ、關寺大佛碎損

シ、國府廳以下雜屋三十餘宇顛倒セリ、餘震連月

止マズ、

〔日本紀略〕<sup>六</sup>

六月十八日癸丑、申刻地大震、其響如雷、宮城諸司多以破壞

顛倒、兩京舍屋、其數甚多、其中八省院、豐樂院、東寺、西寺、

極樂寺、清水寺、圓覺寺顛倒、地震之甚、未曾有矣、今日寄御

興於南庭、立帳爲御所、中宮廳前同以立帳、今日清水寺地震

之間、緇素壓死之者、其數五十、

十九日甲寅、地震十四度、左衛門陣後廳、堀川院廊舍、閑院

西對、顛宇、民部省舍三倒、

二十日乙卯、地震十一度、

二十一日丙辰、地震十三度、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

二十二日丁巳、地震十二度、  
 二十三日戊午、辰刻日有他之、今日地震十度、  
 二十六日辛酉、未刻暴雨雷震、今日地震八度、  
 二十九日甲子、地震五度、  
 三十日乙丑、地震八度、  
 七月十一日丙子、地震六度、  
 十二日丁丑、地震四度、  
 十三日戊寅、詔書改天延四年為貞元元年、依災並地震也、有  
 敕令、大內紀伊輔作詔書、  
 十四日己卯、地震二度、  
 十八日癸未、大地震、  
 九月廿三日丙戌、地大震、其響如雷、  
 (扶桑略記)  
 貞元元年六月十八日、申時有大地震、內裡築垣頽、天下舍屋、  
 京洛築垣、皆以顛落、主上為遷幸堀河太政大臣家、立數百工  
 部令修理間、四面築垣忽倒、打殺工卅餘人、堀出十八人、又  
 御體經僧童子等被壓殺、崇福寺法華堂南方頽入谷底、時守  
 堂僧千聖、同入谷死、餘堂頽倒、彌勒堂上岸崩、落居堂上、一  
 大石落打損乾角、又近江國分寺大門倒、二王悉碎損、國府廳  
 並雜屋三十餘宇頽倒、關寺大佛悉碎損、腰上已無矣、其後一

兩日間、頻震不止、  
 七月十三日、改為貞元元年、有災變也、  
 (改元勘文部類)  
 天延四年七月十一日、改元為貞元、依火事地震、  
 同二年二月四日乙未、京都地震フ、  
 (日本紀略)六  
 貞元二年二月四日乙未、己刻地震、  
 同月九日庚子、京都強震アリ、  
 (日本紀略)六  
 二月九日庚子、己時地大震、  
 天元元年十一月二十日辛丑、京都地震フ、  
 (日本紀略)七  
 天元元年十一月廿日辛丑、地震、  
 永觀二年十一月八日甲寅、京都地強ク震フ、  
 (日本紀略)八  
 永觀二年十一月八日甲寅、地大震、  
 寬和二年一月二十八日丁酉、是夜、京都地震フ、  
 (本朝世紀)四  
 寬和二年正月二十八日丁酉天陰雨降、亥二刻有地震事、  
 三月二十七日乙未、京都地強ク震フ、  
 (本朝世紀)

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

三月二十七日乙未天晴、己時有小振動事、自例已大振、  
 七月六日壬申、京都地震フ、  
 (日本紀略)九  
 寬和二年七月六日壬申、地震、  
 正曆元年十月二十五日丁卯、京都地震フ、  
 (日本紀略)十  
 正曆元年十月廿五日丁卯、地震、  
 同五年十月二十四日壬寅、京都地強ク震フ、  
 (日本紀略)十  
 正曆五年十月二十四日壬寅、地大震、有御卜、  
 長德二年四月二日壬申、京都地震フ、  
 (日本紀略)十  
 六月二十六日乙未、京都地強ク震フ、  
 (日本紀略)十  
 六月二十六日乙未、地大震、  
 同三年五月二十二日乙酉、京都地強ク震フ、  
 (日本紀略)十  
 長德三年五月廿二日乙酉、地大震、  
 同四年九月三日戊子、京都地強ク震フ、

(日本紀略)十  
 長德四年九月三日戊子、地大震、  
 寬弘三年二月二日乙亥、京都地震フ、  
 (日本紀略)十一  
 寬弘三年二月二日乙亥、辰刻地震、  
 同四年十二月二十一日癸丑、京都地震フ、  
 (日本紀略)十一  
 寬弘四年十二月廿一日癸丑、地震、  
 同七年九月二十一日丙申、京都地震フ、  
 (日本紀略)十二  
 寬弘七年九月廿一日丙申、未刻地震、  
 長和元年八月二十七日壬戌、京都地震フ、  
 (日本紀略)十二  
 長和元年八月廿七日壬戌、地震、  
 同三年四月十一日丙寅、京都地震フ、  
 (日本紀略)十二  
 長和三年四月十一日丙寅、地震、  
 同四年四月二十日己巳、京都地震フ、  
 (日本紀略)十二

長和五年 寬仁元年二年、治安二年三年、萬壽元年二年四年、長元五年

六四

長和四年四月廿日己巳、寅刻地震、

同五年三月二十四日戊辰、京都地震フ、

(日本紀略)十三

長和五年三月廿四日戊辰、戌刻地震、

寬仁元年八月十八日癸未、京都地震フ、

(日本紀略)十三

寬仁八年八月十八日癸未、地震、

同二年九月二十五日甲申、京都地震フ、

(日本紀略)十三

寬仁二年九月廿五日甲申、地震、

十月十三日壬寅、京都地震フ、

(日本紀略)十三

十月十三日壬寅、地震、

治安二年十月二十三日己未、京都地震フ、

(日本紀略)十三

治安二年十月廿三日己未、卯刻地震、

同三年七月五日丁卯、京都地震フ、

(日本紀略)十三

治安三年七月五日丁卯、地震、

萬壽元年三月十七日甲辰、京都地震フ、

(日本紀略)十三

萬壽元年三月十七日甲辰、地震、

同二年十一月五日癸丑、京都地震フ、

(日本紀略)十三

萬壽二年十二月五日癸丑、地震、大雪、

同四年三月二日癸卯、京都地震強シ、

(日本紀略)十三

萬壽四年三月二日癸卯、申時大地震、

長元五年十一月十六日癸丑、駿河國富士山火ヲ

噴キ、延燒シテ山麓ニ至ル、

(日本紀略)十三

長元六年二月十日丙午、駿河國言上、去年十二月十六日、富

士山火起、自峯至山脚、

是歲、京都地震フ、

(日本紀略)十三

長元五年三月五日丙子、詔大赦天下、大辟以下非常赦所不免

赦除、又免調庸、老人僧尼給穀、依攘天下地震雷鳴之怪異也、

○地震ノ日、見ルトコロナシ、今姑ク是歲ニ掲ク、

同八年十二月十四日甲子、是夜、京都地震フ、

(日本紀略)十三

長元八年十二月十四日甲子、夜地震、

同九年八月二十七日壬申、是ヨリ先京都地震フ、

是日ヨリ三日ヲ限リ、爲ニ地動ノ祭ヲ行ハセ給

フ、

(範圍記)

長元九年八月廿七日壬申、亦自今日限三箇日、被行地動御

祭、孝秀行事道政大祭料物六十六石、三箇夜祭之、爲地震所

被行也、

○地震ノ日ハ見ル所ナシ、姑ク行祭ノ日ニ掲ク、

十二月二十二日丙寅、京都地震フ、

(範圍記)

十二月廿二日、今曉地震尤甚、

長久元年六月二十七日庚戌、京都地震フ、

(春記)

長久元年六月廿七日庚戌、雨降終日不止、寅刻許有召參御

前、被仰云、此曉夜大殿西戶並組入上、同以振鳴、而人之故推

鳴、女房等聞之、或不覺、是怪也、今年重可慎也、惟異天變屢

有其告、不快事也、可有御卜之由、可觸關白也、○中又有召參

御前、仰云、夜大殿戶鳴事、人々云是地震之所爲也、今曉  
有地震之故也、又從女院仰此旨、仍不可爲怪事也、不可觸關  
白也、

九月八日庚申、京都強震アリ、

(春記)

九月八日庚申、天晴、卯刻許地大震、

(扶桑略記)

長久元年九月八日、寅時大地震、

十月二十九日辛亥、是夜、京都強震アリ、

(春記)

十月廿九日辛亥天晴、今夜丑時許地大震、良久不休止、屋舍

動搖、燈火或消滅了、予成人之後、未有如此之震動、心神失

度、不知所爲、一時許乃休止、尤可怖畏事也、乍驚欲參內之

處、風病發動、仍不能參入也、已及曉更、

十一月一日壬子天晴、早且參內、依去夜地震事也、主上出

御、仰云、今夜震動、惣無此比、殿屋震動、疑欲顛倒、怖畏無

極、仍出寢所、殆及戶外、是心神迷亂之故也、前日天文奏云、

及冬有地震歟、其事果然、○中抑又此地震後不經幾程、東一

品宮北屋有火、火焰及數尺、宮人即撲滅畢云々、又自內有召

參內、仰云、地震事尤可恐也、可有御祈歟、○中此由可示關白



長久元年二年 永承五年 康平三年四年六年 治曆元年

者、即參彼殿、關白被奏云、地震事、尤可恐思食事也、天文奏  
今明進之歎、就彼奏文可有御祈也、

〔扶桑略記〕

十一月壬子、夜地大震、

○本書、一日壬子夜ニ揚グルハ非ナリ、

長久二年三月一日庚戌、京都地震フ、明日又震

フ、

〔如是院年代記〕

長久二年辛巳三月一日、二日、地震、○和漢合符同シ

七月二十日丁卯、丑刻京都強震アリ、法成寺ノ鐘

樓倒ル、

〔扶桑略記〕

長久二年七月廿日、丑刻地震、法成寺鐘樓顛倒、

永承五年十月七日辛酉、京都地震フ、

〔扶桑略記〕

永承五年十月七日、地震、

康平三年六月十八日乙亥、京都地震フ、

〔扶桑略記〕

康平三年六月十八日、寅刻地震有音、

○伊勢公御勅使雜例、康平元年十一月二十八日宣命ニ天變地震ノ文アレド

六六

モ、其日ヲ詳カニセズ、姑ク記シテ後考フ待フ、  
同四年五月六日戊子、丑時京都地震フ、明日巳刻  
又震フ、

〔扶桑略記〕

康平四年五月六日、丑時地震、群鳥驚鳴、

七日、巳刻地震、

八日、有恩赦、依地震也、

同六年二月二十八日庚子、巳刻京都地震フ、明日

酉刻又震フ、

〔扶桑略記〕

康平六年二月廿八日、巳刻地震、

三十日丙戌、○是月ハ癸酉朔ナリ、丙戌酉刻地震、各有音、ハ當ニ壬寅ニ作ルベシ、

三月十一日癸丑、京都地震フ、

〔扶桑略記〕

三月十一日、酉刻地震、

治曆元年三月二十四日甲申、是夜京都地震フ、

〔扶桑略記〕

治曆元年三月廿四日、戌刻地震、

五月七日丙寅、京都地震強シ、

〔扶桑略記〕

五月七日丙寅、地大震、

同二年四月八日辛卯、京都地震フ、

〔扶桑略記〕

治曆二年四月八日、卯時地震、

延久二年一月二十五日丁巳、京都地震フ、

〔扶桑略記〕

延久二年正月廿五日、地震、

十月二十日丁丑、是夜、山城、大和兩國、地強シ震

ヒ、京都ハ家々ノ築垣ヲ損シ、奈良ハ東大寺ノ巨

鐘ヲ揺リ落セリ、

〔扶桑略記〕

十月廿日戊午朔、半夜地震動、洛中家々築垣、往々頽落、東大

寺洪鐘震零、諸國寺塔、間以壞損焉、

〔百練抄〕

延久二年十月廿日、大地震、東大寺鐘鈕切落、

〔年代記殘編〕

延久二年庚戌十月廿日夜、大地震動、東大寺洪鐘地落、

〔十三代要略〕

延久二年十月廿日半夜、地大震、

〔榮花物語〕

そのとしの二年○延久ふゆ、ぎおんやけぬ、○十月十四日祇園社火アリ、あさましくおもひがけぬことなりや、なるなどおごろおごろしくふりて、むづかじきころおひなり、

〔諸法要略抄〕

四天王合行法

後三條院御宇、延久二年十一月二十一日、丑刻地震及數刻、

山洛無不恐怖、天文密奏陰陽勘文、兵革前瑞云々、仍以長宴

于時權於台戀令修之、伴僧八口、○本書二十一日ニ作ルハ、誤ナルベシ、

同月二十三日庚辰、京都餘震時々震フ、

〔扶桑略記〕

廿三日、時々又震、

十一月二十一日戊申、京都地震フ、

〔扶桑略記〕

十一月廿一日戊申、未刻地震、

承保元年一月二十日戊寅、京都地震フ、

〔扶桑略記〕

承保元年正月廿日、寅時地震、

同月二十二日庚辰、京都地震フ、

〔扶桑略記〕

治曆二年 延久二年 承保元年

六七

震災豫防會告報第四十六號

甲

廿二日、巳時地震、  
二月十二日辛巳、京都地震フ、

〔扶桑略記〕

二月十二日、寅時地震、

三月三日、申時以下雪降、深四寸、

九日、戌刻霜雪直天、

同三年一月九日丙寅、是夜、京都地震フ、

〔扶桑略記〕

承保三年正月九日、亥時地震、

寛治五年八月七日癸亥、山城、大和兩國、地震強ク、法成寺ノ佛像、金峰山ノ金剛藏王寶殿等、多ク毀損セリ、

〔扶桑略記〕

寛治五年八月七日癸亥、申刻有大地震、法成寺五大堂、軍茶利丈被震倒、九重塔流星被震傾、金堂中尊寶幢瓔珞切落、講堂中尊、樂師堂七佛光圓、堂寶形、常行堂壁並裝厨等、皆以震損、又大和國金峰山金剛藏王寶殿、皆為地震破損、古今未聞云々、

同六年十一月十日己丑、京都地震強シ、

〔扶桑略記〕  
寛治六年十一月十日己丑、戌刻地大震動、群犬駭吠、

同七年二月十四日辛酉、京都地震強シ、

〔扶桑略記〕

寛治七年二月十四日辛酉、未刻地大震動、屋內道俗、皆怖下庭、

永長元年十一月二十四日庚戌、京都、奈良地震強ク震ヒ、東大寺ノ巨鐘又落ッ、餘動日ヲ涉レリ、

〔百練抄〕

嘉保三年十一月廿四日、地大震、古今無比、人皆叫喚、主上御御船、

嘉保三年十一月十七日改元、○永長也、

〔百練抄治承元年頭書〕

東大寺鐘落事、延久三年十月九日○二年十月廿日ナリ、嘉保三年十一月十四日○廿四日ナリ

〔康富記〕

嘉保三年十一月廿四日、辰刻大地震、殆及一時、天下貴賤、下立庭上、如嬰兒皆叫喚、主上御乘、八九十以上之者、不遇如此震動候由多申、大殿關白以下、令群參大内給、同廿八日、於兩殿下諸卿可有改元哉否事、豫被會議、去廿四

震災豫防會告報第四十六號

甲

日連日連夜小地震、世以為恐、

十二月十五日、依十一月廿四日大地震、被始方々御祈、東大寺千僧御讀經、權於大極殿被行如說仁王會、於延曆寺以六十口被轉讀大般若、又被始六觀音法、

同十七日、左大臣以下參仗座、定申改元事、依地、震也、江中納言擇申為永長、又八處以下被赦免、強竊二盜非赦限、

康和五年四月二十二日庚午、京都強震アリ、

〔百練抄〕

康和五年四月廿二日、大地震、

同月二十四日壬申、京都地震フ、

〔百練抄〕

廿四日、同震、

五月一日己卯、京都地震フ、

〔百練抄〕

五月一日、又震、人怖畏太、

天治元年閏二月一日己酉、京都地震強ク震ヒ、餘動八日ニ至レリ、

〔百練抄〕

保安五年○天治閏二月一日、大地震、此後至八日有動、

康和五年 天治元年 長承元年二年 保延元年二年

長承元年九月八日乙丑、京都地震フ、

〔中右記〕

長承元年九月八日、卯時地震、近日天變地變、尤有恐事也、

同月二十七日甲申、是夜、京都地震フ、

〔中右記〕

廿七日、戌刻小地震、

十二月六日壬辰、是夜、京都地震フ、

〔中右記〕

十二月七日、發日、白雪又積庭上、去夜之事地震、其聲甚大、近日寒氣無極、

日寒氣無極、

同二年八月二十八日庚戌、京都地震フ、

〔長秋記〕

長承二年八月廿八日庚戌、晴地震、

保延元年三月十八日辛卯、京都強震アリ、

〔中右記〕

保延元年三月十八日辛卯、此曉地大震、

廿八日、外記大夫師長來、知天文者也、問一口地震事、申云、地ハ陰也、后宮大臣之愼也、

同二年一月二十八日丙申、京都地震フ、

震災防備會報告第四十六號

甲

(中右記)  
保延二年正月廿八日、曉地震、  
同三年七月十五日乙亥、京都地震強シ、餘震斷續  
シテ十二月ニ及ベリ、

(中右記)  
保延三年七月十五日、申時地大震、近代未有如此事、其後度  
度小地震、  
十八日戌寅、辰時地震、  
廿七日丁亥、辰時地震、

(實能記)  
保延三年七月十四日陰天、地震、

十五日、申時許大地震、參内、諸卿參集、  
十六日、地震、  
十七日、朝間地震、此間打續地震度々、  
十八日、辰時大地震、參院、

廿六日、少々地震、  
廿七日、辰時許大地震、

八月三日晴天、地震、  
九月廿九日天陰、地震、  
十二月二日天陰、地震、

十一日天陰、地震少々、去自七月已下也、地震不時云々、  
(百練抄)

保延三年七月十五日大地震、近代無比類、十六日度々又震、  
康治元年三月十一日甲辰、京都地震フ、

(本朝世紀)  
康治元年三月十一日甲辰、未刻地震、  
八月十八日戌寅、京都地震フ、

(本朝世紀)  
八月十八日戌寅、丑刻地震、

同二年二月十四日壬申、京都地震フ、  
(台記)

康治二年二月十四日壬申、地震、  
十月十日癸巳、京都地震強シ、明日又震フ、  
(台記)

十月十日癸巳、大地震、  
十一月甲午、地震、

十四日丁酉、十日十一日兩日地震、因之音樂可止否、勘例不  
備、餘按春秋之義、以地震爲異、不爲災、仍不止之、  
同月二十日癸卯、京都地震フ、

五月十三日、辰刻大地震、

七月六日乙卯、京都地震フ、  
(本朝世紀)  
七月六日、未刻地震、

同月十一日庚申、是夜、京都地震フ、  
(本朝世紀)

十一月、戌刻地震、

十二月七日癸未、京都地震フ、  
(本朝世紀)

十二月七日、申刻地震、  
(重憲記)

十二月七日癸未、申刻地震、  
久安元年二月十三日己丑、京都地震フ、  
(本朝世紀)

久安元年二月十三日、未刻地震、  
閏十月三日甲辰、京都地震フ、  
(本朝世紀)

閏十月三日甲辰、申刻地震、  
仁平三年九月二十一日丁未、京都強震アリ、

震災防備會報告第四十六號

甲

(台記)  
十月廿日癸卯、地震、  
十一月二十四日丙子、京都地震強シ、  
(台記)

十一月廿四日丙子、卯刻大地震、  
同月二十六日戊寅、京都地震フ、  
(本朝世紀)

康治二年十一月廿六日戌寅、卯刻地震、  
天養元年四月十六日丁酉、京都地震フ、  
(本朝世紀)

天養元年四月十六日丁酉、申刻地震、  
(重憲記)

天養元年四月十六日丁酉、今日申時地震、  
同月十七日戌戌、是夜、京都地震フ、  
(本朝世紀)

四月十七日戌戌、寅刻地震、  
(重憲記)

四月十七日戌戌、今夜寅時有地震、  
五月十三日癸亥、京都地震強シ、  
(本朝世紀)

仁平三年 久壽元年二年 永萬元年 治承元年二年三年

七二

(台記)

仁平三年九月廿一日丁未時、今朝大地震、天慶元年群行日地震、見東部今日亦地震、道不失先跡歟、○廿日群行アリ

久壽元年二月十三日庚寅、京都地二回震フ、

(山槐記)

仁平四年<sup>久壽元年</sup>二月十三日庚寅、口時地震、夜半地震、

同二年八月五日庚辰、京都地震強シ、夜又震フ、

(台記)

久壽二年八月五日庚辰、己時大地震、入夜復震、

(兵範記)

久壽二年八月五日庚辰、地震、

永萬元年六月四日辛巳、京都強震アリ、

(山槐記)

永萬元年六月四日辛巳、卯上刻大地震、依參内云々、

同月五日壬午、京都地震フ、

(山槐記)

五日壬午、寅刻地震驚入云々、今日改元、爲永萬元年云々、

治承元年十月二十七日癸巳、是夜、奈良地強ク震

ヒ、東大寺盧舍那佛ノ螺髮、及ビ巨鐘落チ、印藏

ノ一角頽落セリ、

(百練抄)

治承元年十月廿七日、丑刻大地震、

東大寺言上、地震之間、大佛螺髮二口落觀音前、又頂上螺髮拔上、又大鐘鈞切落大地、又印藏丑寅角頽落、是依敏覺之逆罪有怪異者、

同二年五月三十日癸亥、是夜、京都地震フ、

(山槐記)

治承二年五月三十日癸亥、亥刻地震、

同三年五月二十八日乙酉、亥刻京都地震フ、

(山槐記)

治承三年五月廿八日乙酉、時大雨即休止入夜時、今夜亥刻地震云々、予不覺悟、

六月一日戊子、是夜、京都地震フ、

(山槐記)

六月二日戊子、今夜丑刻地震云々、後日陰陽大夫安倍泰茂來云々、口口廿八日地震、共金翅鳥動也、后宮御憤也者、

同月十七日甲辰、京都地震フ、

(山槐記)

十七日甲辰、未刻地震、

十一月七日辛酉、京都強震アリ、

(山槐記)

十一月七日辛酉、亥刻大地震、

同四年三月二十三日乙亥、京都地震フ、

(山槐記)

治承四年三月廿三日乙亥、卯刻地震、

(百練抄)

治承四年三月廿三日、卯刻地震、

十一月二十六日甲戌、紀伊國熊野那智山、地強ク震ヒ、餘震三日ニ涉レリ、

(山槐記)

十一月廿六日甲戌、陰晴不定、風烈、後聲、自今日三箇日熊野那智地震、瀧壺石不動、自御目上摧破御云々、示法滅相歟、可

悲云々、

十二月二十一日己亥、京都地震フ、

(山槐記)

十二月廿一日己亥、酉刻地震、

十二月廿一日己亥、酉刻地震、

壽永二年十月十四日乙巳、京都地震強シ、

(百練抄)

壽永二年十月十四日、大地震、

元曆元年十月十五日庚午、鎌倉地震フ、

(東鑑)

元曆元年十月十五日庚午、辰時地震、

文治元年六月二十日辛未、鎌倉強震アリ、

(東鑑)

元曆二年<sup>文治元年</sup>六月廿日辛未、夜半大地震、一時中動搖及數度、

七月九日庚寅、山城、近江、美濃、伯耆諸國、地大ニ震ヒ、京都地或ハ坼ケ或ハ陷リ、閑院ノ皇居、得長

壽院、法勝寺ノ九重塔、阿彌陀堂、金堂、法成寺ノ廻廊等頽落シ、及ビ宇治橋墜落シ、近江ノ湖水

大ニ減シ、傍近ノ田、陷落シテ深淵下ナレリ、餘動

九月ニ至リテ止マズ、

(山槐記)

元曆二年<sup>文治元年</sup>七月九日庚寅、陰晴不定、午刻地震、五十年已

來未覺悟、家中上下男女皆衆居竹原下、自去比居住中山嶋舍

也、法勝寺九重塔頽落、重々垂木以上皆落地、每層柱扉連子

也、法勝寺九重塔頽落、重々垂木以上皆落地、每層柱扉連子

治承三年、四年 壽永二年 元曆元年 文治元年

七三

災震防調會報第四十六號

甲

被相殘、露盤八殘其上折落、阿彌陀堂並金堂之東西廻廊、鐘樓、常行堂之廻廊、南大門西門三字、北門一字、皆顛倒、無一字無門、築垣皆壞、南北而少々相殘云々、遣人令見之處、申旨如此、聞得長壽院千體正觀音顛倒云々、獻使者於入道大相國、院花山尋中御所安否、東中門廊頹危、東子午透廊北車寄顛倒、四面實垣大略破壞、使者巡路見之中云、築垣等皆壞、法成寺內廻廊皆顛倒、東塔四塔未遺、只北傾、東面築垣皆壞、諸門無事、南門築垣近日皆修理、十木許壞、又自京來人曰、五條攝政亭當時坐殿棟平伏、西子午透廊顛倒、四面築垣皆壞、凡京中築垣皆壞、合屋多顛倒、又曰、主上先駕腰輿御庭中、次駕鳳籠御中島、次依攝政被申云、呼帳於庭中、供大床子、終日御座、于時皇后閑院也、又東隣入道殿御座奉尋之處、御車宿顛倒、御車打壓、北對殿頹危、上下又出庭云々、凡未曾有震動也、終日終夜猶有小動、上下或乘車、或搦屋形在庭中、法皇搦竹屋、御座庭中云々、目眩頭痛、心神違亂、宵乘船之樣、天下破滅、已在此時歎、近年兵革、上下無安、今又有此隨、濁世惡業、衆生苦患、無休之時、可悲々々、此家舍屋無殊損亡、壁上塗倍落、築兩三本壞許也、北隣少將公衡朝臣送使將示震動事、後聞宇治橋皆以顛倒、于時渡之人十餘人、乘橋入水、其中一人溺死云々、又、聞近江湖水流北水減、自岸或四五段、或三四段、于

後日如元滿岸云々、同國田三町、地裂爲淵云々、又自美濃伯耆等國來之輩曰、非殊之大動、又後日聞、京中築垣、東西殊壞、南北面顛殘云々、  
天文奏、後日尋取主稅助晴光續之、  
謹奏案、  
○以下勘文略又  
今月九日庚寅午時大地震、京洛地或拆或陷、及同十日辛卯連々震動、有音、  
十日辛卯、陰晴不定、今日猶地震數十度、如常時大或小動無其隙、每度有音、終夜同動、  
十一日壬辰天晴、今日猶地動數十度、每度有聲、終夜同、今日大夫大工經弘來、令推直東出居邸、  
十二日癸巳、陰晴不定、地震二十餘度、地震事爲頭右大辨光雅朝臣奉行下賜官外記勘文可計申之由、被仰下、又皇居事、同可計申者、  
十三日甲午、天晴、地震數度、但雖減於昨日、動搖之勢增、戊刻大動、  
十四日乙未、天晴、地震如昨日、戌刻大動、  
十五日丙申、陰晴不定、時々小雨、地震負數減昨日、於搖動之勢增、亥刻大動、增一昨日昨日兩夜、但不九日動、京中諸人、

災震防調會報第四十六號

甲

今日殊可大動之由、兼日謳歌、自今日于持佛堂始供花、  
十六日丁酉、陰晴不定、地震五六簡度、  
十七日戊戌、陰晴不定、地動四五度、密々見法勝寺破壞、可悲、今日閑院當時御殿棟折、釜殿屋顛倒云々、  
十八日己亥、陰晴不定、地動四五度、  
十九日庚子、陰晴不定、地震五六度、勢過昨日、  
廿日辛丑、陰晴、地震四五度、  
廿一日壬寅、陰晴不定、地震四五簡度、  
廿二日癸卯、天晴、地震七八度、今朝有大動、但可及初度、又無其程、今夜自閑院行幸左大臣亭、大秋御門北、宮小路西、閑院依地震破壞殊甚、此亭築垣等雖破壞、急被加修理云々、  
廿三日甲辰、天晴、地震五六簡度、  
廿四日乙巳、天晴、地震兩三度、  
廿五日丙午、陰晴不定、小動兩三度、  
廿六日丁未、天晴、早旦夜陰各一度地震、  
廿七日戊申、陰晴不定、小動三簡度、  
廿八日己酉、陰晴不定、地震兩三度、  
廿九日庚戌、天晴、地震四五簡度、  
八月一日辛亥、天晴、地震兩三度、  
二日壬子、午後陰大雨雷鳴、朝夕兩度地震、

三日癸丑、陰晴不定、午刻大雨、小動一度、  
四日甲寅、陰晴不定、地震三簡度、  
五日乙卯、陰晴不定、時々小雨、地震一度、  
六日丙辰、午後雨下、入夜小地震一度、  
七日丁巳、午後雨下、地震二度、入夜其勢猛、  
八日戊午、陰晴不定、地震三簡度、入夜其勢猛、雷鳴、  
九日己未、陰晴不定、地震二度、  
十日庚申、天晴、地震一度、  
十一日辛酉、天晴、地震一度、  
十二日壬戌、雨下、地震三簡度、其勢猛、  
十三日癸亥、時々雨下、地動一度、  
十四日甲子、天晴、今日有改元事、去月九日大地震以後、于今不止、仍有此事、  
十五日乙丑、午後雨下、地震一度、  
十六日丙寅、陰晴不定、地動一度、  
十七日丁卯、陰晴不定、地動三度、有勢、不拘文治、只待德政、今如何、  
十八日戊辰、天晴、  
十九日己巳、天晴、今日不地震、但有聲、他方震事歎、自今夜仁和寺御室、於院被行孔雀經法、地震御祈云々、



文治元年 建久二年、六年 正治元年

七八

參向關東之由、有傳申二品之者、仍乍浴朝恩、懈緩國伎、太無謂可有罪科之由、以此次被仰、參州殊恐申、今度造營之時、勵微力云々、

〔百練抄〕

文治元年七月九日庚寅、午時大地震、其聲如雷、震動之間、已送時刻、其後連々不絶、宮城瓦垣、並京中民屋、或被損、或顛倒、一所而不全、就中大内日花門、關院西邊廊顛倒、法勝寺阿彌陀堂顛倒、九重塔破損、三面築垣皆以頽壞、南庭儲幄爲御所、自今日三箇日嘔三口僧於御殿、有大般若御讀經、依此御祈也、

八月四日甲寅、北野祭被付社家、地震穢氣之間、諸司不供奉也、

七日丁巳、釋奠延引、依世間穢也、自去月九日、連日地震、于今不絶、

十三日癸亥、被立九社奉幣使、依地震御祈也、

十四日甲子、有改元、依地震也、

〔康富記〕

元曆二年七月九日、午剋大地震、如雷音、震動之間、已送時刻、其後連々不絶、宮城大垣、並京中人屋築垣、或被損、或顛倒、不勝計、一而不全、就中大内日華、關院西邊廊顛倒、法勝

寺阿彌陀堂顛倒、九重塔破損、三面築垣皆以頽、得長壽院千體堂顛倒、此外大小舍屋、神社佛寺、顛倒破損、殆不知先例、南殿前庭儲幄、爲御在所、自今日三箇日、嘔三口僧於御殿、被行大般若御讀經、依地動也、同月十日、被行軒廊御下、依地震也、同月十八日、被定地震御祈山陵使、並諸社諸寺御讀經時日僧名等、入夜有地震御祭、去九日以後、連日地震無不動之時、同月廿一日被立山陵使、同年八月九日記曰、自去月九日、連日地震、于今不絶、同十三日、依同事被立九社奉幣使、同十四日改元、改元曆二年爲文治、依大地震也、

同月十九日庚子、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

十九日庚子、地震良久、

建久二年三月六日甲寅、是夜、鎌倉強震アリ、

〔東鑑〕

建久二年三月六日甲寅、戊剋大地震、帝尺、頗吉瑞也云々、

同六年三月十二日丁酉、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

建久六年三月十二日丁酉、朝雨霽、午以後雨頻降、又地震、○  
震未ダ見ル  
所ナシ

正治元年一月一日癸巳、是夜、京都地震フ、

〔玉海〕

建久十年歲次己未、○正治元年正月大一日癸巳、甚雨、雷鳴殊甚、戊剋地震、此日日蝕也、

〔明月記〕

建久十年○正治元年正月一日癸巳、日蝕、自曉更陰雲忽盛、微雨頻灑、遲明以後甚雨、終日如注、臨昏雷電、地震、入夜天晴、

五月十六日丁未、是夜、鎌倉強震アリ、

〔東鑑〕

正治元年五月十六日丁未、丑剋大地震、

建仁元年三月十日庚甲、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

建仁元年三月十日庚申、卯剋地震、

同二年一月二十八日甲戌、鎌倉強震アリ、

〔東鑑〕

建仁二年正月廿八日甲戌、卯剋大地震、辰一點、朝日見雨輪、

十二月二十四日甲子、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

十二月廿四日甲子、卯剋地震、雷鳴兩三聲、

正治元年 建仁元年、二年 元久元年 承元元年、二年

元久元年十月六日乙未、鎌倉強震アリ、

〔東鑑〕

元久元年十月六日乙未、亥剋大地震、

十二月二十七日乙卯、子刻京都強震アリ、

〔仲資王記〕

元久元年十二月廿七日乙卯、水滿、子刻許大地震、以外事也、

十二月二十九日丁丑、是夜、京都地震フ、

〔明月記〕

元久元年十二月廿九日丁丑、天晴、雪飛、入夜六角少將被來談、○中東方有赤氣、亥時許地震、雖不及取曆、猶大震也、

十二月廿六日甲寅天晴、自秋比上邊水乾、此間已及此邊非悉乾、

承元元年四月九日甲寅、是夜、京都強震アリ、

〔仲資王記〕

承元元年四月九日甲寅、口口地震以外也、

〔明月記〕

承元元年四月九日天晴、過夜中大地震驚怖、

〔東鑑〕

六月十六日庚申、陰、涼氣不似例年、頗如三四月、世上貴賤、多以病惱、

同二年一月六日丙子、鎌倉強震アリ、

〔東鑑〕

七九

承元元年、三年、四年、建曆元年、建保元年

八〇

承元元年正月六日丙子、陰、雪時々飛、午刻大地震、七月二十日丁巳、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕七月廿日丁巳、午刻地震、

同三年四月一日甲子、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

承元三年四月一日甲子、申刻地震、

同四年十月三日戊午、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

承元四年十月三日戊午、曉地震、

建曆元年一月二十七日辛亥、鎌倉強震アリ、

〔東鑑〕

承元五年〇建曆正月廿七日辛亥、霧、寅刻大地震、今朝日無

光陰、其色赤黃也、

五月十五日丙寅、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

五月十五日丙寅、未刻地震、

七月三日壬子、鎌倉地震強シ、

〔東鑑〕

七月三日壬子、晴、酉刻大地震、牛馬騷驚、建保元年一月一日癸卯、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕建曆三年〇建保正月一日癸卯、天顏快霧、已越地震、

五月二十一日辛酉、鎌倉地大ニ震ヒ、大地裂ケ、舍屋破壊セリ、

〔東鑑〕

五月廿一日辛酉、午刻大地震、舍屋破壊崩地裂、於此境近代

無如此大動云々、而廿五日內可有兵動之由、陰陽道勘申之云

云、

七月七日丙午、是夜、鎌倉強震アリ、

〔東鑑〕

七月七日丙午、晴、丑刻大地震、

八月二十九日丁酉、是夜、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

八月廿九日丁酉、天霧、亥刻地震、

九月十七日甲寅、京都地震強シ、

〔百練抄〕

建保元年九月十七日、巳時大地震有聲、

同二年二月一日丙申、是夜、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

建保二年二月一日丙申、晴、亥刻地震、

二月七日壬寅、鎌倉強震アリ、

〔東鑑〕

二月七日壬寅、晴、寅刻大地震、

四月三日丁酉、京都、鎌倉地震強ク震フ、

〔百練抄〕

建保二年四月三日、今夜亥時地大震、

〔東鑑〕

四月三日丁酉、亥刻大地震、

九月二十二日癸未、是夜、鎌倉強震アリ、

〔東鑑〕

九月廿二日癸未、霧、丑刻大地震、

同三年八月二十一日戊申、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

建保三年八月廿一日戊申、晴、未刻地震、

同月二十二日己酉、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

廿二日己酉、地震、

九月六日壬戌、丑刻鎌倉強震アリ、

〔東鑑〕

九月六日壬戌、晴、丑刻大地震、

同月八日甲子、寅刻鎌倉強震アリ、

〔東鑑〕

八日甲子、陰、寅刻大地震、

同月十一日丁卯、寅刻鎌倉強震アリ、續テ又震

フ、

〔東鑑〕

十一日丁卯、晴、寅刻大地震、未刻又小動、

同月十三日己巳、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

十三日己巳、晴、未刻地震、

同月十四日庚午、鎌倉地ニ回震フ、

〔東鑑〕

十四日庚午、晴、酉刻地震、戌刻地震、同時雷鳴、

同月十六日壬申、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕



建保三年 承久二年、三年 元仁元年 嘉祿元年

十六日壬申、晴、卯刻地震、

同月十七日癸酉、鎌倉地三回震フ、

(東鑑)

十七日癸酉、晴、戌刻三度地震、

廿一日丁丑、晴、依連々地震、被行御祈、三萬六千神祭親職、

地震祭宜賢奉仕之、駿河守季時沙汰之、江左衛門尉能範爲御

使、

承久二年一月十二日癸卯、鎌倉地震フ、

(東鑑)

承久二年正月十二日癸卯、卯刻地震、

三月六日丙申、京都地震フ、

(玉鑿)

承久二年三月六日丙申、天陰、午後雨降、未刻地震、

十二月二日戊午、鎌倉地震フ、

(東鑑)

十二月二日戊午、寅刻地震、

同三年一月二十九日甲寅、鎌倉地震フ、

(東鑑)

承久三年正月廿九日甲寅、午刻地震、

十月二日壬子、是夜、鎌倉地震フ、

(東鑑)

十月二日壬子、戌刻地震、

元仁元年五月八日甲辰、寅刻京都強震アリ、卯時

又震フ、

(百練抄)

元仁元年五月八日、寅刻大地震、卯時又震動、

嘉祿元年一月十五日丙子、鎌倉地震フ、

(東鑑脫漏)

元仁二年○嘉祿元年正月十五日丙子、午刻地震、

三月十一日壬申、鎌倉地震フ、

(東鑑脫漏)

三月十一日壬申、寅刻地震、

五月十七日丁丑、鎌倉地震フ、

(東鑑脫漏)

五月十七日丁丑、巳刻地震、

十月十一日戊戌、子刻鎌倉強震アリ、

(東鑑脫漏)

十月十一日戊戌、子刻大地震、

同二年三月二十九日甲申、鎌倉地震フ、

(東鑑脫漏)

嘉祿二年三月廿九日甲申、辰刻地震、

四月二十七日辛亥、鎌倉強震アリ、

(東鑑脫漏)

四月廿七日辛亥、晴、未刻大地震、

六月二十六日己酉、鎌倉地震フ、

(東鑑脫漏)

六月廿六日己酉、申刻地震、

同月二十七日庚戌、鎌倉地震フ、

(東鑑脫漏)

廿七日庚戌、申刻地震、

同月二十八日辛亥、子刻鎌倉地震フ、

(東鑑脫漏)

廿八日辛亥、子刻地震、

七月一日甲寅、亥刻鎌倉地震フ、

(東鑑脫漏)

七月一日甲寅、晴、亥刻地震、

八月一日甲申、鎌倉地震稍強シ、

(東鑑脫漏)

八月一日甲申、晴、子刻地震、大動也、

十月六日戊子、子刻鎌倉地震フ、

(東鑑脫漏)

十月六日戊子、子刻地震、

安貞元年一月十四日甲子、鎌倉地震フ、

(東鑑脫漏)

嘉祿三年○安貞元年正月十四日甲子、晴、午刻地震、

三月七日丙辰、是夜、鎌倉地震フコト烈シク、地

裂ケ、所々ノ門扉築垣等顛倒セリ、

(東鑑脫漏)

三月七日丙辰、陰、戌刻大地震、所々門扉築垣等顛倒、又地割

云々、去建曆三年和田左衛門尉義盛叛逆之比、如此之有大

動、中下馬橋之地割事有之、古老談之、近年無比類云々、

同月十五日甲子、鎌倉地震フ、

(東鑑脫漏)

十五日甲子、酉刻地震、

四月十三日辛酉、是夜、鎌倉地震フ、

(東鑑脫漏)

甲 號六十四第告報會查調防豫災震

四月十三日辛酉、戌刻地震、  
 同月二十六日甲戌、是夜、鎌倉地震フ、  
 (東鑑脫漏)  
 廿六日甲戌、癸亥刻地震、  
 五月十一日己丑、鎌倉地震フ、  
 (東鑑脫漏)  
 五月十一日己丑、晴、未刻地震、  
 九月三日己卯、丑刻鎌倉地強ク震フ、  
 (東鑑脫漏)  
 九月三日己卯、晴、丑刻大地震、  
 十一月六日辛巳、鎌倉強震アリ、  
 (東鑑脫漏)  
 十一月六日辛巳、酉刻大地震、左近將監親實爲奉行、連々地震事被驚思食、云善政爲、云御祈禱事、可進意見之由、被仰諸道云々、  
 寬喜元年十一月、是月、鎌倉地震フ、  
 (東鑑)  
 寬喜元年十一月廿六日、依地震、始行御祈等云々、  
 ○地震ニ依テ祈禱ヲ行フ、ソノ小體ニ非ルコト知ルベシ、然レドモ本書殘闕シテ、コノ地震ヲ載セズ、今姑ク是月ニ掲ゲタリ、

文曆元年九月十六日壬子、京都強震アリ、  
 (百練抄)  
 天福二年<sup>○文曆</sup>九月十六日壬子、寅刻大地震、萬人驚遽、占文不輕、兵革大喪云々、  
 (一代要記)  
 文曆元年甲午十一月五日戊元、依天變地震也、  
 嘉禎元年三月九日壬寅、是夜、鎌倉強震アリ、  
 (東鑑)  
 文曆二年<sup>○嘉禎</sup>三月九日壬寅、晴、亥刻大地震、  
 同月十六日己酉、鎌倉地強ク震ヒ、餘震止マズ、  
 (東鑑)  
 十六日己酉、卯刻大地震、今日依天變妖等事、可有御祈禱政等之由、於武州御亭有其沙汰、師員朝臣爲奉行云々、  
 四月十三日乙亥、午刻地震、  
 廿八日庚寅、未刻地震、  
 廿九日辛卯、未刻地震、  
 卅日壬辰、巳刻地震、  
 五月一日癸巳、巳刻地震、  
 三日乙未、午刻地震、  
 四日丙申、戌刻地震、

甲 號六十四第告報會查調防豫災震

五日丁酉、午刻地震、  
 七日己亥、午刻地震、  
 八日庚子、依天變地妖事、可被行御祈禱德政等之由、内々有其沙汰、連日地震事、不有此例之由、古老之所談也、  
 六月十六日丁丑、地震御祈等始行、  
 閏六月二十二日癸丑、鎌倉地震フ、  
 (東鑑)  
 閏六月廿二日癸丑、午刻地震、  
 九月一日辛酉、京都強震アリ、  
 (帝王編年記)  
 嘉禎元年九月一日、地大震、  
 (一代要記)  
 嘉禎元年乙未九月十九日戊元、依天變地震也、  
 同月二十九日己丑、子刻鎌倉地震フ、  
 (東鑑)  
 九月廿九日己丑、子刻地震、  
 同二年二月二十八日乙卯、亥刻鎌倉地震フ、  
 (東鑑)  
 嘉禎二年二月廿八日乙卯、亥刻地震、  
 六月十一日丙申、戌刻鎌倉地震フ、

(東鑑)  
 六月十一日丙申、癸、戌刻地震、  
 同三年四月七日戊子、鎌倉地震フ、  
 (東鑑)  
 嘉禎三年四月七日戊子、晴、酉刻地震、  
 六月一日庚辰、京都地強ク震フ、  
 (百練抄)  
 嘉禎三年六月一日庚辰、卯刻大地震、萬人驚恐之、元曆以後無如此事、  
 九月十一日己未、子刻鎌倉地震フ、  
 (東鑑)  
 九月十一日己未、子刻地震、  
 同月二十三日辛未、丑刻鎌倉地震フ、  
 (東鑑)  
 廿三日辛未、丑刻地震、  
 同月二十四日壬申、子刻鎌倉地震フ、  
 (東鑑)  
 廿四日壬申、子刻地震、  
 十月四日壬午、天變御祈等被行之、  
 曆仁元年十二月九日庚戌、鎌倉地震フ、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

〔東鑑〕  
 曆仁元年十二月九日庚戌、天霽、午刻地震、  
 延應元年十一月十二日丁丑、鎌倉地強ク震フ、  
 〔東鑑〕  
 延應元年十一月十二日丁丑、午刻大地震、  
 仁治元年一月十三日戊寅、鎌倉地震フ、  
 〔東鑑〕  
 延應二年〇仁治元年正月十三日戊寅、辰刻地震、  
十四日巳卯、於御所被行天地災變祭、維繼朝臣奉仕之、將軍家出御祭庭、周防前日親實爲御使、  
 四月十八日壬子、鎌倉地震フ、  
 〔東鑑〕  
 四月十八日壬子、未刻地震、  
 同二年一月十四日癸卯、是夜、鎌倉地震フ、  
 〔東鑑〕  
 仁治二年正月十四日癸卯、天晴、戌刻地震、今夕將軍家御祈被始行、百日天胃地府祭、晴繼朝臣奉仕之、  
 二月七日乙丑、巳刻鎌倉地震強シ、明日マデ五回震フ、  
 〔東鑑〕

二月七日乙丑、巳刻大地震、古老云、去建曆年中有如今之大動、即是和田左衛門尉義盛叛逆兆也、其外於關東未有如此例云々、其後午時子刻兩度小動、  
 八日丙寅、巳刻地震、昨日兩日之間、動搖五箇度也、  
 三月六日甲午、鎌倉地震フ、  
 〔東鑑〕  
 三月六日甲午、辰刻地震、  
 同月十五日癸卯、鎌倉地震フ、  
 〔東鑑〕  
 十五日癸卯、細雨瀧、巳刻地震、  
 四月三日辛酉、鎌倉地強ク震ヒ、海嘯、由比濱ノ入幡宮拜殿ヲ壞ル、  
 〔東鑑〕  
 四月三日辛酉、霽、戌刻大地震、南風、由比浦大鳥居内拜殿被引潮流失、着岸船十餘艘破損、  
廿七日乙酉、爲天變地妖御祈、於御所置角被行天地災變之祭、奉貞朝臣奉仕之、將軍家出御其庭云々、  
 七月四日庚寅、子刻鎌倉地震フ、  
 〔東鑑〕  
 七月四日庚寅、子刻地震、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

十月十三日丁卯、亥刻鎌倉地震フ、  
 〔東鑑〕  
 十月十三日丁卯、亥刻地震、  
 寬元元年五月二十三日戊戌、子一點鎌倉地強ク震フ、  
 〔東鑑〕  
 寬元元年五月廿三日戊戌、天霽、子一點大地震、  
 同二年六月十四日壬子、鎌倉地震フ、  
 〔東鑑〕  
 寬元二年六月十四日壬子、天霽、巳刻地震、  
 七月二日庚子、京都地震フ、  
 〔百練抄〕  
 寬元二年七月二日庚子、辰時地震、有聲、萬人避恐之云々、  
 九月十一日己酉、亥刻鎌倉地震フ、  
 〔東鑑〕  
 九月十一日己酉、亥刻小地震、  
 同月二十八日己未、鎌倉地震フ、  
 〔東鑑〕  
 廿八日己未、寅刻地震、

十二月一日丁卯、鎌倉地震フ、  
 〔東鑑〕  
 十二月一日丁卯、天晴、卯刻地震、  
 同三年一月十八日甲寅、鎌倉地震フ、  
 〔東鑑〕  
 寬元三年正月十八日甲寅、天霽、卯刻地震、  
 同月二十日丙辰、京都地震フ、  
 〔東鑑〕  
 廿日丙辰、天霽、未刻地震、  
 三月九日甲辰、京都地震フ、  
 〔百練抄〕  
 寬元三年三月九日甲辰、午時地震、  
 四月五日己巳、戌刻京都地震フ、  
 〔百練抄〕  
 四月五日己巳、戌刻地震、  
 同月七日辛未、子刻京都地震フ、  
 〔百練抄〕  
 七日辛未、子刻地震、  
 同月二十八日壬辰、京都地震フ、

災豫防會報告第四十六號

甲

(百練抄)  
廿八日壬辰、巳刻地震、  
五月八日辛丑、京都地震フ、  
(百練抄)  
五月八日辛丑、戌時地震、  
同月二十六日庚申、京都地震フ、  
(百練抄)  
廿六日庚申、巳刻地震、  
十二月二十日辛巳、鎌倉地強ク震フ、  
(東鑑)  
十二月廿日辛巳、午刻大地震、  
同四年一月六日丙申、京都地震強シ、  
(百練抄)  
寬元四年正月六日丙申、申刻大地震、  
五月七日甲子、鎌倉地震フ、  
(東鑑)  
寬元四年五月七日甲子、天晴、巳刻地震、  
七月二日戊午、鎌倉地震フ、  
(東鑑)

七月二日戊午、天晴、午刻地震、  
同月五日辛酉、鎌倉地震フ、  
(東鑑)  
五日辛酉、天霽、巳刻地震、  
十月十日乙未、京都地震フ、  
(百練抄)  
十月十日乙未、地震、  
十一月二十七日壬午、鎌倉地強ク震フ、  
(東鑑)  
十一月廿七日壬午、寅刻大地震、  
十二月五日庚寅、京都地震強シ、  
(百練抄)  
十二月五日庚寅、大地震、  
寶治元年一月十三日丁卯、京都地震フ、  
(百練抄)  
寬元五年〇寶治元年正月十三日丁卯、午時地震、  
三月十三日丙寅、是夜、京都地震フ、  
(百練抄)  
三月十三日丙寅、今夜有鳴動地震、

災豫防會報告第四十六號

甲

六月十日辛卯、京都地震フ、  
(百練抄)  
六月十日辛卯、辰刻地震有聲、  
同月十九日庚子、京都地震フ、  
(百練抄)  
十九日庚子、午刻地震、  
十月八日丁亥、鎌倉地強ク震フ、  
(東鑑)  
寶治元年十月八日丁亥、卯四點大地震云々、  
十一月二十六日乙亥、丑一點鎌倉地震強シ、  
(東鑑)  
十一月廿六日乙亥、陰、丑一點大地震云々、  
同月二十九日戊寅、京都地震フ、  
(百練抄)  
十一月廿九日戊寅、辰時地震、  
建長二年七月十八日壬午、鎌倉強震アリ、餘震十六度ニ及ベリ、  
(東鑑)  
建長二年七月十八日壬午、口尅大地震、其後小動十六度云

云、  
同三年一月十九日庚辰、京都地二回震フ、  
(百練抄)  
建長三年正月十九日庚辰、地震兩度、  
九月十七日甲戌、京都地震フ、  
(百練抄)  
九月十七日甲戌、午刻地震、  
十月二十三日己卯、丑刻鎌倉地二回震フ、  
(東鑑)  
建長三年十月廿三日己卯、丑尅雷鳴一聲、地震兩度云々、  
同四年五月七日庚寅、鎌倉地震フ、  
(東鑑)  
建長四年五月七日庚寅、天晴、巳刻地震、  
同五年二月二十五日癸酉、鎌倉地震強シ、  
(東鑑)  
建長五年二月廿五日癸酉、癸、午尅大地震、龍神動、  
四月三日丙辰、鎌倉地震フ、  
(東鑑)  
四月三日丙辰、晴、申尅雷鳴雨降、地震、

建長五年、六年 正嘉元年

九〇

六月十日壬戌、鎌倉強震アリ、續デ一兩度又震

〔東鑑〕

六月十日壬戌、霽、未尅大地震、近年無比類、又小選而小動一兩度、

十三日乙丑、小雨降、爲地震御祈、於御所被行泰山府君祭、爲親朝臣奉仕之、後御覽前司基政爲御使、

九月十六日辛卯、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

九月十六日辛卯、晴、午尅地震、入夜小雨澆、

同月十七日壬辰、京都地震フ、

〔百練抄〕

建長五年九月十七日壬辰、戌刻許地震、

同六年二月十九日壬戌、戌刻京都地震フ、

〔百練抄〕

建長六年二月十九日壬戌、戌刻地震、

十一月十八日丁巳、鎌倉強震アリ、

〔東鑑〕

建長六年十一月十八日丁巳、晴、酉尅大地震、

正嘉元年五月十八日壬申、子刻鎌倉強震アリ、

〔東鑑〕

正嘉元年五月十八日壬申、陰、子尅大地震、現度、被尊下之處、晴茂朝臣兄弟七人連署勸申惡動之旨、廣賢申吉動之由、仍無沙汰被聞云々、

八月一日癸未、戌刻鎌倉強震アリ、

〔東鑑〕

八月一日癸未、晴、戌刻大地震、

同月二十三日乙巳、戌刻鎌倉地大ニ震ヒ、神社

佛閣顛倒シ、山岳崩レ、平地裂レ、泥水ヲ涌出ス、

餘動月ヲ踰エタリ、

〔東鑑〕

廿三日乙巳、晴、戌刻大地震有音、神社佛閣、一字而無全、山岳顛倒、人屋顛倒、築地皆悉破損、所々地裂水涌出、中下馬橋邊地裂破、自其中火炎燃出、色青云々、

廿五日丁未、雨降、地震小動五六度、爲筑前次郎左衛門尉行頼奉行、依地震可致御祈禱之由、被仰下御持僧並陰陽道之

輩、

九月四日乙卯、小雨降、申尅地震、去月廿三日大動以後、至今小動不休止、依之爲親奉仕天地災變、御使伊賀前司朝行云、

云、

正嘉元年、二年 文應元年 弘長三年 文永元年

九一

廿四日乙亥、晴、依地震御所南方東方築地壞也、來々月一日

大慈寺供養以前、可被築地否、有其沙汰、召陰陽師被問方忌

事、其間彼輩有條々相論、爲親廣賢等申云、南御遊年方辰之

外無憚、東大將軍遊行之間、被修補無憚、本文先例分明也云

云、晴賢時茂時憲以平文元等申云、是已大破也、自根可築上

之間、可爲大犯土、不論大小、可有憚云々、亦進光榮有行泰親

等朝臣勘文、泰親者、保元造內裏之時築垣、大將軍遊行之間、

可被修理之由載之、而以平申云、不被用往代之例、近來可憚

之旨有口傳云々、奥州前武州出羽前司等有評議、被止修復

議、

〔讃岐大日記〕

正嘉元年二月廿三日、大地震、

十月十五日丙申、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

十月十五日丙申、朝雨降、夕甚雨、雷鳴、申尅地震、

〔東鑑〕

十一月八日己未、大地震、如去八月廿三日、

同二年四月二十二日辛丑、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

正嘉二年四月廿二日辛丑、申尅地震、

十二月十六日辛卯、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

十二月十六日辛卯、天晴、寅尅地震、巳時雷鳴及數度、

文應元年三月二十五日壬辰、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

文應元年三月廿五日壬辰、晴、卯一點地震、陰陽道之輩、付勘

文於和泉前司行方、

弘長三年五月十九日戊戌、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

弘長三年五月十九日戊戌、天晴、寅尅地震、

文永元年二月十二日丁巳、子刻京都地震フ、

〔外記日記〕

○本掛八前田侯爵藏本ニシテ、乾坤二卷ニ分テ、乾卷ハ文永元年ヲ、坤卷ハ文永三年、四年、弘安十年ノ三年ヲ收メタリ、

文永元年二月十二日丁巳、子刻小地震、

同月二十七日壬申、京都地震フ、

〔外記日記〕

廿七日壬申、寅刻地震有聲、

六月二十八日辛未、是夜、京都地震フ、

〔外記日記〕

六月二十八日<sup>辛未</sup>、今夜子刻地震フ、

八月十六日<sup>丁巳</sup>、京都地震フ、

〔外記日記〕

八月十六日<sup>丁巳</sup>、今日申刻地震、

同月二十五日庚寅、戌刻京都地震フ、

〔外記日記〕

廿五日<sup>庚寅</sup>、戌刻地震有音、

十月五日<sup>丙午</sup>、丑刻京都地震強シ、

〔外記日記〕

十月五日<sup>丙午</sup>、丑刻大地震有音、

同月六日<sup>丁未</sup>、丑刻京都地震又震フ、

〔外記日記〕

六日<sup>丁未</sup>、丑刻又地震、

同月七日<sup>戊申</sup>、京都兩次地震フ、

〔外記日記〕

七日<sup>戊申</sup>、又兩度地震、

同月二十九日<sup>甲午</sup>、亥刻京都地震フ、

〔外記日記〕

廿九日<sup>甲午</sup>、今夕亥刻地震、

同二年一月十五日<sup>乙酉</sup>、鎌倉地震フ、

〔東鑑〕

文永二年正月十五日<sup>乙酉</sup>、天晴、午尅地震、

三月九日<sup>戊寅</sup>、亥刻鎌倉強震アリ、

〔東鑑〕

三月九日<sup>戊寅</sup>、天晴、亥刻大地震、

四月六日<sup>乙巳</sup>、京都地震フ、

〔外記日記〕<sup>秘開本</sup>

文永二年四月六日<sup>乙巳</sup>、午刻地震有聲、

同三年六月二十四日<sup>乙酉</sup>、子刻鎌倉地震強ク震フ、

〔東鑑〕

文永三年六月廿四日<sup>乙酉</sup>、子刻大地震、

同四年十月九日<sup>壬戌</sup>、京都地震フ、

〔外記日記〕

文永四年十月九日<sup>壬戌</sup>、今日申刻地震、

同五年五月四日<sup>甲寅</sup>、京都地震強シ、

〔吉續記〕

文永五年五月四日<sup>甲寅</sup>、參内、辰刻大地震、權天文博士泰盛、内

内依召參任、頭中將奉行云々、相具維弘參於便宜所、被尋地

震御卜趣、頭中將奉行尋之、其趣凶也、殊公家御憤、諸凶事可

就起之趣見之云々、可有御祈、御祭何可宜哉之由被尋、天胃

地府御祭可宜之由令申、予可申沙汰之由有仰、即問答泰盛朝

臣、可擇申日次之由仰之、明後六日可宜之由申之、可進支度之

山仰之、此趣御奏聞、伴日御撫物御鏡片可奉渡之由令申、爲勅

使相儀六位、用途事内々圓滿院宮可有御沙汰之由有仰、定甚

深御沙汰歟、即支度内々進入、及深更祇候、時雨、定濟僧正勸

修金輪法、自去月勤行、有御聽聞、御加持之後、可誦尊勝陀羅

尼之由可仰旨、召予有仰、即仰此趣、大地震御憤之由見占文、

殊可抽丹誠之由仰定濟僧正、及晚鐘退出、

〔帝王編年記〕  
文永五年五月五日、辰刻地震動木枝、〇五日ニ作、  
〔續史愚抄〕  
文永五年五月四日甲寅、地震樹動、權天文博士泰盛朝臣占

曰、公家御憤、及諸凶災可起者、權僧正定濟兼所勤任御祈、自

今日依地震事、可修尊勝陀羅尼由被仰、奉行藏人中宮權大進

經長、代禱年、  
〔吉續記〕  
五月六日晴、參内、今日天胃地府御祭也、勅使藏人那廣持向御撫物、一日御祭

也、御精進不懶魚味、兼相察泰盛、  
〔外記日記〕  
文永五年、六年、十年、弘安十年

〔帝王編年記〕  
五月六日、依地震御祈、權天文博士泰盛供天胃地府御祭、

〔續史愚抄〕  
五月六日丙辰、爲地震御祈、權天文博士泰盛朝臣奉任天胃地府祭、勅使藏人

那廣持向御撫物於館奉行藏人中宮權大進經長、宮中御修法結願、  
〔吉續記〕  
同六年十一月十六日<sup>丁巳</sup>、近江國日吉社振動シ

テ懸魚落ッ、  
〔一代要記〕  
文永六年十一月十六日、辰刻日二宮振動三度、懸魚火釘切而

落地、  
同十年三月九日<sup>壬戌</sup>、會津強震アリ、  
〔異本塔寺長帳〕  
文永十年癸酉三月九日、大地震、

是歲、京都地震、震フ、  
〔續史愚抄〕  
今年、文永地震數度、又儀、或記、吉續記、  
增鏡、一代要記、

弘安十年九月二日<sup>庚寅</sup>、京都地震強ク震フ、  
〔外記日記〕  
弘安十年九月二日<sup>庚寅</sup>、午刻大地震以外也、

同月三日<sup>辛卯</sup>、子刻京都地震又強シ、  
〔外記日記〕

弘安十年 元亨三年 正中二年 元弘元年

三日辛、子刻大地震有音、  
元亨三年五月三日甲午、鎌倉強震アリ、  
(武家年代記)

元亨三年五三、未刻大地震、

正中二年十月二十一日戊戌、是夜、近江、山城二  
國、地震フコト強ク、竹生島及ビ荒地中山崩レタ  
リ、  
(國太曆)康永四年條、

正中二年乙丑十月廿一日、大地震、自子初分、至子卯終、輪燈十二悉消、常  
燈過半失照用、雖然依光耀不盡、參堂禪徒挑之、  
(續史愚抄)

正中二年十月廿二日己亥、今夜大地震、自子刻至卯刻云、荒地  
或作廿一日、誤歟、  
之、中山崩、日吉八王子御正體附、同社燈籠火滅、延曆寺十二  
輪燈悉滅、但常燈內有光耀、未盡、參堂價挑之由、後日言之、  
治承元十廿七、同三十一七、文治元七九等有例云、又竹生島  
損者、道平公記、國太  
曆道、

(皇代記) 從所載  
正中二年四月廿六日、依疾疫流行並去年大地震改元、  
(塔寺八幡宮長帳)

正中元年十月廿一日、大地震、竹生島ノ奥ノ院秘所、崩テ湖  
ニ入、  
(續本朝通鑑)

正中元年十一月甲辰、大地震、竹生島崩、半沒琵琶湖、  
○長帳、通鑑ノ、前年十月、十一月ノ事ト爲スハ非ナリ、續史愚抄、道平公記  
ニ據リ明夜ニ揚グタレド、未ダ本書ヲ見ザレバ、姑ク國太曆ニ據リ、是日ニ  
揚グタリ、

元弘元年七月三日丁丑、紀伊國地大ニ震ヒ、千里  
濱ノ干潟、隆起シテ陸地ト爲レリ、  
(參考太平記)

元弘元年 金勝院本作元弘二年、北條家本及、七月 今川家本作 三日 大地  
神明鏡作元德二年、恐非也、見前、 七月 十月、非也、 大地  
震有テ、紀伊國千里濱ノ遠干潟、俄ニ陸地ニ成事、二十餘町  
ナリ、

(神明鏡)  
元德二年十月二日、大地震、紀州千里濱邊、俄ニ陸地成事、廿  
餘町、  
(櫻雲記)

元德二歲十月三日、大地震、紀州千里濱、陸地トナル、凡廿四  
町、  
○神明鏡ノ誤ハ、太平記既ニ之ヲ辨ゼリ、櫻雲記、前年ニ係グシモ、亦誤  
ナラン、

七月七日辛巳、駿河國地震ヒ、富士山數百丈崩レ

タリ、

(參考太平記)

又同七月七日ノ酉ノ刻ニ、地震有テ、富士ノ絶頂崩ル事、  
數百丈ナリ、卜部宿禰大龜ヲ燒テトヒ、陰陽博士古文ヲ開テ  
見ルニ、國王位ヲ易、大臣災ニ遭トアリ、勘文ノ面穩ナラズ、  
尤御慎有ベシト密奏ス、

○毛利家天正本ニ云、卜部宿禰陰陽博士共ニ勘文ノ面穩ナ  
ラズ、最御慎アルベシト密奏ス、君臣一時ニ驚テ、寺々ノ  
火災、所々ノ地震、徒事ニ非ズ、去年 按行、夏ノ比ヨリ玉體  
御不豫ノ事有テ、按續鏡元弘元年近臣又關東へ召下サレ、 誅戮  
ノ罪責ニ當ル、按續鏡其上下尙危ヲ踏テ、 今ヤ不思議ノ  
出來ラント、人々驚テ、斯テハ如何有ベシトテ、元德三年  
ヲ改テ、元弘元年トゾ申ケル云々、皇年代略記、公卿補任云、  
元德三年八月、改元弘、

(神明鏡)  
元德二年十月七日、地震、富士禰頂崩事數十丈也ト云リ、  
(櫻雲記)

元德二年十月七日、又大地震、富士絶頂、百餘丈崩、  
○神明鏡、櫻雲記並ニ元德二年十月ニ係グ、二書往々錯誤アリ、今姑ク太平  
記ニ從ヘリ、

建武元年八月二十七日壬午、京都地震強シ、

元弘元年 建武元年 延元三年、四年

(皇年代私記)

建武元年八月廿七日、大地震、

十二月十三日丁卯、京都地震強シ、  
(皇年代私記)

十二月十三日、大地震、  
(續史愚抄)

建武元年十二月十三日丁卯、地震、皇年私記、

延元三年 北朝曆 七月十九日壬子、京都強震アリ、  
(皇年代私記)

曆應元年七月十九日、甲午朔、大地震、

同月二十二日乙卯、京都地震フ、  
(皇年代私記)

廿二日、地震、

同四年 北朝曆 九月四日庚申、子刻京都地震フ、  
(師守記)

曆應二年九月四日庚申、天晴、今夜子刻許地震甚、

十一月七日壬戌、鎌倉地震フ、  
(鶴岡社務記錄)

曆應二年十一月七日、未刻鳴動、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

興國元年北朝曆三年一月二十六日庚辰、京都地震強ク震

〔師守記〕

曆應三年正月廿六日庚辰、天晴、入夜吹風、今日酉刻大地震、

同二年北朝曆四年二月十三日辛卯、京都地震フ、

〔師守記〕

曆應四年二月十三日辛卯、天陰、雨雪降、未刻以後一向雨降、今日未刻許地震、

三月八日乙卯、鎌倉強震アリ、

〔鶴岡社務記録〕

曆應四年三月八日、大地震、

九月十六日庚寅、京都地震フ、

〔武家年代記〕

曆應四年九十六、地震、

〔續史愚抄〕

興國二年北朝曆二年九月十六日庚寅、大地震、武家年代記

同三年北朝曆三年六月十五日乙卯、京都地震フ、

〔師守記〕

康永元年六月十五日乙卯、天晴、今日午刻地震、

〔師守記〕

同五年北朝曆三年一月十二日癸酉、京都地震フ、

康永三年正月十二日癸酉、天晴、朝間雪降、今日午刻地震、

〔師守記〕

九月九日乙未、是夜、京都地震フ、

〔師守記〕

同六年北朝曆和元年六月七日己未、京都地震フ、

〔師守記〕

貞和元年六月七日己未、天陰、雨降、甚雨、申刻許地震、

〔師守記〕

八月十七日戊辰、京都地震フ、

〔師守記〕

貞和元年八十七、地震、

〔皇年代略記〕

正平元年北朝曆和二年八月四日庚戌、京都地震強シ、

〔國太曆〕

貞和二年八月四日丁未朔、天晴、丑刻許大地震、

十九日、天晴、入夜大外記師利入來略○中語曰、今日四日申刻中

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

御門堀川以西至大宮大路、羽蟻出現、如煙霞、路人不通得云云、

十一月二十三日丁卯、京都地震フ、

〔續史愚抄〕

正平元年北朝曆和二年十一月廿三日丁卯、有地震占文云、此日歟 同日未詳

十二月二日丙子、京都地震フ、

〔皇年代私記〕

貞和二年十二月二日、地震、

同二年北朝曆和三年一月十五日戊午、京都地震フ、

〔國太曆〕

貞和三年正月十五日甲辰朔、天晴、今日巳刻許地震、

〔師守記〕

貞和三年正月廿日、午始地震、

同月三十日癸酉、京都地震フ、

〔師守記〕

卅日癸酉、天陰、至未刻雪降、及晚晴、今晚卯刻地震、

五月六日戊申、京都地震フ、

〔國太曆〕

五月六日、天陰、今晚地震、月在強粉、

正平元年、二年

九七

〔師守記〕五月六日戊申、天陰、辰刻以後雨降、今晚寅刻地震、

〔皇年代略記〕從所載

貞和三年五六、大地震、

六月二十七日戊戌、是夜、京都地震フ、

〔師守記〕

六月廿七日戊戌、天晴、今夜子刻許大地震、

〔續史愚抄〕

正平二年北朝曆和三年六月廿八日己亥、國弘朝臣有俊朝臣等、進天

變地震日本及等占文、同日

八月二十八日丁酉、京都地震フ、

〔師守記〕

八月廿八日丁酉、天陰、雨降、及晚止、今朝巳刻地震、

〔師守記〕

九月二十三日壬戌、京都地震フ、

〔師守記〕

九月廿三日壬戌、天陰、雨降、今日申刻地震、

〔師守記〕

十月三日壬申、京都地震フ、

〔師守記〕

同月四日癸酉、京都地又震フ、



(師守記) 四日、今夜亥刻許地震、

十一月十六日甲寅、京都地震フ、  
(師守記)

十一月十六日甲寅、天晴、今日酉刻地震、

同日二十日戊午、京都地震フ、明日又震フ、

(師守記)

廿日戊午、天晴、今日巳刻地震、

廿一日己未、天陰、午刻以後雪降、終日不休、四寸許委地、今日午刻地震、

十二月十八日丙戌、京都地震フ、

(國太曆)

十二月十八日、天晴、抑今曉寅刻有地震云々、

(師守記)

十二月十八日丙戌、今曉地震、

同三年北朝貞和四年一月十日丁未、京都地震フ、

(國太曆)

貞和四年正月十日、天陰、寅刻歎有地震、

同四年北朝貞和五年四月十三日癸酉、京都地震フ、明曉又

震フ、

(師守記)

貞和五年四月十三日癸酉、(顯世)今日戌刻地震、  
十四日甲戌、(顯世)今曉寅刻地震、

七月十九日戊寅、京都地震稍強シ、

(師守記)

七月十九日戊寅、天晴、今日未刻大地震移刻、

(皇年代私記)

貞和五年七月或作六月十九日、地震、

(續史愚抄)

七月十九日戊寅、未刻地震大動有音、或作六月、顯世、○國太曆、皇年私記

同五年北朝貞和五年五月二十三日丁丑、京都地震強ク震ヒ、  
祇園社石塔ノ九輪墜碎セリ、餘震月ヲ踰ユ、

(康富記)大地震  
近例

觀應元年五月廿三日、大地震、

六月廿二日、大地震、

七月卅日、被行七佛藥師法、依地

八月廿四日、被始十社御讀經、地震御祈也、

(祇園執行日記)

貞和六年庚寅五月廿三日、申刻大地震、酉了小動數反、申刻震動之時、百度大路石堂塔九輪落碎了、希代大震動也、條々凶不輕云々、珍事々々、

廿五日、申刻大地震、火神動、同一昨日、

廿九日、寅刻地震、午刻又地震、天王動也、

六月十日、酉刻地震、

十一日、辰刻地震、

廿日、今曉卯刻地震、

廿二日、亥刻大地震、火神動、不吉動也、

廿五日、辰刻地震、又未刻震、

(天正本太平記) ○皇考太

貞和六年五月廿日、戌時大地震有テ、山谷ヲ穿テ、大地モ裂テ、行旅座壇ノ人々モ、心神ヲ惱ス、

○二十日ハ廿三日ノ誤ナリ、續史愚抄、大日本史、其誤ヲ脱フ、

(續史愚抄)

正平五年北朝觀應元年五月廿日甲戌、或記地震云、天正本

廿三日丁丑、申刻大地震、塔婆九輪多墮、後日天文博士安倍

時經及泰久周官等、進勘文、言火神動、天子御憤不輕、及喪事

飢饉兵革已下凶兆者、皇朝正記、顯世記、祇園執

廿五日己卯、地震大動、祇園執

六月十九日壬寅、此日於左馬頭義詮朝臣三條坊門第、行五壇法、中壇阿闍梨前大僧正增基、是去月大地震祈謝云、五大成覺、維僧正記

(大日本史)

後村上天皇本紀、

正平五年庚寅夏五月廿日甲戌、京師地大震、天正本

廿三日丁丑、京師地大震、顯世記、祇園執行日記

(皇年代略記)

觀應元五廿九、寅午兩度地震、

(皇年代私記)

觀應元五廿九、寅刻午刻申刻三箇度地震、

七月二日乙卯、京都餘震猶ホ震フ、

(國太曆)

觀應元年七月二日乙卯、天晴、今日申初東南方有音、其後地震、已及卅餘日、兆不從沒、(從九)尤可畏事也、

十二日乙丑、天晴、今日爲被申地震事、上皇被獻御書於山陵、

可爲五陵之由、兼有沙汰、而使不足三陵、三陵其所々可尋、

爲御拜出御、御罷春宮大夫參任、歸來云、御拜之間甚雨、公私

祇災云々、

(皇年代略記)

七月二日、申亥兩刻地震、戌刻將軍幕鳴動以外也、

正平五年、六年、七年、十年、十一年

〔皇年代略記〕

七月十二日、白仙洞○光依地震被發遣山腹使、

〔續史愚抄〕

八月廿四日丁亥、依地震事被行十社御體經云、康富、肥道、

十一月十四日乙丑、京都地震フ、

〔園太曆〕

十一月十四日、天晴、今日午刻地震、後日泰尙朝臣云、天王所

動也、

〔續史愚抄〕

十一月十四日乙丑、地震、天動、園太

同六年北朝觀應三年二月十九日乙丑、京都地震強ク震フ、

〔皇年代略記〕

觀應二年二月十九日、地大震、

三月十七日丙寅、是夜、京都地震フ、

〔皇年代略記〕

三月十七日天變、今夜又地震、

四月十一日庚寅、京都地震フ、

〔皇年代略記〕從所載

四月十一日、辰刻地震、

九月十一日丁巳、京都地震フ、

〔醍醐地蔵院日記〕

觀應二年九月十一日、午刻地震有音、

十一月十九日乙丑、京都地震ヒ、續震兩三回アリ、

〔園太曆〕

觀應二年十一月十九日、天陰、午後地震、其後兩三度、

同七年北朝文和元年一月一日丙午、京都地震フ、

〔園太曆〕

觀應三年○文和元年正月一日、自舊歲風雪、及今朝滿地四五寸、漸表豊年之瑞、可謂新陽之慶、

今朝辰刻地震、

同月十五日庚申、京都地震フ、

〔園太曆〕

十五日、天晴、今晚寅刻又地震、天下體此上何微哉、

閏二月十五日己未、京都地震フ、

〔園太曆〕

閏二月十五日、天晴、酉刻地震、

同十年北朝文和四年十一月十八日庚子、京都地震フ、

〔園太曆〕

文和四年十一月十八日庚子、天晴、今日午刻地震有音、

同十一年北朝延文元年五月九日己丑、京都地震フ、

〔愚管記〕

延文元年五月九日己丑、雨降、今晚卯刻地震、天王所動云々、

同月十一日辛卯、京都地震フ、

〔愚管記〕

十一日辛卯、晴、未刻地震、水神動云々、

七月三日辛巳、京都地震フ、

〔愚管記〕

七月三日辛巳、晴、丑時地震、

〔園太曆〕

延文元年七月三日、天晴、丑刻地震、

同月八日丙戌、京都地震稍、強シ、

〔園太曆〕

十六日天陰、泰尙朝臣注申先日地震趣事、

地震の占文、かやうにかきをきて候を、御つかひ候はで、

いまとてうちをきて候、おそれ入て候、ちかくは、これ程の

大動は候はず候、返々以外存候、そのうちも小動は大略毎

日候へども、占文は大概おなじ事にて候、其外變異もたえ

ず候、おどろき入て候、○中略、月餘のかた、御ふみにつく

しがたき事のみ候、いかさまにもこの程にまいり候て、よ

ろづ申入べく候と、御ひろう候べく候、あなかしこ、

御文はし返々おそれ入て候、八日の地、いはい、の、時、なぞ申候へども、なをうしの時に候かし、

同月十一日己丑、京都兩次地震フ、

〔愚管記〕

十一日己丑、陰晴不定、寅刻地震兩度、動搖之間良久、

八月十二日庚申、京都地震フ、

〔愚管記〕

八月十二日庚申、雨降、午刻地震、

十三日辛酉、泰尙朝臣申云、昨日刻地震、水神所動云々、

〔園太曆〕

八月十八日條

○上恐憚候間畏承し、地動連續恐怖無極に、吉動も不如不動之由今申候歟、變異又重承、○下略

○上文ニ依レバ、此頃數、地震アリシコト明カナリ、

九月十五日壬辰、京都地震フ、

〔愚管記〕

九月十五日壬辰、晴陰不定、今日卯刻地震、

同十二年北朝延文二年一月十八日癸巳、是夜、京都地震フ、

〔愚管記〕

延文二年正月十八日癸巳、陰、丑刻許地震、

正平十二年

七月一日甲戌、京都地震フ、

(續史書抄)

正平十二年北朝延文三年七月一日甲戌、地震、後日有古文、圖目、

閏七月十七日己未、京都地震フ、

(圖太曆)

延文二年閏七月十七日、天晴、今晚寅刻地震有音、

九月十一日壬子、戌刻京都地震フ、

(圖太曆)

九月十一日、天晴、戌刻地震、

1011

# 大日本地震史料

卷之三

自正平十三年  
至延文三年

正平十三年北朝延文三年一月二十六日乙丑、京都地震フ、

(愚管記)

延文三年正月廿六日乙丑、晴、今晚地震、

二月二日辛未、京都地震フ、

(愚管記)

二月二日辛未、晴、今晚地震、

同月十一日庚辰、京都地震フ、

(愚管記)

十一日庚辰、晴、辰刻地震、

三月十七日乙卯、京都地震フ、

(愚管記)

三月十七日乙卯、晴、今晚地震、

四月十四日壬午、京都地震フ、

(愚管記)

四月十四日壬午、晴、巳刻地震、

五月二十四日壬戌、京都地震稍強シ、

正平十三年

1013

(愚管記)

五月廿四日壬戌、陰、午刻地震、水神動云々、頗有聲、

(歷代皇記)

延文三年五月廿四日、大地震、

(續史書抄)

正平十三年北朝延文三年五月廿四日壬戌、大地震、武家年代記

六月二日己巳、京都地震フ、

(愚管記)

六月二日己巳、陰晴不定、時々降雨、酉刻地震有聲、龍神動云云、

七月十五日壬子、京都地震フ、

(愚管記)

七月十五日壬子、晴、未刻許地震、

九月四日庚子、京都地震稍強シ、

(愚管記)

九月四日庚子、晴、今晚寅刻地震、龍神動云々、

(圖太曆)

延文三年九月四日、天晴、今晚卯刻許地大震、近來無比類之由、諸人稱之、

十一月十八日癸丑、京都地震フ、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

(愚管記)

十一月十八日癸丑、陰、戌刻地震、

同十四年北朝延文四年六月三日甲子、京都地震フ、

(愚管記)

延文四年六月三日甲子、天顏快晴入夜陰小雨、巳刻地震、金翅鳥動云々、

十月十八日戊寅、子刻京都地震フ、

(愚管記)

十月十八日戊寅、晴、子刻地震有聲、

同十五年北朝延文五年二月一日己未、京都地震フ、

(愚管記)

延文五年二月一日己未、晴、申刻地震、

二月七日乙丑、是夜、京都地震フ、

(愚管記)

二月七日乙丑、自曉更雪降即屬霽、夜半許地震、

同十六年北朝康安元年一月二十三日乙亥、戌刻京都地震フ、

(愚管記)

延文六年康安元年正月廿三日乙亥、戌刻地震、

六月二十一日庚子、京都地強ク震フ、

(後愚昧記)

延文六年康安元年六月廿一日庚子、酉刻地大震、近來更無如此之事、消肝了、

(愚管記)

六月廿一日庚子、時々小雨下、酉刻地大震、

(康富記)文安六年四月十三日條

康安元年六月廿一日、大地震、

(忠光卿記)

□□□□□□子、基數朝臣、賀茂□少祇候、有御鞠、酉刻於南殿御拜之間也

大地震、鳴動失魂、則給女房御文、遣有世朝臣□占文注進之、

龍神所助歎、可驚々々、後聞、今曉北野神殿鳴動、參詣之輩怖恐云々、

○本書此條讀食シテ日ヲ失フ、然レドモ次條ハ六月二十二日ノ記ナレバ、二十一日ノ記事タルハ明カナリ、

同月二十二日辛丑、京都地強ク震フ、是日、大和モ亦震フ、明日京都又頻ニ震フ、

(後愚昧記)

廿二日辛丑、卯刻地又大震、如昨夕、連日大動、先代未聞事也、可恐々々、相尋大膳太夫親宣朝臣之處、占文進之、龍神

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

(所カ) 不動云々、占文之而、事之不輕、可恐々々、近日武家重人等各

(和カ) 不知云々、天下重事出來之地也、去貞和五年六月地震儀、不

及今度、後年故直義卿與師直合職出來、今度又言如然事出來也、可恐々々、

廿三日壬寅、今日又度々地動、不及昨日一昨日兩度、

(愚管記)

廿二日辛丑、雨降、今曉卯刻大地震、其後大小動相續不休、可恐々々、半更大動兩度、

廿三日壬寅、時々小雨、今曉卯刻又地大震、其後小動兩三度、

(忠光卿記)

六月廿二日辛丑、晴、寅時大地震、水神所動云々、

廿三日壬寅、晴、地震及度々、頗匪直也云々、

(嘉元記)大和法隆寺藏本

康安元年辛丑六月廿三日、地震、

(武家年代記裏書)

延文六年六月廿二日、地震、天王寺金堂倒、○和漢合符同

○天王寺金堂倒ル、ハ二十四日ナリ、本傳及ビ下條如是院年代記高野春秋地ニ誤レリ、

(如是院年代記)

康安元年六月廿二日、地大震、天王寺金堂倒、

正平十六年

一〇五

(高野春秋)

辛丑六月廿二日、俄大雪降積、天王寺金堂亦傾倒之、

(參考)

(參考太平記)

六月二十二日、金勝院本傳、俄ニ天カキ雪降テ、水寒ノ甚シキ事、冬至ノ前後

ノ如シ、酒ヲ飲テ身ヲ煖、火ヲ燒爐ヲ圍ム人ハ、自來ヲ察ク便モアリ、山路ノ

樵夫、野徑ノ旅人、牧馬林鹿悉ク氷ニ閉ラレ、聲ニ臥テ凍死スル者數ヲ知ズ、

○六月降雪ノコト、當時公卿ノ日乘ニ見エズ、連ニ借ヲ措キ雖シト雖ド

モ、本書及ビ諸書ニ散見スルニヨリ、暫ク記シテ疑ヲ存セリ、

同月二十四日癸卯、攝津、大和、紀伊、阿波、山城諸國、地大ニ震ヒ、攝津、阿波、海嘯ヲ颶ダタリ、

(後愚昧記)

廿四日癸卯、曉寅刻卯也又大地震、眞實消魂了、如此連日大震、其例何年ニ哉、

(裏書)

正和以後有如此事哉、日々有動之時、及密奏哉之由、召尋親宣朝臣之處、返事云、

正和六年元保元年正月五日大地震、其他小動度々、其時も龍

神水神動也、伴年伏見院崩御也、其外如此大小動連續事、

無先例云々、今曉も水神動也、超過正和了、廿一二兩日爲

同事候間、別而不及占文云々、正和には四日六日なども小

動也、大動は二ヶ度也、今度は大動五ヶ度、小動不及勝計

正平十六年

云々、又連續之時、不及密奏云々、

後聞、依今晚大地震四天王寺御州金堂顛倒、成微塵了、又大塔空輪落塔傾口云々、伶人一人、承仕二人、在廳二人壓死云々、先代未聞珍事也、此事、天王寺執行孝順注進京都云々、當別當御井奏聞云々、當時彼寺爲南方之陣内、當方不及管領也、

〔愚管記〕

七月三日壬子、晴、傳聞、去月廿二日同廿四日大地震之時、熊野社頭並假殿以下三山岩屋以下秘所秘木秘石等、悉破滅之由、三山注進云々、末法之至極歟、河内國以甚、天王寺金堂顛倒云々、

〔忠光卿記〕

廿四日癸卯、晴、今晚寅刻大地震、殊以甚、□□所動也云云、

廿六日乙巳、晴、傳聞、天王寺金堂、去廿四日寅時顛倒、地動之故云々、佛法最初之□□□□太子御作之梵宇、一時破滅、可嘆々々、委細猶可尋記、

〔春日若宮神殿守記〕

康安元年ウレ六月十六日ヨリ大ナエユル、同七月廿九日夜マデユル、コノアキタニ春日山ウチノソウノ石トウロミナユリタラス、マタ所々ノタウタウヲモユリタラス、天王寺ノ御舍利塔、シヤリタウヲモユリタラス、其後ヤカテツクル、

〔康富記〕

康安元年六月廿五日、○廿四、天王寺金堂爲地震顛倒、

九月八日 尊皇王法、  
同十四日 熾盛光法被修也、共地震、御祈也、

〔大乘院日記目錄〕

六月十八日ヨリ十月十八日至、大地震、

〔嘉元記〕

康安元年辛丑六月廿四日、地大震、佛閣多壞、

〔皇年代略記〕

康安元年六月廿日、大地震、其以後連續大地震、金堂並南都堂舎已下依地震顛倒、○皇年代、私記同、

〔歷代皇紀〕

康安元年六月以後、連々大地震、天王寺金堂以下諸寺塔院、多以破損、

〔參考太平記〕

正平十六年六月十八日巳、刻ヨリ皇年代略記、同十月ニ至ル迄、大地震シク動テ、日々夜々ニ止時ナシ、山ハ崩テ谷ヲ埋ミ、海ハ傾テ陸地ニ成シカバ、神社佛閣倒レ破レ、牛馬人民ノ死傷スル事、幾千萬ト云、數ヲ知ズ、總テ山川江河林野村落、此災ニ遭ズト云所ナシ、皇年代略記云、康安元年六月二十日大地震、其以後月以後連々大地震、天王寺金堂以下諸寺塔院多破損云々、中ニモ阿波ノ雪後愚昧記云、六月二十日酉刻大地震云々、

湊ト云浦ニハ、對、金勝院俄ニ大山ノ如ナル潮漲來テ、在家一千七百餘宇悉引潮ニ連テ、海底ニ沈シカバ、家々ニ有所ノ僧俗男女、牛馬鶏犬、一ツモ殘ラズ底ノミクヅト成ニケリ、○中又八月廿四日ノ大地震ニ、雨暴ク降、風烈ク吹テ、虚空姑クカキクレテ見ヘケルガ、難波浦ノ澳ヨリ大龍ニ浮出デ、天王寺ノ金堂ノ中ヘ入ト見ヘケルガ、雲ノ中ニ鏑矢鳴響テ、戈ノ光四方ニヒラメキテ、大龍ト四天ト戰フ體ニゾ見ヘタリケル、二ツノ龍サル時、又大地震シク動テ、金堂微塵ニ碎ケリ、サレドモ四天ハ少シモ損ゼサセ給ハズ、北條家西源院南都本云、京中、中、關、國、ハ、天龍ノ戰トハ、知ズ、亦只地震ト、是ハ何様聖德太子御安置ノ佛舍利、此堂ニオハシマセバ、龍王是ヲ取奉ラントスルヲ、佛法護持ノ四天王惜マセ給ヒケルカト覺ヘタリ、洛中邊土ニハ傾カヌ塔ノ九輪モナク、熊野參詣ノ道ニハ、地ノ裂ヌ所モ無リケリ、舊記ノ載ル所、開關以來、懸ル不思議ナケレバ、此上ニ又何様ナル世ノ亂ヤ出來ンズラント、懼恐ヌ人ハ更ニナシ、

〔參考〕

〔和漢合選〕

康安元年辛丑七月廿四、難波浦數百町水枯、又大等如山、

○七月ニ非ズ、六月ナリ、下同ジ、

〔參考太平記〕

七月二十四日ニハ、攝津國難波浦ノ澳數百町、半時計乾アガリケ、無量ノ魚ドモ沙ノ上ニ息ツキケル程ニ、傍ノ浦ノ海人共綱ヲ卷釣ヲ捨テ、我考ジト拾

正平十六年

一〇六

同月二十五日甲辰、京都地震、震フ、

〔後愚昧記〕

廿五日甲辰、今日地震又及度々、

〔愚管記〕

廿五日甲辰、雨降、地震兩三度、但非大動、

〔忠光卿記〕

廿五日甲辰、晴、小地震及度々、

同月二十六日乙巳、京都地震、明日又震フ、

一〇七

(後愚昧記)

廿六日乙巳、今日又地震、  
廿七日丙午、今日又地震、

(愚管記)

廿六日乙巳、雨降、自午刻屬霧、地震兩三度、但非大動、  
廿七日丙午、天晴、未刻地震、

同月二十八日丙午、京都地震フ、

(愚管記)

廿八日丁未、晴、今日雨三度、

七月一日庚戌、京都地震フ、

(愚管記)

七月一日庚戌、時々雨降、朝間天晴、亥刻地震、

同月四日癸丑、京都強震、前月二十一日、二十四

日ノ二震ニ亞グ、尋テ觀心寺ニ修法ヲ命ジ、又熾

盛光法尊星三法ヲ宮中ニ修メ、並ニ地震ノ厄ヲ

攘ハセ給フ、

(愚管記)

四日癸丑、晴、申刻大地震、戌一點又震、及半更又兩三度震  
動、凡希代事也、

(後愚昧記)

七月四日癸丑、霧、申刻又大震、如此大動、去月廿一日夕、廿

四日、今日又也、及數日之條、可謂希有事也、  
廿四日癸酉、天陰、地震有音大動也、

八月一日己卯、今日中地震、又及度々了、

(觀心寺文書)

(雜判)

爲地震御祈、一七日晝夜不斷可令修七星如慈輪法者、天氣如此、悉之以狀、  
正平十六年七月十日  
左少弁

(妙香院宮引付)

康安元年八月十三日、陰氣、但時  
刻屬晴了、

於樂裏、爲地掃天懸等祈、始行熾盛光法自十樂院御坊御出及深更者也、依  
後通參也、○以下其式  
ヲ載セタリ、今略ス、

(後愚昧記)

八月十三日辛卯、自今夜晝夜不斷可令修七星如慈輪法者、於樂裏熾盛光法云々地  
震之御祈也、彼法、此向跡代々被行來也、他門不修云々、古來ハ山門之中、雖非  
彼門跡修之、而後鳥羽院以後、一向被付舟蓮院了、

九月八日丙辰、自今夜被修摩生王法、阿闍梨聖德院宮、他門跡此法曾不行之其  
故也、智羅大師入唐衣傳受此法之外、他門更不傳之、山門東寺等更不知此法云々

(康宮記)

康安元年九月八日、摩生王法、十四日熾盛光法被修也、共地震

(參孝太平記)

聖德院覺法親王ハ花園帝 二間ニ御參有テ、九月八日ヨリ一七日摩生王法  
ヲ修セラレケル、  
四源院本云、聖德院覺法親王、二間御參有テ、後九月八日ヨリ一七箇日摩  
生王ノ大法ヲ修セラレケル、其後怪瑞猶依ズトテ、精進ニ五壇ノ法ヲ行  
ハレケル、

同月十一日庚申、大和國地震強シ、

(遊元記)

七月十一日、大地震、

十一月十四日辛酉、京都地強ク震フ、

(後愚昧記)

十一月十四日辛酉、天霧、酉終大地震、

(真書)

後日尋大膳大夫親實朝臣之墓、月行事術、天子大臣受福、又十一月動ハ、百日  
内兵亂云々、

同十七年<sup>北朝</sup>五月十七日辛酉、京都、奈良地強ク

震ヒ、餘動日ヲ累ネタリ、

(康宮記)

貞治元年五月十七日、酉半大地震經時刻、甚鳴動、如去年大  
地震、及數日者也、同十八日地震數度、同廿日不動歟、至廿三  
日、六月四日於内裏被行五壇法、地震御

(大乘院日記目錄)

貞治元年五月十七日巳後、連々地震、

八月五日戊寅、京都地震フ、

(愚管記)

貞治元年八月五日戊寅、晴、午刻地震、

十月四日丙子、是夜、京都地震フ、

(師守記)

貞治元年十月四日丙子、天晴、今夜丑始地震、

同月十一日癸未、京都地震フ、

(師守記)

十一日癸未、天晴、聊風吹、今曉卯刻地震、

同月二十四日丙申、是夜、京都地震フ、

(師守記)

廿四日丙申、天晴、入夜丑刻許地震、

十一月十九日庚申、京都地震フ、

(師守記)

十一月十九日庚申、天晴、午刻地震、

同月二十二日癸亥、是夜、京都地震フ、

(師守記)

廿二日癸亥、天晴、今夜戌刻地震、

同月二十八日己巳、是夜、京都地震フ、

(師守記)

廿八日己巳、天晴、入夜子刻許地震、

十二月二日癸酉、京都地震フ、夜又震フ、

(師守記)

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

十二月二日癸酉、天晴陰、酉刻小雨降、入夜又小雨下、寅刻時  
時小雨不絕、今晚寅刻地震、今夜丑刻地震、  
同月五日丙子、是夜、京都地震強ク震フ、

(師守記)  
五日丙子、天陰雨下、未刻以後休、入夜丑刻大地震、  
同月六日丁丑、京都地震フ、

(師守記)  
六日丁丑、天晴、未刻小雨瀉、無程休、今朝辰刻許地震、  
同十八年<sup>北朝貞治三年</sup>閏一月十四日乙酉、京都兩次地震  
フ、

(師守記)  
貞治二年閏正月十四日乙酉、天晴、朝間聊小雨、下則止、今日  
申刻地震、又酉刻地震、

同月十五日丙戌、是夜、京都二回地震フ、  
(師守記)  
十五日丙戌、天晴、申刻以後天陰雨降、入夜戌始地震、同刻又  
地震云々、

二月四日甲辰、京都地震強シ、  
(師守記)

二月四日甲辰、天霽、今晚寅刻大地震、  
同月十日庚戌、是夜、京都地震フ、

(師守記)  
十日庚戌、天陰雨降、未刻未申方雷鳴雨三度聞、申刻以後風  
晴、終日風吹、入夜風不絕、今夜丑刻地震、  
同月十八日戊午、是夜、京都地震強シ、續デ又震  
フ、

(師守記)  
十八日戊午、天陰、未斜以後降雨、終夜雨下、時々休、入夜戌  
刻大地震、無程又小地震、

七月十四日辛巳、京都地震強シ、  
(東寺執行日記)  
貞治二年七月十四日、天晴、大地震、

八月四日庚子、京都地震強ク震フ、  
(東寺執行日記)  
八月四日、卯刻大地震、

十一月九日甲戌、京都地震強ク震フ、  
(東寺執行日記)  
十一月九日、酉終大地震越常倍矣、

同十九年<sup>北朝貞治三年</sup>九月十一日辛未、是夜、京都地震フ、  
(師守記)

貞治三年九月十一日辛未、今夜戌刻許地震、  
同二十二年<sup>北朝貞治六年</sup>一月九日丙戌、京都地震強ク震フ、  
(愚管記)

貞治六年正月九日丙戌、陰及晚雨降、未刻地大震、  
二月二日己酉、京都地震フ、  
(愚管記)

二月二日己酉、朝間晴夕陰、午刻地震、  
同月十六日癸亥、京都地震強シ、  
(愚管記)

二月十六日癸亥、陰、終夜大風降雨、今晚寅時地大震、  
五月十四日乙丑、京都地震フ、  
(師守記)

貞治六年五月十四日乙丑、天陰、辰刻以後降雨、未刻已後雨  
脚止、今日未刻地震、  
六月十九日甲子、京都地震フ、  
(愚管記)

六月十九日甲子、晴、今日有秋氣、凡今夏暑氣不甚、申刻地震

(師守記)

六月十九日甲子、天晴、今日申刻地震、  
同月二十五日庚午、京都地震フ、  
(師守記)

廿五日庚午、天晴、申斜地震、  
八月十二日丙辰、京都地震フ、  
(愚管記)

八月十二日丙辰、雨降、未刻地震、  
(師守記)

八月十二日丙辰、天陰、終日雨下、酉刻已後雨脚休、入夜丑刻  
已後雨下、巳刻地震、惡動云々、以外也、  
同月二十一日乙丑、京都地震強ク震フ、  
(愚管記)

廿一日乙丑、陰、辰初點地大震、  
(師守記)  
廿一日乙丑、天晴、未刻降雨則止、今晚卯刻大地震、吉動云  
云、神妙々々、

同二十三年<sup>北朝應安元年</sup>一月十八日庚寅、京都地震フ、  
(愚管記)

貞治七年<sup>應安元年</sup>正月十八日庚寅、晴、申刻地震、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

震災防備調査報告第四十六號

甲

閏六月六日乙亥、京都地震フ、

〔愚管記〕

閏六月六日乙亥、晴、午刻地震、

同二十四年北朝應安三年七月二十七日己未、是夜、京都地

強ク震ヒ、東寺講堂傾ケリ、

〔後愚昧記〕

應安二年七月廿七日、今夜丑刻許有大地震、親宣朝臣勘文、

後日見之、今日星宿也、金翅鳥動也、所注、兵革、又臣下謀上、

國主失地等也、

〔愚管記〕

應安二年七月廿七日己未、晴、今夜丑刻大地震、金翅鳥動云

云、

〔續史愚抄〕

正平二十四年北朝應安三年七月廿七日己未、今夜丑刻大地震、東寺

講堂傾危、陰陽師親宣朝臣、後日進勘文曰、爲金翅鳥動、臣謀

君、主失地兆也、其長者補任、後愚昧記、道闢公記、

建德元年北朝應安三年八月二十八日甲申、相摸國鎌倉地

震フ、

〔空華日用工夫略集〕

應安三年八月廿八日四更禪起、自擇火焚香、讀楞伽經、時有

地震、

同二年北朝應安四年三月十九日癸卯、是夜、京都地震ク震

フ、

〔鳩嶺雜事記〕

應安四年三月十九日、同夜戌刻大地震、凶云々、

八月二十六日丙午、京都地二回震フ、

〔愚管記〕

應安四年八月廿六日丙午、陰、入夜風雨甚、曉更地震、天明之

程又震、

〔愚管記〕

同月二十七日丁未、京都地震強シ、

〔愚管記〕

廿七日丁未、陰、時々小雨、申刻地大震、

文中元年北朝應安五年六月二十七日癸卯、京都地震フ、

〔愚管記〕

應安五年六月廿七日癸卯、晴、未刻地震、

十二月二十四日丁酉、京都地震フ、

〔愚管記〕

天授元年北朝永享元年四月十四日甲辰、陸奥國會津地震

強シ、

〔會津舊事雜考〕

永和元年四月十四日、大地震、

六月十一日庚子、京都地震フ、

〔愚管記〕

永和元年六月十一日庚子、晴、申刻地震有聲、天王動之由、有

世朝臣申之、

同月二十三日壬子、是夜、京都地震フ、

〔愚管記〕

廿四日癸丑、晴、及晚小雨、去夜戌時、地震有音、水神所動云

云、

同二年北朝永享二年四月二十五日己酉、京都地震強シ、

〔康富記〕

永和二年四月廿五日、大地震、

〔愚管記〕

同四年北朝永享四年十月二十九日戊辰、京都地震ク震フ、

〔愚管記〕

永和四年十月廿九日戊辰、陰、時々小雨瀧、未刻地大震、

震災防備調査報告第四十六號

甲

同二年北朝應安六年二月二日甲戌、是夜、京都地震フ、

〔愚管記〕

應安六年二月二日甲戌、晴、半更地震、

四月一日癸酉、是夜、京都地震ク震フ、

〔愚管記〕

四月一日癸酉、雨降、子刻地大震、

同月十二日甲申、京都地震フ、

〔愚管記〕

十二日甲申、時々雨降、未刻地震、

八月二十日己丑、京都地震フ、

〔愚管記〕

八月廿日己丑、晴、未刻地震、

閏十月二十二日己未、是夜、京都地震ク震フ、明

曉又震フ、

〔愚管記〕

閏十月廿二日己未、晴陰不定、時々小雨瀧、戌刻地大震、曉更

地又震、

〔續史愚抄〕

應安六年閏十月廿二日己未、地大動、向曉亦動、道闢公記、大乗院年代記、



天授五年、六年、弘和元年、三年、元中四年、六年

一一四

同五年北朝康  
德元年十月九日壬申、是夜、京都地震強シ、

(愚管記)

康曆元年十月九日壬申、陰晴不定、丑刻大地震、

同六年北朝康  
德二年四月十七日丁丑、京都兩次地震フ、

(康曆二年愚記)

四月十七日、子刻許地震兩度相續、然而非大動、

弘和元年北朝永  
德元年二月十六日壬申、京都地震フ、

(愚管記)

康曆三年○永德  
元年二月十六日壬申、雨降、未刻地震、

四月二十日乙亥、京都地震フ、

(愚管記)

四月廿日乙亥、時、未刻許地震、

五月二十九日癸丑、京都地震フ、

(愚管記)

五月廿九日癸丑、陰晴不定、時々雨瀧、午刻地震、天王勳云々、

同三年北朝永  
德三年四月十九日壬辰、是夜、京都地震フ、

(後愚味記)

永德三年四月十九日壬辰、今夜有地震、

同月二十四日丁酉、京都地震強シ、

(後愚味記)

廿四日、雨下或降或止、

今曉有大地震、其音如鼓、其動如戰車、近年如此之地震無之、

消肝者也、

五月一日晴、今夜武家佛眼法妙法院  
宮被行結願也、自去廿五日所始行也、地震祈禱  
云々、

同月二十六日己亥、京都地震フ、

(後愚味記)

廿六日、晝程又有地震、水神動云々、但本文不相替廿四日云  
云、(占カ)  
臣返事

同月二十九日壬寅、京都地震フ、

(後愚味記)

廿九日、今日又地震、小動也、

元中四年北朝嘉  
應元年十二月十九日乙丑、陸奥國會津地  
強ク震フ、

(會津舊事、土直考)會津四家  
合考所載

嘉慶元年○丁卯  
二年十二月十九日、大地震、

同六年北朝康  
應元年九月六日辛未、京都地震強シ、晚ニ及  
ビ又震フ、

(宣御記)

嘉慶三年○康應  
元年九月六日、晴、午一點大地震、又及晚地動、可  
恐々々、

同八年北朝明  
德二年十月十六日己巳、京都地震強ク震フ、

(康富記) 大地震近例、

明德二年十月十六日、大地震、

(明德記) 群書類  
從所載

抑十月十六日午ノ刻ニ、大地振オビタマシクシテ、路次往反  
ノ難モ少事ヲエズ、家内安座ノ人々モ、肝魂モ消許也、○下

(南方紀傳)

元中八年十月十六日、地震、

(續史愚抄)

明德二年十月十六日己巳、午刻地震大動、金翅  
鳥勳、刑部卿有言、

可有兵革、不可逾年者、南方紀傳、明德記、  
康富記追

應永元年十二月四日己巳、京都地震フ、

(鈴鹿家記)

應永元年十二月四日、丙午、辰上刻地震、  
○丙午ハ巳巳  
誤ナリ、

同二年二月二十五日己丑、京都兩次地震強ク震フ、

(東寺年代)

應永二年二月廿五日、朝卯刻大地震兩度、

同五年九月九日壬午、是夜、京都地震フ、

(兼敦記)

應永五年九月九日、亥刻有地震、

同月十一日甲申、是夜、京都地震フ、

(兼敦記)

十一日、亥刻有地震、

同七年八月十七日己酉、京都地震フ、

(兼敦記)

應永七年八月十七日、卯時地震、消肝了、水神所動、

十月二十四日乙卯、是夜、伊勢國地強ク震フ、同  
夜、京都モ亦震ヘリ、

(兼敦記)

十月廿四日、今夜戌刻地震、或仁云、於勢州以外之大動云々、  
京都少動也、

同八年十月二十七日壬午、京都地震フ、

(永助法親王記)

應永八年十月廿七日、及申斜有地震、

(吉田家日次記)

同九年一月二十九日癸丑、京都地震強シ、

(吉田家日次記)

應永九年正月廿九日、今曉寅刻大地震、龍神動也、天變地妖

元中六年、八年、應永元年、二年、五年、七年、八年、九年

一一五

相續、爲之如何、

是冬、京都地震フ、

〔南方紀傳〕

應永九年、冬、地震、

〔かな年代記〕

應永九年、冬、地しん、

同十年二月九日丁巳、陸奥國會津地震ヒ、翌月二日マデ止マズ、

〔塔寺八幡宮略記長帳〕

應永十年、去暮ヨリ當三月迄大雪降、二月九日ヨリ三月二日迄日々地震、

同月十五日癸亥、京都地震フ、

〔吉田日次記〕

應永十年二月十五日、申刻地震有動、

閏十月十九日癸巳、京都地震フ、

〔吉田日次記〕

閏十月廿一日、去十九日曉地震、龍神動、古文之趣不輕云々、

十一月三日丙午、京都地震フ、

〔吉田日次記〕

十一月三日、酉刻地震有動、

同十二年七月十四日丁未、京都地震強シ、

〔年代記殘編〕

應永十二年乙酉、七月十四日大地震、

九月十五日戊申、京都地震フ、

〔教言記〕

應永十二年九月十五日戊申、晴、地震、中刻

同十三年十一月一日丁巳、是夜、京都地震ヒ、續デ又兩次震フ、

〔教言記〕

應永十三年十一月一日丁巳、晴、戌時地震、又亥時兩度、

〔南朝紀傳〕

應永十三年冬十一月一日、大地震、○南方紀傳同

〔かな年代記〕

應永十三年冬十一月一日、大地しん、

同十四年一月五日庚申、京都強震アリ、

〔荒曆〕

應永十四年正月五日庚申、晴、酉刻地震、近年無比類大動也、

〔教言記〕

應永十四年正月五日地震、酉一點、

〔和漢合運〕

應永十四年正月五日、大地震、

〔南朝紀傳〕

應永十四年春正月五日、大地震、

〔塔寺八幡宮略記長帳〕

應永十四年正月五日ヨリ大地震、二月末ニ漸靜ク、依之日本國、山崩塞川、磐石落野、地大ニ裂埋谷、神社佛閣、公家武家四民家倒、長壽院、三十三間堂、醍醐、七重塔婆倒、火災多シ、圓覺寺等焼失、○圓覺寺焼失ハ、是年十二月六日ナリ、日本大騷動、又飢饉、且其災ノ爲ニ非ズ、長帳誤レリ、

十二月十四日甲午、京都地震フ、

〔教言記〕

十二月十四日、地震、酉一點、

〔南朝紀傳〕

十二月十四日大地震、潮ヲビタマシク湧出、

○本書、海嘯ヲ記シタレドモ、ソノ災地ヲ指示セズ、且他書ニ見ル所ナシ、疑フベシ、

同十五年一月二十八日戊寅、京都地震フ、

〔教言記〕

應永十五年正月廿八日戊寅、陰晴不定、地震、未一點、

十月十六日辛卯、京都晝夜二回地震フ、

〔教言記〕

十月十六日、地震晝夜ニ兩度、

同月二十九日甲辰、京都強震アリ、續震十四次ニ及ブ、

〔教言記〕

廿九日甲辰、晴、今曉大地震、卯刻、以來十四度也、

十一月一日乙巳、京都地震フ、二日、三日、又震フ、

〔教言記〕

十一月六日、去一日二日三日地震者吉動之由、泰繼朝臣注進之、其已後少々不及沙汰云々、諸方御祈禱被行、珍重々々、○月十日、足利義持、五禮法ヲ修メテ地獄ヲ禱ヘリ、

十二月十三日丁亥、京都地震フ、

〔教言記〕

十二月十三日地震、申刻也、

同十六年六月二十六日丁卯、京都地震フ、

〔教言記〕

應永十六年六月廿六日丁卯、晴、地震、未刻也、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

同十七年一月二十七日甲午、京都地震強シ、  
〔南朝記傳〕

應永十七年春正月廿七日大地震、○南方紀傳同シ

三月二十九日丙申、是夜、京都地震フ、  
〔教言記追加〕

應永十七年三月廿九日丙申、晴、地震亥刻也、

同十八年五月六日丙寅、京都強震アリ、  
〔和漢合符〕

應永十八年五月六日、夜大地震、  
〔武家年代記裏書〕

應永十八年五、六、大地震、

七月二十四日癸未、京都地震フ、  
〔應永十八年曆裏書〕

七月廿四日癸未、天晴、辰一點地震、

十月九日丁酉、京都地震フ、  
〔應永十八年曆裏書〕

十月九日丁酉、天陰、寅時地震、

同十九年一月十三日己亥、京都兩次地震フ、  
〔山科家禮記〕

應永十九年正月十三日、晴、卯刻地震、辰刻又地震、  
同月十五日辛丑、京都地震フ、  
〔山科家禮記〕

十五日、晴、未刻地震、

二月二十九日甲申、京都地震強シ、  
〔山科家禮記〕

二月廿九日、陰、巳下刻大地震アリ、

四月十三日丁卯、是夜、京都地震フ、  
〔山科家禮記〕

四月十三日、戌刻地震、

五月二十六日庚戌、是夜、京都地震フ、  
〔山科家禮記〕

五月廿六日、夜半計ニ地震、

同二十年十一月十五日辛卯、京都地震強シ、  
〔如是院年代記〕

應永廿二年、十一月十五日、大地震、

應永廿二年、十一月十五日、大地震、  
○南朝記傳ハ是月五日ニ作レリ、蓋、傳寫ノ誤ナルベシ、

同二十六年五月九日癸丑、京都地震フ、  
〔續史愚抄〕

應永廿六年五月九日癸丑、地震、金翅鳥動云、祭文抄、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

八月二十四日丙申、京都地震フ、  
〔看聞御記〕

應永廿六年八月廿四日、酉刻有地震、金翅鳥動也、

同二十七年六月二十七日甲子、京都地震強ク震フ、  
〔看聞御記〕

應永廿七年六月廿七日、晴、酉時有大地震、帝釋動也、

八月十日丙午、鎌倉強震アリ、  
〔神明鏡〕

應永廿七年八月十日、鎌倉大地震十七度、

同二十八年七月、京都地震フ、  
〔文書〕後繼

爲地震御祈禱、於寺家可有其沙汰之山云々、自今日<sup>廿二</sup>至廿九日、可有勤修之山評了、  
〔東寺百合文書〕

東寺講堂仁王經御讀經、地震若到、應永廿八年七月廿二日開  
白、○下

○コノ地震ノ日、ソノ傳ワ失ヘリ、姑ク是月ニ係ク、

十月十三日癸卯、京都地震フ、  
〔看聞御記〕

應永廿八年十月十二日、〔元ノヤ、〕今夜曉有地震、

應永二十六年、二十七年、二十八年、二十九年、三十年、三十一年

十二月三日壬辰、京都地震フ、  
〔看聞御記〕

十二月三日、晴、曉有地動、

同二十九年十月一日乙酉、是夜、京都地震フ、  
〔看聞御記〕

十月朔、天晴、今夜<sup>丑</sup>有地震、帝釋動也、

同三十年三月、京都地震數次震フ、  
〔年代記殘編〕

應永卅年癸卯三月、不絕地震、

十二月、京都地震數次震フ、  
〔年代記殘編〕

應永卅年癸卯三月、十二月、不絕地震、

同三十一年四月二十五日庚午、是夜、京都地震  
フ、  
〔看聞御記〕

應永卅一年四月廿五日、今夜有地震、小動也、火神動也、

九月二十五日丁酉、京都地震フ、  
〔看聞御記〕

九月廿五日、申時有地震、

〔兼宣記〕

應永卅一年九月廿五日丁酉、晴、地震、  
同月二十六日戊戌、京都地震フ、

〔兼宣記〕

廿六日戊戌、晴、地震、  
十月一日癸卯、晴、依去月廿五六兩日地震、於諸社諸寺可有御祈禱之由、任何  
可申沙汰之由、依當町殿申沙汰、自今日發始行者也、

同月二十七日己亥、京都又震フ、

〔看聞御記〕

廿七日、雨下、今晚又有地震、

十二月五日丙午、京都地震稍強シ、

〔看聞御記〕

十二月五日、雨下、卯刻有大地震、近比大動也、後有小動、

〔滿濟准后日記〕

應永卅一年十二月五日、降雨、地震、卯未刻、

同三十二年閏六月十七日乙酉、京都地震強ク震フ、

〔看聞御記〕

應永卅二年閏六月十七日、雨降、今晚時有大地震、其後小動  
有兩三度、諸鳥不合聲、龍神動也、是凶動也、占文種々凶事  
也、（前略）午刻又有小地震、

〔薩戒記〕

應永卅二年閏六月十七日乙酉、天晴、寅始地震二度、同終刻  
又動、辰終刻又動、申終已後大雨雷鳴甚、將軍墓連々鳴、

〔兼宣記〕

應永卅二年閏六月十六日、晴、入夜小雨下、抑半更口程有大  
地震、消魂者也、近比者不聽大動也、東山將軍塚同又鳴動、

七月一日戊戌、京都地震數、震フ、

〔看聞御記〕

七月一日、今夜寅時地震、此間每日有小動、

〔滿濟准后日記〕

應永卅二年七月一日、晴、今日地震、未刻、不快云、  
云、金翅鳥動、

〔薩戒記〕

七月一日、夜半過地震一度、

同月二日己亥、丑刻京都地震強シ、續デ又屢震  
フ、

〔看聞御記〕

七月二日、亥刻夕立雷鳴只一聲如落消肝、丑刻大地震及數  
度、去月十七日より大動也、惟異連續、天下有何事乎、恐怖  
無極、

〔薩戒記〕

七月二日、入夜風雨烈雷鳴、丑刻地震三四ケ度、

〔滿濟准后日記〕

七月二日、今晚丑刻大地震、龍神動、不快云々、○本書、晚ニ作ル、他書ト合ハズ、

〔兼宣記〕

七月三日、去夜丑時、地震有音、○下

同月三日庚子、京都地震フ、

〔滿濟准后日記〕

三日、地動寅刻、

八月四日庚午、京都地震フ、

〔看聞御記〕

八月四日、晝小地震、帝尺動也、

同月七日癸酉、京都兩次地震フ、

〔看聞御記〕

七日、今夜丑刻地震有兩度、龍神動也、

九月、京都地震フ、

〔南朝記傳〕

九月、大風地震、

○南方紀傳ハ十月ニ係ケタリ、

十月二十四日庚寅、是夜、京都地震フ、

〔看聞御記〕

十月廿四日、晴、亥刻有小地震、

〔滿濟准后日記〕

十月廿四日、亥初刻地動、天王動様、

〔薩戒記〕

十月廿四日庚寅、天晴、入夜陰、戌終小雨即休、更闌甚雨、亥  
終地震、

十一月五日庚子、京都強震アリ、築垣多ク損ゼ  
リ、

〔看聞御記〕

十一月五日、巳刻有大地震、所々築地崩、以外大動也、火神  
動、占文不輕○下

〔薩戒記〕

十一月五日庚子、天晴、已終許大地震三動、暫之一度小動、又  
一度小動、凡終日鳴動、未後雨、入夜甚、○中於院土御門三位  
有盛卿談曰、所々築垣等崩了、我所見及也、近來無如此大動  
云々、

〔滿濟准后日記〕

十二月五日、晴、大地震、水神動、占文不快、○下

六日、晴、今日可出京由、以赤松越州被仰出、則參申入、昨日  
地動不快、御祈事如何方々可申遣云々、

〔兼宣記〕

應永三十二年

十一月五日、入夜甚雨、抑午一點大地震以外大動、爲之如何、  
今月五日、巳時大地震有音、略  
(如是院年代記)

應永卅二年十一月五日、大地震、

(新選和漢合圖)

應永卅二年乙巳十一月五日、大地震、

同月十日乙巳、是夜、京都又地震フ、

(看聞御記)

十日、子時地震有大聲、又火神動也、龜山將軍塚連々鳴動、天下惟異有何事哉、後聞、內侍所御神樂初時分、地震有兩度云、

(滿濟准后日記)

十一月十日、晴、子時大地震、

(薩戒記)

十一月十日乙巳、子終刻地震、

同月十二日丁未、京都地震フ、

(薩戒記)

十二日丁未、卯始刻地震、

同月十三日戊申、是夜、京都地震フ、

(薩戒記)

十三日戊申、子終地震小動、

同月十六日辛亥、是夜、京都地震フ、

(看聞御記)

十六日、戌時小地震、

(薩戒記)

十六日辛亥、天晴、戌刻地震、

同月二十二日丁巳、京都地震フ、

(看聞御記)

廿二日、辰刻小地震、

(薩戒記)

廿二日丁巳、巳始刻地震、

十二月十二日丁丑、京都地震フ、

(看聞御記)

十二月十一日、丑刻有地震、金翅鳥動也、

○コノ地震ハ、滿濟日記、薩戒記、記載ト同一ノ地震ナリ、而シテ之ヲ前日ニ揭クタルハ、正當ナル時計ナキ時代ニ於テハ、往々免レ難キノ數ニシテ、時刻ノ推步ヲ誤リタル結果ニ外ナラズ、コノ例頗ル多シ、

(滿濟准后日記)

十二月十二日、晴、今曉地震天王動、吉動由、在方卿 進在之、

(薩戒記)

十二月十二日丁丑、寅刻地震、巳刻又動、

同月十三日戊寅、是夜、京都地震フ、

(薩戒記)

十三日、亥終許地震、

同月十六日辛巳、京都地震フ、

(看聞御記)

十六日、今曉小地震、火神動也、

(薩戒記)

十六日辛巳、卯刻地震云々、

同三十二年二月二十二日丁亥、京都地震フ、

(薩戒記)

應永卅三年二月廿二日丁亥、申刻地震、

(滿濟准后日記)

應永卅三年二月廿二日、少雨、地震、天王動吉動也、

五月四日丁酉、京都地震フ、

(薩戒記)

五月四日丁酉、巳始刻地震、

同月十三日丙午、是夜、京都地震フ、

(薩戒記)

十三日丙午、亥刻許地震、

(滿濟准后日記)

五月十三日、晴雨、小動、亥末刻、心宿也、天王動、吉動歟、

六月十八日庚辰、京都地震フ、

(薩戒記)

六月十八日庚辰、辰刻許地震、

(滿濟准后日記)

六月十八日、晴、卯時大地震、水神動、○下略

(兼宣記)

應永卅三年六月十九日、昨朝地震、

十九日、晴、桑室町殿、昨朝地震古文、雖非重變、御祈禱事、自明日可被始行之、  
由、可申沙汰云々、  
七月十一日、自去月廿日所被始行之地震御祈、今日結願、

九月九日己亥、京都地二回震フ、

(薩戒記)

九月九日己亥、今朝地震兩度、

同月二十二日壬子、京都地震強シ、

(薩戒記)

廿二日壬子、地震大動、

十月十九日己卯、京都地震フ、

(薩戒記)

十月十九日己卯、卯一刻許地震、

應永三十二年、三十三年

一三三

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

十一月十一日庚子、京都地震フ、  
〔薩戒記〕

十一月十一日庚子、申始刻地震、

同月二十四日癸丑、京都地震フ、

〔薩戒記〕

廿四日癸丑、地震、

同月二十七日丙辰、京都地震稍、強シ、

〔薩戒記〕

廿六日乙卯、丑終越〇翌曉、地震大動、

〔滿濟准后日記〕

十一月廿七日、晴、寅半地動、

十二月二十日己卯、京都地震稍、強シ、

〔薩戒記〕

十二月廿日己卯、未終刻地震、

〔滿濟准后日記〕

十二月廿日、晴、大地震、申刻、金翅鳥、動様不快、

同月二十三日壬午、是夜、京都地震フ、

〔滿濟准后日記〕

廿三日、晴、今夜亥半地震、

同月二十六日乙酉、是夜、京都地震フ、

〔滿濟准后日記〕

廿六日、晴、今夜子半頃地震、天王動、吉動云々、

正長元年九月十八日丁卯、京都地震稍、強シ、

〔滿濟准后日記〕

永享元年三月五日辛亥、京都地震フ、

〔滿濟准后日記〕

正長元年九月十八日、今夜子刻大地震以外也、

永享元年三月五日、晴、今日午半地震、

同三年一月十八日甲申、京都地震フ、

〔滿濟准后日記〕

永享三年正月十八日、戌初刻地動、金翅鳥動、

〔管見記〕

永享三年正月十八日甲申、天晴、酉下刻地震、

十月二十七日戊午、京都地震フ、

〔滿濟准后日記〕

十月廿七日、巳初刻小動、

十一月十二日癸酉、是夜、京都地震フ、

〔滿濟准后日記〕

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

十一月十二日、今夜亥地震、帝尺動也、

同四年三月十二日辛未、相摸國鎌倉、地震フ、

〔神明鏡〕

永享三年〇三月十二日、戌時大地震、〇標本朝通、  
從之ニ從フ、

同五年一月二十四日己卯、伊勢、近江二國、地大

ニ震フ、是日、京都モ震ヘリ、

〔看聞御記〕

永享五年正月廿四日、晴、抑酉時大地震以外也、消肝、

〔滿濟准后日記〕

永享五年正月廿四日、晴、申刻大地震、〇申、  
在方卿占文云、

今月廿四日、申刻大地震、〇下、  
略、

廿八日、去廿四日大地震、伊勢國以外、鈴鹿山大石ユリ拔云

云、

〔管見記〕

永享五年正月廿四日、申刻地振也、

〔師鄉記〕

永享五年正月廿四日、今日酉刻有大地震、

〔如是院年代記〕

永享五年正月廿四日、大地震、

三月十七日辛未、京都地震稍、強シ、續デ數震フ、

永享三年、四年、五年

〔看聞御記〕

三月十七日、未初刻有大地震、〇申、  
酉刻又有地震、  
略、又地震、今日晝夜三四度也、有何事乎、

〔師鄉記〕

三月十七日、今日午刻有大地震、

〔管見記〕

三月十七日、抑未刻大地震以外也、被召有盛於仙洞、以四辻

宰相中將被尋仰、不知吉凶如何様申上候哉、尤可驚之、

〔滿濟准后日記〕

三月十七日、申初刻大地震、

四月四日、雨降晴不定如昨天、自日野中納言方以狀令申、

自明日地動御祈可令勤修云々、就度々地震御祈禱、自明日別可有御祈念候

御結願可爲來十七日候、以此旨同可有御下知醍醐寺之山、被仰下候、可得御

意也、恐々謹言、

卯月四日

五月、地天御祈、八字文殊護摩始行了、

十七日、自去五日勤修地震御祈八字文殊護摩、今晚結願、卷數以日野中納言

進之了、

同月二十一日乙亥、京都地震フ、

〔看聞御記〕

〔師鄉記〕

同月二十六日庚辰、京都地震稍、強シ、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

(滿濟准后日記)

廿六日、晴、今曉大地震、

同月二十七日辛巳、京都地震フ、

(看聞御記)

廿七日、晴、今曉地震、

同月二十八日壬午、京都地震フ、

(滿濟准后日記)

廿八日、少雨、自己初天晴、已半地震、小

四月二十三日丙午、京都地震フ、

(看聞御記)

四月廿三日、晴、午刻小地震、龍神動也、

(滿濟准后日記)

四月廿三日、午刻地震、今日兩度地震之由被仰、御對面之間地震了、御祈事如先々可申付、日野中納言可相觸方々云々、

五月二十一日癸酉、鎌倉強震アリ、

(鎌倉大日記)

永享五年五月廿一日、大地震、

(南朝記傳)

永享五年五月廿一日、午刻大地震、

同月二十二日甲戌、京都地震フ、

(滿濟准后日記)

五月廿二日、晴、今曉地震、

日野中納言來書到來、

今曉地震驚存候、就其御祈禱事、任例可申沙汰仕之由、今朝何申入了、自來廿五日可有御祈念候、御祈願來月三日吉日候、御齋禱御祈禱、自同日來月五日、可有御祈念候、重懸奉存候、旁御祈禱尤可然珍重候、同可有御下知滿濟之旨、可令得御慰給候也、恐々謹言、

五月廿二日

理性院僧正御坊

兼細

九月十五日甲午、京都地震フ、

(看聞御記)

九月十五日、(頭書) 今夜小地震、火神動也、

同月十六日乙未、相摸、陸奥、甲斐諸國、地大ニ震

ヒ、鎌倉、會津、被害夥シ、是日、京都モ強ク震ヘリ、

(看聞御記)

十六日、晴、今夜大地震兩度、帝尺動也、

十月廿六日條、抑關東有不思議之怪異、先大地震、堂舎顛倒、人多死、八幡宮、金燈燭燒失、又刀禰川道ニ流云々、凡四箇條有不思議、今一箇條不聞、去夏秋之間事也、

(滿濟准后日記)

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

九月十六日、晴、今夜子刻地震、小

(鎌倉大日記)

九月十六日、子刻大地震、夜中三十餘度、築地倒懸、廿日間不止地震、

(神明鏡)

永享五年九月十六日、大地震、鎌倉築地崩、極樂寺塔九輪落、惣唐物共多損、大山二王頭落、前代未聞也、

(喜連川列鑑)

永享五年九月十六日、夜大地震、山崩、築地悉ク顛倒、

(南朝記傳)

永享五年九月十六日、子刻又大地震、夜中三十餘度、其後廿日アマリ地震不止、○南方紀

(塔寺八幡宮略記長帳)

永享五年九月十六日、日本國大地震、相州大山仁王首震落、遙谷底入、凡神社佛閣、上天公卿民家至迄、家倒山崩、水塞谷埋、死者多、(此方)十時會津塔寺邑正八幡宮御宮殿廻廊拜殿寶藏華表、凡不殘震倒、○會津郡事雜考、會津土五考、並二同、

(妙法寺記) 小佐野木、

永享五年九月十五日、夜大地震、

(編年要略)

永享四年九月十六日、大地震、山崩、相州大山寺二王頭落他

所、

○妙法寺記、十五日ニ係ク、編年要略、前年ニ係ク、並ニ誤レリ、

同月十九日戊戌、是夜、京都地震フ、

(滿濟准后日記)

十九日、今夜地震、丑刻歟、

(薩戒記)

九月十九日、子終刻地震、

(看聞御記)

廿日、晴、今曉大雨、又地震、金翅鳥動也、

○御記、二十日ニ揚ケルハ、推歩ノ誤ナラン、

同月二十六日乙巳、是夜、京都地震フ、

(看聞御記)

廿六日、今夜又地震、帝尺動也、

十月二十七日丙子、京都地震強ク震フ、

(看聞御記)

十月廿七日、晴、未刻地震、大動、帝尺動也、

(滿濟准后日記)

十月廿七日、申半大地震、○中在方卿地動注進、

今月廿七日、未時大地震、○月行充符、金翅鳥所動○下略

同六年一月十六日乙未、鎌倉強震アリ、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

(神明鏡)  
永享六年寅正月十六日、夜大地震、  
(續本朝通鑑)  
永享六年正月乙未、鎌倉地大震、  
同月二十二日辛丑、京都地震フ、  
(看聞御記)  
永享六年正月廿二日、晴、早且小地震、  
(滿濟准后日記)  
永享六年正月廿二日、辰時地動、在方卿占文、  
今月廿二日、辰時大地震有音、  
(師卿記)  
永享六年正月廿二日、晴、巳刻地震、  
二月六日甲寅、是夜、京都地震フ、  
(滿濟准后日記)  
二月六日、晴、戌終歎地震、  
三月七日乙酉、京都地震フ、  
(看聞御記)  
三月七日、晴、朝小地震、  
五月二十九日乙巳、是夜、京都地震稍強シ、  
(滿濟准后日記)

五月廿九日、晴、丑初刻地動兩度、此邊ハ小動也、京邊以外大地動云々、在方卿勘進注左、  
今月廿八日、子刻大地震有音、略ス、  
○占文  
九月二十九日癸卯、京都地震フ、  
(看聞御記)  
九月廿九日、晴、今曉地震、  
十月二十六日己巳、京都地震フ、  
(滿濟准后日記)  
十月廿六日、晴、卯未刻地震、  
十二月一日甲辰、京都地震フ、  
(看聞御記)  
十二月一日、酉刻地震、  
(滿濟記)  
永享六年十二月朔日甲辰、申始刻地震、  
同月十三日丙辰、京都地震フ、  
(滿濟記)  
十二月、申終地震、  
同月十四日丁巳、是夜、京都地震フ、  
(看聞御記)

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

十二月十四日、戌刻小地震、  
(滿濟記)  
十二月十四日、戌始刻地震、  
同七年一月二十七日庚子、京都地震フ、  
(滿濟准后日記)  
永享七年正月廿七日、晴、地震有音、  
六月十三日癸丑、京都地震フ、  
(看聞御記)  
永享七年六月十三日、酉刻小地震、龍神動也、  
七月六日丙子、京都地震フ、  
(看聞御記)  
七月六日、晝小地震、火神動也、  
是月、京都地震強シ、  
(年代記殘編)  
永享七年七月、大地震、是始三年震、○後史後編、野史之ニ從フ、  
同八年六月十一日乙亥、京都地震フ、  
(看聞御記)  
永享八年六月十一日、晴、辰刻小地震、  
七月九日癸卯、陸奧國會津地震強シ、餘震三日ニ及ベリ、

永享六年、七年、八年、九年、十年

(滿濟塔寺八幡宮長帳)  
永享八年七月九日、申刻大地震初、日夜三日也、十六度動也、  
○會津郡雜考、會津土狂考、四家合考同、後繼之ニ從フ、  
十二月十九日庚辰、京都地震フ、  
(看聞御記)  
十二月十九日、晴、申刻地震、帝尺動也、  
同九年三月二十日庚戌、京都地震フ、  
(看聞御記)  
永享九年三月廿日、晴、朝地震、帝釋動也、  
同十年二月九日癸亥、京都地震フ、  
(看聞御記)  
永享十年二月九日、今夜子刻地震、  
三月十五日己亥、京都地震フ、  
(看聞御記)  
三月十五日、今曉地震、火神動也、  
六月五日戊午、京都地震フ、  
(看聞御記)  
六月五日、雨降、今曉地震、金翅鳥動也、  
十二月十八日戊辰、是夜、京都地震フ、



震災防調會報告第四十六號

甲

〔管見記〕

永享十年十二月十八日、丑刻許地震、

同月二十八日戌寅、是夜、京都地震稍強シ、

〔看聞御記〕

十二月廿八日、晴、夜子時大地震消肝、

同十二年九月十八日丁巳、陸奥國會津地強ク震

フ、

〔南朝記傳〕

九月十八日、大地震、○南方紀傳

〔會津舊事雜考〕

九月十八日、大地震、○會津土、其考同シ

嘉吉二年二月二十一日癸未、京都地震フ、

〔管見記〕

嘉吉二年正月廿一日、霧、辰刻地震、

〔南朝記傳〕

嘉吉二年春正月廿一日、大地震、○南方紀傳、東鑑同シ

〔東寺百舍文書〕

嘉吉二年壬戌正月廿九日、去廿一日地震御祈、昨日廿八日ヨリ可有始行由、奉書今日到來、來月四日可有結願云々、於鎮守一七日之間、百部仁王經會治

二月十四日丙午、京都地震フ、

〔管見記〕

二月十四日、晴、今晚地震、

十月二十日丁未、上野國地強ク震フ、

〔新選和漢合圖〕

嘉吉二年壬戌十月廿日、大地震、

同三年一月十一日丁卯、京都地二回震フ、

〔看聞御記〕

嘉吉三年正月十一日、今夜兩度地震、金翅鳥動也、

三月二十一日丁丑、京都地震フ、

〔管見記〕

嘉吉三年三月廿一日、未下刻地震、

六月二十日甲辰、京都地震強シ、

〔管見記〕

六月廿日、霧、巳時地震、頗消魂者也、○續本朝通鑑、續史愚抄、歷朝要紀之ニ從フ

〔康富記〕

嘉吉三年六月廿七日辛亥、晴、自是日於禁裏被始行御修法、是

去廿日大地震、賀安兩家之勘文、御慎之由申之間、爲彼此旁

御祈禱被行之、藏人權右中辨俊秀被奉行之、

十月一日壬午、京都地震フ、

〔看聞御記〕

同三年二月二十九日丁卯、京都地震フ、

〔師郷記〕

文安三年二月廿九日丁卯、晴、今日申刻地震、

同四年六月二十四日甲申、京都地震強ク震フ、

〔南朝記傳〕

文安四年六月廿四日、大地震、○南方紀傳同シ

同五年、諸國地震フ、

〔かな年代記〕

文安五年大水、○五月廿三日、地じん、○日詳、ナラズ、るされい、さきん、七月十九日

〔新選和漢合圖〕

文安五年戊辰、洪水、飢饉、地震、

〔會津舊事雜考〕

文安五、大地震、飢饉、疾疫、○會津土、其考同シ

寶徳元年四月十二日壬戌、山城、大和二國、地大

ニ震ヒ、京都、奈良、多ク其害ヲ被リ、餘震日ヲ涉

レリ、

〔康富記〕

文安六年○寶徳元年四月十二日、朝大地震事、處々破損事、付勘例事

十七日、地震御祈禱事、○以上二條、目録ナリ、本文ソノ記事ヲ述セリ、本

震災防調會報告第四十六號

甲

十月一日、晝地震、天王動也、

十一月八日己未、是夜、京都地震フ、

〔看聞御記〕

十一月八日、子刻小地震、火神動也、

〔管見記〕

十一月八日、亥刻地震、○續史愚抄、歷朝要紀之ニ從フ

文安元年四月二十七日丙午、是夜、京都地震強シ、

〔康富記〕

文安元年四月廿七日、雨、晴、今夜亥刻大地震、

〔歷朝要紀〕

○上、今年當甲子禮、况又天告變氣、地頻震動、谷微匪一須、恐懼旁多事、○下

文安元年九月十一日

十一月二十二日丁酉、是夜、京都地強ク震ヒ、餘

震十二月四日ニ及ベリ、

〔東寺執行日記〕

文安元年十一月廿二日、夜半ニ大地震事、一夜中二十七箇

度、十二月四日マデ動之、○歷朝要紀、續史愚抄、後鑑之ニ從フ

〔年代記殘編〕

文安元年十一月廿二日、夜大地震動、

寶德元年

四月十三日癸亥、陰晚雨下、今日於連々地震、十四日甲子、晴陰、吉田祭延引、

去十日以來、連日地動不休、嵯峨釋迦聖五大尊顛倒事、自室町殿被遣御使、被檢知云々、齋藤新左衛門尉歟、

神泉苑築地、東寺築地等破損事、被遣兩奉行、矢野長門入道被檢地云々、皆依地震儀也、

十五日乙丑、晴、今日又度々地震、

〔東寺執行日記〕

文安六年○寶德 四月十二日、辰刻大地震動テ、南大門乾角柱

サケテ落畢、南面築地東へ十一間クツル、北面八足左右七

八間クツレテ、蓋モ落也、惣而洛中洛外築地、淀大橋三間落、

桂橋二間落、大地破テ水出テ、嵯峨尺迦ノ御手落、同十八日

マテ晝夜ニ十七八度動也、

〔公卿補任〕

文安六年○寶德 四月十二日、大地震、

〔大乗院日記目録〕

文安六年○寶德 四月十二日、大地震、築地悉以崩、東寺大門垣

破損、

一三二

中所々築地無殘所、其後連日無止、而及十二日、

〔如是院年代記〕

寶德元年己巳、自四月十日、至六月廿五日大地震、處々築地

破、

〔南朝記傳〕

夏四月十二日ヨリ大地震、○南方紀

〔年代記殘編〕

夏中大地震動、洛中大家堂塔築地多倒傾落、是依八幡山裂、

〔東寺百合文書〕

神泉苑築地次第、寶德二年五月 日、一國ニ四丈八尺宛、

門ヨリ北、

管領千時島山殿、五月十

同大夫殿 一箇國

細川殿 三箇國

同讚岐殿 二箇國

同總州 一箇國

同淡路殿 一箇國

同阿波殿 半國

同和泉守護殿 半國

門ヨリ南、

武衛

〔康富記目録〕

四月十七日、地震御祈禱事、

〔紙園社記〕

左辨官 下紙園社

應七日間令轉讀仁王般若經事、

右日來天變昏冥、地震作害、多以疫癘之苦、因以飢饉之憂、非仰佛神之仁慈

者、伊致部部之厄難乎、權大納言兼太宰權帥藤原朝臣實雅宣、奉

勅於被社可轉讀仁王般若經、早滅七日之惡精、宜得衆人之延命、其施供料、依

例行之者、社宜承知、依宣行之、

文安六年六月十二日 大史小槻宿禰列

〔東寺百合文書〕

天璽井地妖御憤、室町殿御祈事、自來十四日一七箇日、可被抽懸念之由、隨持

僧并東寺及御門社中、可被觸仰之旨、被仰下候、此等趣可得御意候也、恐々謹

言、

九月十一日 廣橋 守光

〔大乗院日記目録〕

文安六年七月廿八日、改元寶德元年、依去年七月洪水、并今年地震疫病飢饉

也、

五月十二日辛卯、奈良地震強シ、

〔大乗院日記目録〕

五月十二日、大地震、

是夏對馬國地震フ、

〔對州編年略〕

寶德元年己巳、夏地震、

八月十二日庚申、京都地二回震フ、

〔康富記〕

八月十二日、庚申、晚并入夜地震、

同月十九日丁卯、京都地震フ、

〔康富記〕

十九日、丁卯、地震、

九月十一日戊子、是夜、京都地震フ、

〔康富記〕

九月十一日、戊子、今夜地震也、

同月十八日乙未、京都地震フ、

〔康富記〕

十八日、乙未、入夜雨下、地震、

十一月十五日庚申、是夜、京都地震フ、

〔康富記〕

十一月十五日、庚申、今夜地震、

同二年七月五日丁未、是夜、京都地震フ、

〔康富記〕

同二年七月五日、丁未、是夜、京都地震フ、

〔康富記〕

同二年七月五日、丁未、是夜、京都地震フ、

〔康富記〕

同二年七月五日、丁未、是夜、京都地震フ、

寶德二年、三年、享德元年、三年、康正元年

〔康宮記〕

寶德二年七月五日、丁、晴、今晚地震、夜半以後雨下、

同月二十七日己巳、京都地震フ、

〔康宮記〕

廿八日、庚、昨○二十、今○二十、地震、

同月二十八日庚午、京都地震フ、

〔康宮記〕

廿八日、庚、昨○廿、今○廿、地震、

同三年七月三日己亥、京都地震、震フ

〔康宮記〕

寶德三年七月三日、己、是日度々地震、

九月三日戊戌、是夕、京都地震フ、

〔康宮記〕

九月三日、戊、晴、今夕地震、

十一月十八日癸丑、是夜、京都地震フ、

〔康宮記〕

十一月十八日、丑、雨下、戌刻地震、入夜雨晴矣、

享德元年八月十三日癸酉、京都地震フ、

〔東寺執行日記〕

一三四

享德元年八月十三日、未刻大地震動、

同三年十一月二十三日庚午、上野國地強ク震フ、

〔新選和漢合圖〕

享德三年甲戌十一月廿三日、大地震、

十二月十日丁亥、相模國鎌倉、地強ク震フ、

〔南朝記傳〕

享德三年十二月十日、大地震、○南方紀、傳同ジ、

〔鎌倉大日記〕

享德三年十二月十日、大地震、

〔東榮鑑〕

寶德三年辛未十二月十日、大地震、  
○東榮鑑、寶德二年ハ誤レリ、

康正元年十二月二十九日庚午、京都強震アリ、

〔假名年代記〕

康正元年乙亥十二月晦日、夜大地しん、

〔南朝記傳〕

康正元年十二月晦日ノ夜、大地震、

〔新選和漢合圖朱書〕

康正元年乙亥十一月晦日、夜大地震、

○コノ地震、續本朝通鑑ニ二十八日ニ係ケンハ、何ニ據リシヲ知ラズ、和漢合圖朱書ノ十一月ニ作ルハ蓋非ナラン、

同二年十一月二十六日壬辰、京都地二回震フ、明日又震フ、

〔師鄉記〕

康正二年十一月廿六日壬辰、今日寅申刻兩度地震、

廿七日癸巳、戌刻地震、

〔東寺百合文書〕

天變地震、並南方凶徒退治御祈事、可抽精誠之由、可令下知滿寺給者、天氣如此、仍上啓如件、

康正二

十二月五日

左中辨經茂

謹上 東寺長者僧正御房

長祿二年閏一月三日壬辰、是夜、京都地震強シ、

〔長祿二年記〕

閏正月三日壬辰、丑時大地震、

二月十五日癸酉、京都地震強シ、

〔長祿二年記〕

二月十五日癸酉、未終歎大地震、

七月二十四日己酉、京都地震フ、

〔長祿二年記〕

七月廿四日己酉、未刻地震、

同三年一月十三日丁酉、京都地震フ、

康正二年、長祿二年、三年、寬正元年

一三五

〔碧山日錄〕

長祿三年正月十三日丁酉、午而地震、

寬正元年二月九日丁巳、京都地震強シ、是日、奈良モ震ヘリ、

〔碧山日錄〕

長祿四年○寬正元年二月九日丁巳、亥而地大震、

〔陰涼軒日錄〕

長祿四年○寬正元年二月九日、酉刻地震、

〔大乗院寺社雜事記〕

長祿四年○寬正元年二月九日、地振、金翅鳥動、

〔武家年代記裏書〕

長祿四年○寬正元年二、九、戌刻大地震、

〔天地根元圖〕

寬正元年二月、大地震、

同月十日戊午、奈良地震フ、

〔大乗院寺社雜事記〕

十日地振、龍神動、

〔大乗院寺社雜事記〕

同月十九日丁卯、奈良地震フ、

〔大乗院寺社雜事記〕

寛正元年

十九日、振動、

同月二十一日己巳、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

廿一日、地振、

五月二十五日辛丑、京都地震ク震フ、

〔武家年代記裏書〕

長祿四年○寛正元年五、廿五、午刻大地震、

〔祇園社記〕

明後日、十日於祇園社爲地震御祈禱、依勅可禱奉向奉幣使云々、任先例引令下知執行願符給之由、御氣色所候也恐々謹言、

六月九日

法印□□

祇園別當僧都御房

七月十八日壬辰、京都地震フ、

〔長祿四年記〕

七月十八日、地震午刻、

〔臥雲日伴錄〕

寛正元年七月十八日、今日又小地震、

八月七日辛亥、是夜、京都地震フ、

〔長祿四年記〕

八月七日、地震、戌刻、

同月十五日己未、京都地震フ、

一三七

〔長祿四年記〕

十五日、卯刻地震、

九月五日戊寅、是夜、京都地震フ、

〔長祿四年記〕

九月五日、地震、戌刻也、

同月二十四日丁酉、是夜、京都地震フ、

〔長祿四年記〕

廿四日、地震、少子

同月二十六日己亥、京都地震フ、

〔長祿四年記〕

廿六日、地振、辰刻、

閏九月二十三日丙寅、是夜、京都地震フ、

〔長祿四年記〕

閏九月廿三日、地震、戌刻、

同月二十四日丁卯、是夜、京都地震フ、

〔碧山日錄〕

閏九月廿四日丁卯、戌而地震、

同月二十六日己巳、京都地震フ、

〔長祿四年記〕

廿六日、地震、午刻、

十月六日戊寅、京都地震強シ、

〔長祿四年記〕

十月六日、大地震、午刻也、

同二年十一月三十日丙寅、京都地震フ、

〔續史愚抄〕

寛正二年十一月卅日丙寅、大地震、有陰陽寮勘文、管見記、

○史料編纂掛架殿ノ管見記、是年閏ケタリ、

同五年四月七日庚寅、京都地震強シ、

〔紀河原猿樂記〕前田侯

ヲ召テ御尋アリ、博士云、時節ノ廻リナリ、更ニ猿樂ノ故ナ

ラズト考申ニ付、次々能アリ、

同六年六月二日戊寅、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

寛正六年六月二日、地振、龍神振、

十月八日壬午、是夜、京都地震フ、

〔親元日記〕

寛正六年十月八日壬午、曇、夜地震、

文正元年閏二月十二日甲寅、是夜、京都地震フ、

〔後知足院記〕

寛正七年○文正元年閏二月十三日、去夜子刻許地震云々、

四月六日丁未、京都地震ク震フ、

〔後法興院記〕

文正元年四月六日、丁未、酉刻終有大地震、可恐、

〔大乘院寺社雜事記〕

文正元年四月六日、戌刻大地震動、天滿社石燈籠顛倒、糺御

社石燈籠同顛倒云々、

同月二十五日丙寅、是夜、京都地震フ、

〔後法興院記〕

廿五日丙寅、戌刻許地震、

同月二十六日丁卯、京都地震フ、

〔後法興院記〕

廿六日丁卯、自早且大風吹、時々小雨灑、午刻以後止、酉刻地

震、

九月二十二日辛卯、京都地震フ、

〔後法興院記〕

九月廿二日辛卯、晴、午刻地震、

文正元年 應仁元年、二年

十二月二十九日丙寅、是夜、京都地震フ、

〔後法興院記〕

十二月廿九日、亥刻地震、

〔かな年代記〕

文正元年丙戌十二月廿九日、大地震、

〔新選和漢合圖〕

文正元年丙戌十二月廿九日、大地震、

同月三十日丁卯、京都地震フ、

〔後法興院記〕

卅日丁卯、晴陰雪霰紛々風吹、辰刻地震、

應仁元年一月一日戊辰、奈良地震、震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

文正二年〇應仁元年正月一日、後夜時分ヨリ大雪、地震及度々、常山動云々、

七日、元日八幡御社振動、棟瓦落云々、

二月二十七日癸亥、是夜、京都、奈良地震フ、

〔後法興院記〕

應仁元年二月廿七日癸亥、及半更地大震、

〔大乘院寺社雜事記〕

應仁元年二月廿七日、夜地震、

六月二日丙申、京都地震フ、

〔後法興院記〕

六月二日丙申、未刻許地震、

九月二十日癸未、京都地震フ、

〔後法興院記〕

九月廿日癸未、午刻許地震、

同月二十二日乙酉、是夜、京都地震フ、

〔後法興院記〕

廿二日乙酉、戌刻終地震、

十一月八日庚午、京都地震フ、

〔後法興院記〕

十一月八日庚午、巳刻許地震、

十二月二十六日戊午、是夜、京都地震フ、

〔後法興院記〕

十二月廿六日戊午、丑刻許兩三箇度有動搖之儀、地震、

同二年一月二十日辛巳、是夜、京都地震フ、

〔後法興院記〕

應仁二年正月廿日辛巳、戌終地震、

二月六日丁酉、京都地震強シ、

〔後知足院記〕

應仁二年二月六日、去曉寅刻計數地大震、

五月五日甲子、京都地震フ、

〔後法興院記〕

五月五日甲子、申刻許地震、

六月二十一日己酉、京都地震フ、

〔後法興院記〕

六月廿一日己酉、午刻終地震、

十月十八日甲辰、是夜、京都地震フ、

〔後法興院記〕

十月十八日甲辰、亥刻地震、

〔碧山日錄〕

應仁二年十月十八日甲辰、亥而地震、

文明二年四月十八日丙寅、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

文明二年四月十八日、地震、

同三年一月七日庚辰、奈良地強ク震フ、是日、京都

モ亦震フ、明日奈良又震フ、

〔親長卿記〕

文明三年正月七日、晴、地震、

〔大乘院寺社雜事記〕

文明三年正月七日、大地震、後又小振、

八日、小地震兩度、

二月六日、正月七日就地震御祈禱御後書、去月晦日寺務ニ到來云々、學侶并七寺別當方、被仰遊之、

二月三十日癸酉、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

二月晦日、雨下、地振、

三月五日戊寅、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

三月五日、地振、

五月十四日丙戌、京都地震強シ、

〔親長卿記〕

五月十四日、雨下、今日地震大動也、

十七日、晴、地震、新大納言來、地震御祈禱、政顯公案御祈事申沙汰也、〇下

同月十七日己丑、京都又震フ、

〔親長卿記〕

十七日、晴、地震、

同七年一月二日壬子、是夜、京都地震フ、

〔親長卿記〕

文明七年正月二日、今日戌刻有地震、小動、

二月八日戊子、是夜、京都地強ク震フ、

文明七年、八年、九年、十一年

一四〇

〔親長卿記〕

二月八日、晴、入夜亥刻地震、大動、

〔如是院年代記〕

文明七年乙未二月八日、夜子刻許大地震、

四月十六日甲午、陸奥國會津、地震強シ、

〔塔寺八幡宮略記長帳〕

文明七年乙未四月十六日、大地震、○會津郡事  
雜考同シ

十月六日壬午、會津地震フ、

〔塔寺八幡宮略記長帳〕

十月六日、會津地震、

同八年四月十七日庚寅、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

文明八年四月十七日、小地震、

六月十六日戊子、是夜、京都地震フ、

〔親長卿記〕

文明八年六月十六日、晴、戌刻地震、鳴動三  
箇度

〔歷代皇紀〕

文明八年六月十六日、戌刻地震、鳴動三箇度、

同九年一月四日癸卯、京都地震フ、

〔親長卿記〕

文明九年正月四日、晴、今朝地震、

九月二十二日丙戌、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

文明九年九月廿二日、地振至、

十一月六日庚午、京都地震稍、強シ、

〔實隆公記〕

文明九年十一月六日庚午、晴、曉天有地震、動甚、

〔親長卿記〕

十一月六日、晴、寅刻有大地震、

〔長興記〕

文明九年十一月六日庚午、晴、曉天有地震、動甚、

同月九日癸酉、是夜、京都地震フ、

〔實隆公記〕

九日、雨降、戌下刻又有地動、

〔親長卿記〕

九日、雨下、亥刻許有地震、大動、

同十一年四月三日己丑、京都地震フ、

〔後法興院記〕

文明十一年、十三年、十四年、十六年

一四一

文明十一年四月三日、己卯刻地震、

九月三日丙辰、會津地強ク震ヒ、餘震十日ニ及ベ

リ、

〔塔寺八幡宮長帳續〕

文明十一年九月三日ヨリ十日迄、大地震、

同十三年二月三日戊申、京都地震フ、

〔後法興院記〕

文明十三年二月三日、戊午刻地震、

三月十八日壬辰、奈良地震フ、明夜又ニ回震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

文明十三年三月廿日、夜前地振兩度、大動也、龍神動也、

十八日、地振、同龍神動也、不吉也、

七月十七日庚寅、京都、奈良地震フ、

〔後法興院記〕

七月十七日、庚、陰時々小雨下、酉刻地震、自晚景甚雨下、終

夜猶不止、

〔大乘院寺社雜事記〕

七月十七日、地震兩度、龍神動、不吉也、

同十四年五月七日己亥、京都、奈良地震フ、

〔親長卿記〕

文明十四年五月七日、晴、今日有地震、

〔大乘院寺社雜事記〕

文明十四年五月七日、地振、金翅鳥動、不吉、

閏七月十六日癸丑、京都、奈良地各、震フ、

〔後法興院記〕

文明十四年閏七月十六日、丑、巳刻地震、

〔大乘院寺社雜事記〕

閏七月十六日、夜地振、龍神動、

十月二十九日甲午、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

十月廿九日、曉振動、龍神動也、不吉云々、

十二月三十日甲午、奈良地震強シ、

〔大乘院寺社雜事記〕

十二月卅日、大地振、火神動、卯刻、

同十六年三月一日戊子、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

文明十六年三月朔日、戊子、地振了、

八月二十日甲戌、奈良地ニ回震フ、

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

〔大乘院寺社雜事記〕

八月二十日、地振兩度、

同十七年十二月十二日己丑、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

文明十七年十二月十二日、地振、帝尺動、吉、但大兵亂、

同月十三日庚寅、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

十三日、地振、金シツ鳥動、不吉、大兵亂、

同十八年四月二十五日庚子、奈良地震強シ、是

日、京都モ震ヘリ、

〔後法興院記〕

文明十八年四月廿五日、庚巳刻地震、

〔大乘院寺社雜事記〕

文明十八年四月廿五日、朝大地震、雨下、

九月十日壬子、京都地震フ、

〔實際公記〕

文明十八年九月十日、壬子、晴、及曉天有地震、今夜當番、皆參

候黒后、

同月二十一日癸亥、是夜、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

九月廿一日、夜地震、

延徳元年一月二十三日壬午、是夜、京都地震フ、

明夜又震フ、

〔宣胤卿記〕

長享三年〇延徳元年正月廿四日、癸未、去夜地搖、

〔實際公記〕

長享三年〇延徳元年正月廿四日癸未、今夜地震有聲、昨夜亦如此

云々、但不及聞、

四月二十日戊申、陸奥國會津、地震強シ、

〔塔寺八幡宮長帳〕

延徳元年四月廿日、大地震、

七月二十二日戊寅、京都、奈良地震フ、京都稍、強

〔御湯殿上日記〕

延徳元年七月廿三日、夕たちして、夜部四の時分にちしんおひ

たぶしうゆる、せんもんまいる、

〔親長卿記〕

延徳元年七月廿二日、晴、入夜子刻有地震、大動

〔實際公記〕

號六十四第告報會查調防豫災震

甲

七月廿二日戊寅、天晴、入夜地震、頗有其聲、可恨々々、

〔大乘院寺社雜事記〕

延徳元年七月廿二日、夜地振、金翅鳥動、

同月二十五日辛巳、京都地震強シ、

〔親長卿記〕

廿五日、晴、今日地震大動、

八月六日壬辰、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

八月六日、地振、

同月七日癸巳、京都地震強シ、

〔御湯殿上日記〕

八月七日、ひるのちち大ちしんゆる、

〔後法興院記〕

延徳元年八月七日、癸巳、午刻大地震、兩度、

〔宣胤卿記〕

八月七日癸巳、晴、參内、今日月次和漢聯句御會也、御會半有

地震、

〔實際公記〕

八月七日癸巳、抑今日午刻地震有其聲、移時、諸人消肝了、

同三年二月二日己酉、京都、奈良地震フ、

〔後法興院記〕

延徳三年二月二日、酉刻終兩度地震、

〔大乘院寺社雜事記〕

延徳三年二月二日、地振、

八月十三日戊午、是夜、京都地震フ、

〔後法興院記〕

八月十四日戊午、去夜戌刻地震云々、

# 大日本地震史料

卷之四

自明應元年  
至文祿四年

明應元年五月二十六日乙未、京都地震強シ、

〔藤原軒日録〕

明應元年五月廿六日、夜將白頃、大地震、人皆驚動矣、

六月十六日乙未、陸奥國會津、地震ク震フ、

〔塔寺八幡宮長帳〕

明應元年六月十六日、大地震、又大雨降、○會津雜事雜考、  
會津土直考同シ、

同二年三月九日甲戌、京都地震フ、

〔後法興院記〕

明應二年三月九日甲戌、晴、陰風吹、早且雨瀧、申刻又酒、午

震、

六月二十六日己丑、陸奥國會津、地震ク震フ、

〔塔寺八幡宮長帳〕

延徳五年○明應癸丑林鐘廿六日、夜半天地震動シテ大雨降、

山野崩テ、耕作流失了、

〔塔寺八幡宮長帳〕

明應二年六月廿六日、夜大地震、別大雨洪水、○會津雜事雜考、  
會津土直考同シ、

十月二十三日甲申、是夜、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

明應二年十月廿三日蜜日甲申、戌刻地震、

同月三十日辛卯、京都、奈良地震強シ、

〔後法興院記〕

十月卅日、辛、今晚寅刻地大震四五度、又辰刻小動、

〔親長卿記〕

明應二年十月卅日、晴、去夜寅刻有地震事、大動及  
兩三度、

〔大乘院寺社雜事記〕

十月晦日、後夜以後至今日數ケ度、其内大地震以外事也、同

夜小地震、

〔大乘院日記目録〕

明應二年十月卅日、早朝大地震、

十一月二日癸巳、京都、奈良地震フ、奈良稍強シ、

〔後法興院記〕

十一月二日、癸丑刻地震、

〔大乘院寺社雜事記〕

十一月三日、夜前大地震、

同月三日甲午、是夜、京都地震フ、

〔後法興院記〕



明應二年、三年

一四六

三日、甲、北刻又地震、

同月十四日乙巳、奈良地震フ、

(大乘院寺社雜事記)

十四日、地震、

同月十五日丙午、京都、奈良地震フ、

(後法興院記)

十五日、丙、戌刻地震小動、

(大乘院寺社雜事記)

十五日、地震、

(延徳引付)

一地震御祈禱事、二七日間殊可抽精誠之由、可令下知神宮之旨、被仰下候、仍前上如件、尚如誠恐御首謹言、

十一月十八日

進上一日對一役殿

右少辨尚願事

十二月四日乙丑、京都地震フ、

(後法興院記)

十二月四日、乙、去曉地震、○去曉ハ今、曉ノ意ナリ、

同月二十四日乙酉、奈良地震、震フ、

(大乘院寺社雜事記)

十二月廿四日、地震及度々、

同三年一月七日丁酉、陸奥國會津、地震強シ、

(塔寺八幡宮長帳綴)

明應三年正月七日、大地震、

五月七日乙未、大和國地大ニ震ヒ、奈良東大寺、

興福寺、藥師寺、法花寺、西大寺ノ諸寺、及ヒ矢田

庄ノ民舍等、多ク頽損シ、餘震連續シテ十二月ニ

及ベリ、是日、京都モ數、震ヒ、餘動日ヲ涉レリ、

(後法興院記)

明應三年五月七日、乙、午刻地震兩三度、酉刻又地震、頗過例

式、

八日、丙、(頭卷)今日又地震

九日、酉、入夜子刻地震云々、

十日、戌、午刻地震、

早日令參内、月次和漢御會也、久我大納言申沙汰、酉刻終退

出、地震事種々有御物語、今度興福寺、東大寺築垣頽云々、

十一日、己、巳刻地震、

十三日、辛、晴、晴雷雨甚、深更地震云々、

去七日、地震勘文、尋問記之、

只今午時大地震、有音、

天地瑞祥志云、傍通、水神所動也、京房云、地動、邑有亂臣、

天子慎之、又云、地以夏動有音者、大將軍慎之、又云、五月

地動、不過廿五日有兵革、又云、水神所動者、無雨、江河枯

渴、又云、地動水神所動者、有大喪、

從二位有宣

(和長卿記)

明應三年七日、己、晴、午刻許有大地震、勘見之、弘決今日氏

宿也、如彼論則張氏室躬婁胃、此六宿日地震者、君崩、是火神

動也、無雨、江河枯渴、年不宜、天子大臣受殃云々、及夜時々

猶震動、尤有恐懼歟、

陰陽勘文、可尋記、

八日、丙、晴、至今日時々猶地震、但少而止、

凡今日之地震者、尤吉也、心角房女虛井猪斗畢、此九宿帝釋

動也、天下安穩富饒、風雨順時、百穀成就、天子大臣受福、百

姓有嘉、大吉也云々、今日動者常房宿、但若是為昨日之餘氣

者、難稱吉歟、更爲今日之分者、尤吉也、宿曜道勘文、可尋之、

後開述日地震吉、七日餘氣云々、

(親長卿記)

明應三年五月七日、晴、地震九動、

廿九日、晴、或人云、去七日地震、南都以外云々、東大寺并所

所築地等崩了、

(大乘院寺社雜事記)

明應三年五月七日、

一午刻大地震、以外事也、東大寺、興福寺、藥師寺、法花寺、西

大寺、矢田庄在々所々、破損損亡、珍事、大略及轉倒了、

八日

一地振猶以動了、又所崩云々、所々石塔共、悉以破損了、

九日

一地振猶以連續了、

十日

一地振連續、珍事也、

十一日

一地振連續、

十二日、地震、

十三日、地震、

一善賢僧來、大佛御頭邊、地振ニ破損了云々、

十四日、地震、

十五日、地震、

十六日、地震、

十七日、地震、

十八日、雨下、地震、

十九日、地震、

一樋坊御經參申、此間所々祈禱能向云々、

明應三年

一四七

明應三年

廿日、地震、  
 廿一日、大地震也、  
 一今日辻風、一乘院殿栗木也吹折了、昨日良家衆大般若在之、爲地震祈禱云々、  
 廿二日、地震、  
 廿三日、地震、  
 廿四日、地震、  
 廿五日、雨下、地震、  
 一於四恩院群參大般若在之云々、三ヶ日歟、地震祈禱也、  
 廿六日、雨下、地震、  
 廿七日、雨下、地震、  
 廿八日、雨下、地震、  
 一寺門祈禱、至今日、  
 六月一日、大雨下、地震、  
 二日、夜雨下、地震、  
 四日、地震、  
 五日、地震、  
 一大佛御胸、地震ニ損了、今日加修理云々、善賢僧以下罷上云々、  
 六日、地震、  
 八日、地震、

一四八

九日、地震、  
 十三日、地震、  
 十九日、地震、  
 廿三日、地震、  
 廿四日、地震、  
 廿六日、地震、  
 七月八日、地震、  
 十月三日、地震、  
 四日、地震、  
 五日、地震、  
 六日、地震、  
 七日、地震、  
 十三日、地震、  
 廿二日、地震、一日連々、  
 廿五日、地震、  
 十一月十七日、冬至、地震、  
 十二月七日、地震、  
 八日、地震、  
 十二日、夜地震、  
 〔大乘院日記目錄〕  
 明應三年五月七日大地震、是以後百ヶ日

〔かな年代記〕

甲寅三年五月七日、大地しん、○會津八幡宮長頼續編年小史、如是院年代記並ニ之ニ同ジ

同四年一月七日壬辰、京都、奈良地震フ、

〔御遊之の上日記〕

明應四年正月六日、あか月、ちしんぎうくしうゆる、天下遊りなをすべし、○七日、曉ナリ

〔後法興院記〕

明應四年正月七日、日辰、晴、今曉卯刻地震、

〔大乘院寺社雜事記〕

明應四年正月七日、地震、

同月十三日戊戌、是夜、京都、奈良地震フ、奈良ハ稍強シ、

〔後法興院記〕

十三日、戊戌、戌刻地震、

〔實際公記〕

明應四年正月十三日戊戌、天陰、入夜亥刻地震、其動莫大也、

〔御遊之の上日記〕

十三日、地しん、ひさしくゆる、

〔大乘院寺社雜事記〕

十三日、雪、夜大地震、

二月三日丁巳、是夜、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

二月三日、雨下、夜地震、

五月二十九日辛亥、京都地震フ、

〔後法興院記〕

五月廿九日、亥、巳刻地震、

八月十五日乙丑、京都地震フ、

〔御遊之の上日記〕

八月十五日、地しんゆる、

同五年閏二月十日戊子、京都地震フ、

〔後法興院記〕

明應五年閏二月十日、子、巳刻地震、

同六年五月十三日庚寅、攝津國地震フ、

〔高代寺日記〕後鑑所載

明應六年五月十三日、地震、

同月十八日丙戌、京都地震フ、

〔後法興院記〕

明應六年十月十八日、丙、今曉寅刻大地震、

今月十八日寅時大地震、傍通、金翅鳥所助也

天地瑞祥志云、傍通、金翅鳥所助也、天子慎之、又云、地動者

國有亂臣、人主不安、又云、地動者疾疫有喪、又云、地動者必

震災豫防會報告第四十六號

甲

四海戰有流血、又云、十月地動者、不過五十五日兵革起、

明應六年十月十八日 從二位有宣

同七年一月一日戊戌奈良地震フ、

(大乘院寺社雜事記)

明應七年正月二日條、元日地震在之、

同月五日壬寅奈良地震フ、

(大乘院寺社雜事記)

五日、自夜前雨下、早旦地震、

同月八日乙巳奈良地震兩度震フ、

(大乘院寺社雜事記)

八日、兩度地震、夜大雨下、

二月二十五日辛卯京都地震フ、

(御湯殿上日記)

明應七年二月廿五日、日るほごにちしんゆる、

六月十一日丙子京都地震強シ、餘震日ヲ重ヌ、

(御湯殿上日記)

六月十一日、ひるほごにおびたぶしくちしんゆる、すげなう

ゆりさいうする、

十二日、けふもちとちしんゆる、

十三日、けふもなへゆる、

十四日、ちしんをとゆる、

廿四日、ちしんゆる、

廿六日、ちしんゆる、

(後法興院記)

明應七年六月十一日、丙子、申刻大地震、

十二日、昨日地震勘文、尋問記之、

只今申時大地震、神所動也、

天地瑞祥志云、月行互宿者、水神所動也、京房云、地動、邑

有亂臣、天子慎之、又云、地動者 大將軍慎之、又云、夏

地動、老少多死、又云、六月地動、七十五日内有兵革、又云、

水神所動、無雨、江河枯竭、

明應七年六月十一日 從二位安倍朝臣有宣

十三日、寅、一昨日地震勘文、尋問在通記之、

今月十一日申時大地震、後通心宿、天

河圖秘微篇曰、地之動大臣之逆、内經曰、心宿地動、人君有

災、走獸健者衰、又云、地以六月動、百姓不安、人民勞苦、又

云、夏地動喪、

填星直日地動、世界不安、重威人疾病、

宗均曰、地震之異、陰階主也、

保乾圖曰、地動下度上無陽自燭則退臣誅過譏近盛、

明應七年六月十三日

在通

廿四日、巳、巳刻地震、

(親長卿記)

明應七年六月十一日、晴、地震大動

(實隆公記)

明應七年六月十一日、今日地震以外也、

(言國卿記)

明應七年六月十一日、八ッ下刻大地震、

十二日、天晴、小地震、

(かな年代記)

六月十一日、諸國大地しん○塔寺八幡宮長嶺、長享年後畿内兵亂記、

八月二十五日己丑伊勢、遠江、三河、駿河、甲斐、相

摸、伊豆諸國、地大ニ震ヒ、瀕海ノ國ハ海嘯ノ災

ヲ被レリ、是日、京都、奈良及ビ陸奥國會津モ強

ク震ヒ、餘動月ヲ重ネタリ、

(御湯殿上日記)

八月廿五日、けさちしんきうくしうゆる、

廿六日、けふもちしんちとゆる、

しよしやへの御いのりの事、奉行におほせいださる、

九月二日、こよひつよくゆる、

三日、ちしんけふもちとゆる、

十月一日、ちしんさいなくゆる、

五日、ちしんゆる、

廿日、ちしんにつきて、いともするよし、松ゆい御にはに

て申、やがて御きたあり、めでたし、

廿四日、ちしんにつきて、いつものやしうにはつ御きたあ

る、ぎをむまうにあるよじきこめて、御連歌御きた、宮

の御かた、ふじみ殿、そのほかあやのこふち、かんろじの中

納言、はく、御人す、しひつためさねじこう、はいかたの御い

はかに、いつものごとく御ともねうばうたちまでまいる、め

でたし、

閏十月十八日、よなかほごにちしんごごくしうゆる、

十一月三日、ありのぶ、てんちさいへん御きたふ百とつから

れて、御なで物くれう三百疋つけらる、

(實隆公記)

八月廿五日己丑、早期地震大動、五十年以來無如此事云々、

予出生以來、未知如此之事、

廿六日庚寅、抑地震御祈事、所々被仰之云々、奉行職事送一

通、

地震御祈事、自來廿九日一七ヶ日、殊可抽精誠之由、可令

震災豫防會報告第四十六號

甲

明應七年

一五二

下知神宮給之旨、天氣所候也、仍言上如件、尙顯誠恐謹言、

右少辨尙顯奉

八月廿五日

進上 侍從大納言殿

則相觸頭辨宜秀朝臣、其狀如此、

地震御祈事、自來廿九日、一七ケ日、殊可抽精誠之由、可令

下知

神宮給之旨、被仰下候也、謹言、

八月廿五日

實際

頭辨殿

○本條所祭ハ、御湯殿上日記廿八日ヨリト爲レ、實際公配ハ廿九日ヨリト爲  
ス、道初メ廿八日ニ定メタルヲ、廿九日ニ更メラレシナルベシ、

九月十一日甲辰、及晚滋野井一蓋張行有與、其間地震又共、

凡自去月廿五日至今日、每日不關地動、前代未聞事也、

十月十五日丁丑、晴、亥刻地震以外也、

廿七日己丑、陰、及晚雷鳴、地震、

廿八日庚寅、晴、曉天雷鳴雨降、地震、

閏十月十七日己酉、晴、抑丑下刻、日ノ曉天ナリ、地震甚、其動數

刻、消魂了、

廿八日庚申、晴、嚴寒甚、抑御祈事、近日被仰所々云々、御教

書廿七日到來、廿八日書一通、遺頭辨了、

天下安全、朝儀再興御祈事、從來月四日一七ケ日、殊可抽

精誠之由、可令下知神宮給之旨、天氣所候也、仍言上如

件、尙顯誠恐謹言、

後十月廿七日

進上 侍從大納言殿

追言上

天變地動及度々、殊可抽精誠之由、同可令下知給候

也、重誠恐謹言、

近日天變地動、及度々、其慎不輕、自來月四日一七ケ日、

別而抽精誠、可奉祈天下安全、朝儀再興之由、可令下知

神宮之旨、被仰下候也、謹言、

後十月廿七日

實際

頭辨殿

十一月七日、今夜又有地震、

(後法興院記)

八月廿五日、辰時大地震、去六月十一日地震一倍事也、尋

問勘文記之、

今月廿五日辰時大地震、傍通、水神

天地瑞祥志云、傍通、水神所動也、內經曰、秋地動、天子凶、

大臣受殃、又云、地動、其國有戰、民流亡、

又云、地動、天下疾病有大喪、又云、八月地動、六十日內兵

革起、

明應七年

一五三

明應七年八月廿五日

從二位有宣

廿六日、庚去夜曉鐘時分小地震、今日又午刻酉刻兩度小地震、

昨日地震以後、雷鳴事非其義、鳴動時分光物飛云々、其長、カ

ラカサノセイト云々、流星歟云々、同時天地震動、可恐々々、

從聖門有音信、昨日虚空鳴動云々、

今月廿五日、辰時大地震數、而無聲、傍通、火

洛書雄罪殺曰、地震、衆慮、盛、

尙書夏候說曰、地動大臣盛、將有爲、而不靜、兵數動、

春秋緯運斗樞云、地動亂並、羣臣厥施、佞者執政、

君子在野、小人在位、朝廷多賊、國受其咎也、

公羊傳云、臣專政、陰、而行陽、故地震、

穀梁傳云、地動大臣盛、軍將動有變、

夏氏云、地動民不安、搖擺流移、

又云、地動、數、殺、人、賊臣暴、

鴻範傳云、地動者臣不臣、下者大貴也、

明應七年八月廿六日

正三位在進

○忠宣王能同

廿七日辛卯、今日又兩度小地震、

廿八日壬辰、晚頭小地震、

九月一日甲午、及黃昏小地震、

三日丙申、去曉地震、

五日戊戌、今曉地震、

七日庚子、巳刻地震、

十一日甲辰、酉刻地震、

十三日丙午、晚景小地震、

十六日己酉、去曉小地震云々、

廿五日戊午、未刻地震、傳聞去月大地震之日、伊勢、參河、駿

河、伊豆大浪打寄、海邊三三十町之民屋悉溺水、數千人歿命、

其外牛馬類不知其數云々、前代未聞事也、

廿七日庚申、今曉卯刻并巳刻地震、昨日申刻地震云々、連日

儀、頗希代事歟、

十月二日甲子、午刻地震、

三日乙丑、午刻地震、

十五日丁丑、戌刻地震、

十八日庚辰、去夜亥刻地震云々、

閏十月十八日庚戌、去夜半更大地震、後有鳴動、

廿五日丁巳、世上儀種々有雜談、

十一月四日乙丑、今朝卯刻地震、

廿九日庚寅、今朝卯刻兩度地震、一昨日亥刻地震云々、連日

之儀、頗希代事也、

明應七年

一五四

〔親長卿記〕

八月廿五日、晴、巳刻許大地震、以外事也、○下

〔首國卿記〕

八月廿五日、天晴、五ツ時時分大地震、

廿六日、天晴、夜地震、

廿八日、七ツ時時分地震、夜半同有之、

廿九日、天晴、夜地震、

九月朔日、天晴、時々雨下、夜入地震、

二日、雨下、夜九ツ時時分地震、

四日、天晴、夜半至時地震、

六日、天晴、雨下、地震、

七日、天晴、夜地震、

八日、天晴、地震毎々、

十八日、雨下、地震、

十九日、天晴、晝夜之間、地震三度、

廿五日、天晴、地震、

廿六日、天晴、地震壹一度、夜二度、

十月朔日、天晴、地震毎々、

二日、天晴、地震毎々、

十五日、天晴、地震、

十七日、天晴、夜半大地震兩度、

〔和長卿記〕

明應七年八月廿五日、丑晴、辰刻有大地震、予生前無如此儀、

諸人恐怖、占文又以外也、○水神動

九月二日乙未、晴、至今夜迄、七日地震連續畢、

〔忠富王記〕

明應七年九月四日、晴陰不定、地震同前、

五日、地震又有動、千度板同前、猶以祈念無由斷者也、

六日、地震、

〔大乘院寺社雜事記〕

十月十九日、數日地震連續了、

廿八日、地震、雨下雷光、

一八月廿五日、大地震火神動、以來、日々夜々令連續者也、

〔內宮子良館記〕

今度大地震ノ高麗ニ、大湊ニハ家千間餘、人五千許流死ト

云々、其外伊勢島間ニ彼是一萬人許モ流死也、○明應七年戊午八月

明應七年戊午九月御祭、國崎御費三トリ之事、去八月廿五日

大地震ニ、大鹽ニ彼島家人大略流失、雖然於彼役人者、潔齊

ノ由申、御費持參之處、島中大略可爲不淨之間、奉備御饌

明應七年

ニハクミ申サズ、然則彼災斗可爲何之山處、去文明十一年己亥五月二日、依糠春屋喧嘩館自燒之時、有觸穢ノ事間、五月五日之御饌延引之時、彼御饌米ノ事、後日役人方へ請取申、於子良館内三方外三方其外役人御饌、如分當米ニテ分當ル、任其例、今度モ御饌與斗、後日ニ内外物忌其外方々ノ役人、悉請取之、一膳徳分ハ塵ノ與斗十二括リ、俵共ニ請取、又サ、イハ數百也、其後御禰宜方へモ如御饌之時、御長官三三ハ括リツ、一方ヨリ進、四五六七殿ハ二三方ヨリ十五ツ、進、〔妙法寺記〕

〔異本年代記拔萃〕

明應七年正月一日ヨリ殊ノ外、暖ニテ雪不降、道吉、八月廿五日辰刻ニ大地震動而、日本國中堂塔乃至諸家悉頽シ落、大海邊ハ皆々打浪ニ引レテ、伊豆浦へ悉死失ス、小川悉損失ス、

〔塔寺八幡宮長帳〕

明應七年八月廿五日、巳刻ニ大地震アリ、

〔塔寺八幡宮長帳續〕

明應七年八月廿五日、大地震、一日一夜三十度震、鎌倉由井澤海

水浦、大佛殿

〔鎌倉日記〕

明應七年六月十一日丙子、地震大動、諸國大震、遠江山崩地

裂成湖、名新居云、六月庚寅、代略記、江戸道中記、

〔遠江國風土記傳〕

濱名郡中之郷、村五、關ノ西北

荒井、舊非郷村宿驛之名、而海岸石碕之名也、此所南海非時波

洲渚大荒、故曰荒也、萬葉集高市連黑人歌曰、何所爾可船泊

爲良武安禮乃崎榜多味行之棚無小舟、後爲村號、舊荒井中荒

井等地、水没亡人家、古老曰、今荒井者古中之郷也、古荒井在

〔東榮鑑〕

明應七年八月廿五日、諸國大地震、遠州前坂ト板本ノ間ノ川

〔鎌倉日記〕

明應四年乙未八月十五日、大地震洪水、鎌倉由比濱海水到千度

檀、水勢大佛殿破堂舍屋、溺死人二百餘、

○大日記、コノ震災ヲ四年ニ掲ゲ、且八月十五日ト爲ス、並ニ誤レリ、

〔東榮鑑〕

明應七年八月廿五日、諸國大地震、遠州前坂ト板本ノ間ノ川

ニ津波入り、一里餘ノ波シトナル、是ヲ今切ト號ス、

〔續史愚抄〕

明應七年六月十一日丙子、地震大動、諸國大震、遠江山崩地

裂成湖、名新居云、六月庚寅、代略記、江戸道中記、

〔遠江國風土記傳〕

濱名郡中之郷、村五、關ノ西北

荒井、舊非郷村宿驛之名、而海岸石碕之名也、此所南海非時波

洲渚大荒、故曰荒也、萬葉集高市連黑人歌曰、何所爾可船泊

爲良武安禮乃崎榜多味行之棚無小舟、後爲村號、舊荒井中荒

井等地、水没亡人家、古老曰、今荒井者古中之郷也、古荒井在

〔東榮鑑〕

明應七年八月廿五日、諸國大地震、遠州前坂ト板本ノ間ノ川

ニ津波入り、一里餘ノ波シトナル、是ヲ今切ト號ス、

〔續史愚抄〕

明應七年六月十一日丙子、地震大動、諸國大震、遠江山崩地

裂成湖、名新居云、六月庚寅、代略記、江戸道中記、

〔遠江國風土記傳〕

濱名郡中之郷、村五、關ノ西北

荒井、舊非郷村宿驛之名、而海岸石碕之名也、此所南海非時波

洲渚大荒、故曰荒也、萬葉集高市連黑人歌曰、何所爾可船泊

明應七年

關東海中十二三町、應永十二年、文明七年、明應八年、及永正七年等有急波、破荒井崎、湖水變爲潮海矣、日簡崎千古、北山千古、舊荒井、中荒井、同時爲海、於今切所號本荒井、於松原中云中荒井也、礎石於今存焉、而後寶永四年十月四日、地震大波、關東十二町水沒、地形大變矣、昔時橋本新井各千戶鄉也ト云ヘリ、

驛家同所、水

關同所、新井成、住吉社、洲濱、

自關西至橋本新道八町、又西至舊白須賀八町、

荒之崎、萬葉集高市連黑人詠安禮乃崎、非宿、西起源太山、東對野澤驛家、長一里、廣或十町、或二三町、古驛路也、崎中

共有庄界之碑石、色赤紫、碑石合村越崎、南北相對、是昔二郡之界乎、呼是碑石、謂庄界之石、碑文如

寶永四年關司政愈書曰應永十二年大波破此崎、或曰、文明七

明應八年六月十日甚雨大風、潮海與湖水之間驛路沒、日簡

崎千戶水沒、在關東南十町、尾崎孫兵衛者之祖、鑿柑樹抄

存命矣、其孫今在橋本、永正七年八月廿七日、波濤中斷於驛

路、又被橋矣、從是以來、湖水變爲潮海、橋本驛家沒、置新

井宿也、寶永四年十月四日地震、舉波三度、各高一丈計、

崩關、潰家三百四十八戶、溺死二十一人、亡船四十八艘、波

所沒、因成舟航、是曰今切渡、驛宿曰新居、

○實錄スルニ、風土記傳、名所圖會、編年小史ノ今切洪波ヲ明年六月十日ニ揭タルハ、雖ニ誤レリ、看聞御記、子其館記等ニ參スルニ、是日、三河、伊勢、伊豆ノ海嘯ヲ記セリ、其同日タルヤ知ルベシ、且吳レテ明年六月十日トセバ、當時飛鳥非難、富士山ヲ遊覽シ、歸途ニアリ、會、遠江ヲ經、同日ハ小笠中山ニ在リ、十三日引馬野ニアリ、十五日沙見坂

遠江三河ノヲ越ニ、而シテ其記事、絶テ風雨地震ノコトニ及バズ、又沿道國境ニアリ、フ越ニ、而シテ其記事、絶テ風雨地震ノコトニ及バズ、又沿道

補災ノ狀ヲモ記サズ、亦以テ三番ノ誤釋ニ出デタルヲ知ルニ足レリ、東榮

繼ハ後人爲托ノ書ナレドモ、本年八月二十五日ニ揭ゲンハ、實ヲ得タリト

謂フベシ、

同八年一月四日甲子、京都地震フ、

(後法興院記)

明應八年正月五日、昨日酉刻地震、

同日十五日乙丑、京都、奈良地震フ、

(後法興院記)

五日乙丑、晴、晚頃地震、入夜小雨、

(實隆公記)

明應八年正月五日乙丑、申刻地震、

(大乘院寺社雜事記)

明應八年正月五日、地震、毎日様也、去年より連續了、

二月二十六日丙辰、京都地震フ、

明應七年、八年

海絶、五日吉田城主牧野祭酒之臣富永政愈爲關成、當難所誌置也、寶永四年十二月筆記、今切海關、與前驛中間海路一里、政愈曰、渡海二十七町計、(東海道名所圖會)

濱名湖

濱名ハ郡名也、國號遠江も此湖水に基也、一名猪鼻湖、又は遠湖ともいふ、略、又近きとし、蝶夢幻阿彌の遠津湖の記に、略、おほよそ湖の廣さ北に入事五里にあまり、東西四里にす、南はひたふるの大海也、山々三方にならび立りと云々、振振記に、むかしは此國名の水うみ有しが、後土御門院明應八年六月十日、洪水の變ありて、水うみとしは海とのあいだきれて、潮入て水うみはなくなるゆゑに、今切といふ也、濱名の橋は、水うみよりおへる川にかよりしゆゑ、今はなし、今切

御土御門院御宇明應八年六月十日、大地震して湖と潮とのあいだきれて、海とひとつに成て、入海となるこれを今切といふ、(編年小史)

明應八年六月十日

遠州橋本甚雨大風、海濱潮溢、濱居皆漂蕩、潮海之間、驛路亦

(後法興院記)

二月廿六日、丙申刻地震、

同月二十八日戊午、京都、奈良地震フ、奈良ハ稍

強シ、

(後法興院記)

廿八日、戊午、今朝卯刻地震、

(大乘院寺社雜事記)

二月廿八日、朝大地震、

四月八日丁酉、京都地三回震フ、

(實隆公記)

四月八日丁酉、陰、有地震、三度、有動聲、自乾、

同月十五日甲辰、京都地震フ、晚ニ及ビ又震フ、

(後法興院記)

四月十五日、甲辰、今朝辰刻地震、晚景又小地震、

六月四日癸巳、奈良地震フ、

(大乘院寺社雜事記)

六月四日、土用、天一天上、地振了、

七月十日戊辰、京都、奈良地震フ、京都ハ稍強シ、

(大乘院寺社雜事記)

一五六

一五七

震災防關查會報告第四十六號

甲

七月十日、地振、

(後法興院記)

七月十日、戊酉刻大地震、

同月十六日甲戌、京都、奈良又震フ、

(後法興院記)

十六日、甲酉刻地震、

(大乘院寺社雜事記)

十六日、地振、

八月六日甲午、京都地震フ、

(後法興院記)

八月六日、甲午、乘燭地震、

九月二十二日己卯、京都地震フ、

(後法興院記)

九月廿二日、己酉刻地震、

十二月二日丁亥、京都、奈良地震フ、京都稍強シ、

(後法興院記)

十二月二日、丁申刻大地震、

(大乘院寺社雜事記)

十二月二日、地震、

同月五日庚寅、京都地震フ、

(後法興院記)

五日、庚寅、今曉實刻地震、

同九年一月十二日丁卯、京都地震フ、

(後法興院記)

明應九年正月十二日、丁卯刻地震、

二月二十七日辛亥、京都、奈良地震フ、

(後法興院記)

二月廿七日、辛去曉大地震、○去曉ハ今、曉ノ意ナリ、

(大乘院寺社雜事記)

明應九年二月廿七日、雨下、夜地震、

四月二十三日丁未、京都地震フ、

(後法興院記)

四月廿三日、丁申刻地震、

六月四日丁亥、甲斐國地強ク震ヒ、餘震止マズ、

(妙法寺記)

明應九年六月四日、大地震動、上ノ午年○明應七年、八、大地震ニモ勝レタリ、惣而如何ナル日モ夜モ動事不絶、更ニ無限、

同月二十五日戊申、京都地震フ、

震災防關查會報告第四十六號

甲

(後法興院記)

六月廿五日、戊酉刻地震、

九月一日癸丑、是夜、京都地震フ、

(後法興院記)

九月小一日、癸戌刻地震、

文龜元年十一月六日辛巳、是夜、京都地震フ、

(後法興院記)

文龜元年十一月六日、辛戌刻地震、

十二月十日甲寅、越後國國府、地大ニ震ヒ、人家

多ク潰損セリ、

(宗祇終焉記)

なか月朔日頃、越後のこふに至りぬ、宗祇氣さんに入て、

年月へたよりぬる事など打かたらひ、都へのあらまじ候侍

る、おりしも比なの長路のつもりにや、身にわづらふ事あり

て、日敷になりぬ、○中かくてこはすの十日巳刻ばかりに、地

震おほきにして、まことに地をふりかへすにやとおほゆる

事、目にくたびといふかすをしらす、五日、六日うちつど

きぬ、人民おほくうせ、家々ころびたふれにしかば、旅宿た

にきたかならぬに、又おほはぬやどりをとめつゝ、年も暮

ぬ、

同三年四月十日丙午、京都地震フ、

(實隆公記)

文龜三年四月十日丙午、夕立雷鳴、有地震、

八月十九日癸丑、是ヨリ先、京都地震フ、是日、諸

社寺ニ祈禱ヲ命ジ給フ、

(實隆公記)

八月十九日、抑去六日薄蝕、其後二星合又地震等事、諸寺諸

社御祈事被相觸云々、

○コノ地震ノ日ハ、未ダ考フル所ナシ、

同月二十七日辛酉、京都地震フ、

(實隆公記)

廿七日、今日辰下刻有地震、

永正元年八月六日甲子、京都地震稍強シ、

(後法興院記)

永正元年八月六日、甲子、日没時分地震、

(二水記)

永正元年七月六日、甲子、未刻地震動、

永正元年、二年、三年

〔實隆公記〕

永正元年八月十五日癸酉、晴、  
卯有少辨送一通御祈事也、

就天變地妖、別而抽轉誠可令祈謝旨、可令下知神宮給由天氣所候也、仍言上  
如件、伊長誠恐謹言、

八月十五日

池上 侍從大納言殿、○實

右少辨伊長奉

同二年八月二十五日丁丑、京都地震フ、

〔實隆公記〕

永正二年八月廿五日丁丑、陰雨、及晚地震有聲、

同三年三月三日癸未、肥後國阿蘇山、鳴動シテ火  
石ヲ雨ラセリ、

〔八代日記〕

○肥後八代城主相賀家ノ日記ナリ、文明十六年ニ起リ、永祿九年ニ終ル、

永正三年丙三月三日、阿蘇御嶽御鳴動、火石アガル、

十月十七日癸亥、是夜、京都地震フ、

〔實隆公記〕

永正三年十月十七日癸亥、天晴、今夜地震、

十一月二十一日丙申、京都地震稍、強シ、

〔實隆公記〕

十一月廿一日丙申、雨降、辰刻地震以外甚、頗消魂、

一六〇

廿二日丁酉、抑地震事在通卿送之、續左、

今月廿一日辰時大地震、現度災所候、

天文錄云、地動、兵數動、京房云、地動、朝廷有亂臣、天

地災記云、十一月十二月地震、大凶、百日中兵起、又云、

地動、四海有兵喪、國家慎之、又云、江河枯渴、民人憂、內

經云、地動、邑都內有哭聲、周本記云、震者振也、陰不靜也、

臣欲侵君則地震、伯陽甫曰、地者主坤、坤宜安順、而還震

動者、上易政之象也、(吉カ) 潛潭曰、地動搖、臣下謀上、洛書

曰、土震不言、衆厄盛也、

永正三年十一月廿二日 刑部卿賀茂朝在誠

從二位賀茂朝在通

〔官胤卿記〕

永正三年十一月廿二日、晴、

今月廿一日巳時大地震在音、傍通者天

天地瑞祥志云、傍通、天王所動也、天子吉、大臣受福、又

云、天王所動、十一月地動者、百日之內兵革起、又云、冬地

動者天下疾疫、又云、冬地動者其國有陰謀、

永正三年十一月廿二日 從二位安陪朝臣有宣

同月二十三日戊戌、京都地震フ、

〔實隆公記〕

永正四年二月九日

從二位有宣

〔實隆公記〕

永正四年二月八日壬午、戌刻地震、大動也、天王動云々、後日

在通送占文、

〔官胤卿記〕

永正四年二月八日、晴、夜地搖、

十二日、晴、

地妖占文、御慎不輕、早抽丹誠可祈謝旨、可令下知神宮給

者、依天氣言上如件、伊長誠恐頓首謹言、

二月十二日

右少辨伊長奉

進上中御門大納言殿

伊長御祈奉行也、妖ハ搖可然歟常事也、又者ノ字腋(寄テ書

事不可然、先年令不審之處、父黃門元長卿云、故入道親長草案

如然云々、元長卿五位職事貫首時不然、父親長卿立副諷諫、

今更何如此哉、馳筆書置草案、不足信用者歟、只任道理歟、

地搖占文、御慎不輕、早抽丹誠可祈謝旨、可令下知神宮

給之由、被仰下候也、謹言、

二月十二日

頭辨殿 尙顯朝臣、神宮奉行也、

〔北肥職志〕

十一月廿三日戊戌、晴、未明有地震、小動也、

閏十一月二十九日甲戌、京都地震フ、

〔實隆公記〕

閏十一月廿九日甲戌、晴、雪積、地震、占文後日三日送之、

今月廿九日寅時大地震、傍通女宿、天

占文曰、冬地動、人主有兵喪、又云、地動、國有亂臣、

天地瑞祥志云、地動大臣盛、軍將有變、

宋均云、佞者執政、君子在野、小人在位、朝廷多賊、受其咎、

永正三年閏十一月廿九日 刑部卿賀茂朝在誠

從二位賀茂朝在通

同四年二月八日壬午、肥後國地震強ク震ヒ、餘動月

ヲ越ユ、是夜、京都モ亦震ヘリ、

〔尙通公記〕

永正四年二月八日、壬午、夜亥刻地震、

十四日、戌時、時々小雨洒、有宜卿去地震勘文等進上之、

今月八日戌時大地震、月行非宿者、

天地瑞祥志云、月行非宿、天王所動也、又云、天王所動者、

天子吉、大臣受福、天鏡經云、春地動者、必其國有陰謀、又

云、春地動者、天下疾疫事、

永正三年、四年

一六一



永正四年二月八日ヨリ、三月十日迄、大地震不止、  
四月七日庚辰、京都地震フ、

(尙通公記)  
四月七日、庚辰、雨下、地震、

同五年八月七日癸酉、京都地震フ、

(尙通公記)

永正五年八月七日、癸酉、去曉卯刻有地震、

(實隆公記)

永正五年八月七日癸酉、晴、未明地震、

地震古文、在重朝臣送之、續左、

今月七日寅時地震、傍通、猶、神所動也。

天地瑞祥志云、地動、大臣盛、軍將有變、天災記云、地動、四

海有兵變、國家憤之、古文曰、地動、國有亂臣、內經曰、八月

地動、六十日內兵起、又云、地動、邑都內有哭聲、周本紀云、

震者振也、陰不靜也、臣欲侵君則地震、又云、地動兵數起、

永正五年八月七日

圖書頭賀茂朝在重  
從二位賀茂朝□□

同六年三月七日己亥、京都地震フ、

(實隆公記)

永正六年三月七日己亥、晴、入夜雷鳴、地震、在重朝臣來、以  
外天變並地震古文等持來、御祈抽丹誠之由、相語之、

十六日戊申、雨降、地震古文、在重朝臣持參之、近日天變地妖  
連續、所驚入也、彼古文等續之、在典、○本書、占  
文缺ク、

四月九日庚午、京都地震フ、

(實隆公記)

四月九日庚午、今日有地震、古文可尋、

同七年八月八日壬辰、攝津、河内二國、地大ニ震

ヒ、四天王寺ノ石華表崩レ、藤井寺潰レタリ、山

城、大和兩國モ亦強ク震ヒ又、

(尙通公記)

永正七年八月八日、甲晴、曉大地震兩三度、驚入事也、

今月八日寅時大地震、傍通、天王所動也。

天地瑞祥志云、傍通、天王所動也、京房云、天王所動者天子

吉、大臣受福、天鏡經云、地動有音、必其國有陰謀、又云、地

動有音、六十日內兵革起戰競、又云、地動有音、天下疾疫

大喪事、

永正七年八月八日

從二位安倍朝臣有宣  
八月九日、乙晴、今朝猶地動、

(實隆公記)

永正七年八月八日壬辰、晴、今曉大地震有聲、頗大動數ケ度、

以外事也、古文可尋之、

(拾芥記)

永正七年八月七日、夜寅刻○寅刻ハ當今ノ略、午前二時ニ當ル、即翌曉

ナリ、他書七日ニ係ルモノハ、蓋本寺ノ誤ラ

ナリ、大地震、天王寺○攝津廿一社○不悉顛倒云々、可謂佛法

破滅之時者乎、

(古文書類纂)

○飛騨國青城郡細江村齋樂寺所有寫本大般若奥書、

于時永正七年庚午八月、大和、山城大風大地震仕、天王寺石

鳥居ユリ崩レ、同藤井寺○河内ノ本堂忽ニクツレヌ、前代未

聞ノ世間ノサタナリ、即時ニ旦那鳥居、同藤井寺モ造立候、

(多聞院日記略)

天正十四年正月八日條、永正七年庚子八月八日刻大地震、

所々破損、天王寺○攝津石ノ鳥居崩、藤井寺○河内モクツル、同

數日ユリテ、九月廿九日五夜ノ半ヨリ、東風大雨、奈良中方

方大破ニ合ト、舊記ニ在之、心細キ者也、

(長享年後畿内兵亂記)

永正七年八月八日、大地震、天王寺石鳥居、河内堂塔崩裂、人

民多死、

(年代記抄節)

永正七年八月七日、夜大地震、天王寺石鳥居崩ル、浦々高鹽

充滿、波花人家損失云々、○異本年代

(高代寺日記)

永正七年八月七日、大震、○かな年代記、塔寺八幡宮長

帳續、會津舊事雜考、並ニ同ジ、

(新選和漢合圖)

永正七年庚午八月七日、大地震、堂舍破、

(續史愚抄)

永正七年八月十日甲午、被仰地震及二星合御所於神宮、他社

寺同、可爲七ケ日者、時元記、

永正七年ノ八月七日ノ夜、大地震、ヲビタマシクシテ、國々

堂舍佛閣顛倒シ、天王寺ノ石鳥居モタラレケリ、其地震七十

餘日不止、

(重編應仁記)

今茲永正七年ノ秋八月七日ノ夜、大地震夥シ、其レヨリ以後

七十餘日震動猶止マザリケレバ、國々ノ堂社佛院、大度民屋

顛倒スル事、其數ヲ不知多カリケルニ、此時天王寺ノ石ノ鳥

居、モ倒レニケリ、

(盛衰通記)

水正七年

永正七年八月七日、天下一統大地震シケリ、  
〔中古日本治亂記〕

永正七年、天下一統ニ大地震シテ、堂塔佛閣民屋ニ至ルマ  
デ、悉ク顛倒シテ無恙ハ希ナリケリ、故ニ棟折梁落テ壓死ス  
ル人、數ヲ不知、近年ハ打續、諸國一同ニ動亂シ、兵火ノ爲メ  
ニ家屋ヲ被燒、適々殘ル屋室ハ地震大風ニ被シ破、人多ク戰  
死シ、或ハ餓死疫癘ニ死スルノミナラズ、今又地震ニ被打  
殺、洪水ニ漂溺シテ命ヲ殞ス人幾千萬ゾヤ、然ルニ能人ノ種  
毛繼キズ、又殘ル人家モアル事ヨト、今更驚ク計ナリ、  
〔參考〕

〔續津志〕〇東

四天王寺、天王寺村、山城院、一名三津寺、又名難波大寺、又稱法華園、又名敬  
田院、北四道門標、扇曰釋迦如來轉法輪所當極樂土、東門中心銀木  
宏村、歲久朽頽、永仁二年、罹火、奉  
救主新當寺、以石新之、高二丈五尺、

同月二十四日戊申、京都地震、震フ、

〔荷通公記〕

廿四日庚申、晴、及晚地夜又地震、

〔實隆公記〕

廿四日戊申、晴、地震三度、入夜又動、以外也、

同月二十七日辛亥、是日ヨリ明日ニ涉リ海嘯、遠

一六四

江國荒井崎ヲ破リ、潮流濱名湖ニ通ズ、世ニ之ヲ  
今切トイフ、

〔遠江國風土記傳〕

濱名郡中之郷、北十町、西ノ四、  
新井、本字荒井、古歌  
詠安禮乃崎、

荒井、舊非郷村、宿驛之名、而海岸石碕之名也、此所南海非時  
波、洲渚大荒、故曰荒也、萬葉集高市連黑人歌曰、何所爾可船  
舶爲良武安禮乃崎、榜多味行之棚無小舟、後爲村號、舊荒井、  
中荒井等地、水没亡人家、古老曰、今荒井者古中之郷也、古荒  
井在關東海中二十三町、應永十二年、文明七年、明應七年、及  
永正七年、等有急波、破荒井崎、湖水變爲湖海矣、日備崎、千古  
北山、千古荒井、中荒井同時爲海、於今切所號本荒井、於松  
原中云中荒井也、碕石於今存焉、而後實永四年十月四日地震  
大波、關東十二町水没、地形大變矣、昔時橋本、新井各千戶郷  
也ト云ヘリ、

驛家同所、

關同所、

新井成、

住吉社、在自  
洲濱、

自關西至橋本界新道八町、又西至舊白須賀界八町、荒之崎、  
萬葉集高市連黑人詠安禮乃崎、非新西起源太山、東對舞澤驛  
家、長一里、廣或十町、或二三町、有古驛路也、崎中央有莊塀

之碑石、〔與カ〕赤赤、碑石合村越崎南北相對、是昔二郡之界乎、呼是碑  
石謂庄界之石、〔與カ〕有若無、

實永四年關可政愈書曰、應永十二年、大波破此崎、〔或カ〕或曰、文明  
八明應八年六月十日甚雨大風、潮海與湖水之間驛路没、日  
備崎千戶水没、〔在關東南十町許白洲、  
源住吉八王子之驛間、尾崎孫兵衛者之祖、繫柑  
樹杪存命矣、其孫今在橋本、永正七年八月廿七日、波濤中  
斷於驛路、又破橋矣、從是以來、湖水變爲湖海、橋本驛家  
没、置新井宿也、實永四年十月四日地震、舉波三度、各高一  
丈許、崩潰潰家三百四十八戶、溺死二十一人、亡船四十八  
艘、渡海絕、五日吉田城主牧野祭酒之臣富永政愈爲關成、  
當難所誌置也、實永四年十二月雜記、

今切海關與前驛中間、海路一里、政愈曰、渡海二十七町計、  
三箇日、〔舊名美多、後云中之  
郷、處是以後三箇日、

驛家、西至本坂一里十五町、東至引佐山一里餘、按續日本  
後紀曰、雖 淳和天皇長十年猪鼻驛廢更令興復云、後小  
松天皇應永十二年、後土御門天皇文明七年、明應八年、後  
柏原天皇永正七年等有急波、湖水變爲湖海、蓋當此時猪鼻驛  
水没、古道廢、而新以英多郷中三箇日爲驛家乎、俗以新井宿  
曰猪鼻者非也、  
字志、蓋三百七十三石三升三合、

永正七年

一六五

舊地水没、而百姓移居高平之處、猪鼻湖中碕石存、  
大崎、

大崎與館山相對之、海中一里、古老曰、昔細江之橋場也、本  
坂道通猪鼻驛之橋場也、故濱名橋有二所、橋本與大崎也、  
猪鼻、岩與下尾奈相對、追戶、渡凡三十步、自追戶北、猪鼻  
湖也、東、號細江、

橋本郷、村三、關ノ正四十五町、湖水與湖海之間有洲崎、昔  
八通驛、八通驛、驛家、湖水入海所渡橋本橋、故曰橋本、  
敷智郡、〇中

所以號敷智者淵也、〔細江之水爲淵、  
故號敷智乎、

昔廻澤與橋本之間、陸地驛路也、半途有莊塀、石、石與村  
越、崎南北相對、是濱名與淵二郡之界歟、界內有村、號  
田、赤坂、柴江、舊荒井、應永十二年、明應八年、永正七年等  
有大波、斷驛路、併郷村水没爲海、故二郡之舊地大變矣、

〔重編應仁記〕

永正七年八月廿七日、同廿八日ニ遠州ノ海邊夥ク波打來  
テ、數千ノ在家ヲ流シ捨テ、死亡スルモノ數ヲ不知、陸地  
三十餘町、悉ク海ト成テ、旅人俄ニ船ヲ設テ往行ス、其レヨリ  
此所ヲ今切ノ渡リト名付ケリ、誠ニ亂世末代ト云ナガラ、  
類稀ナル災變也、  
〔足利季世記〕

永正七年八年

永正七年八月廿七日、廿八日兩日ノ間ニ、遠江國エ大浪オビ  
タマシク來リ、陸地忽ニ海トナル、今ノ今切ノ渡ト申ハ是  
也、○續本朝通鑑  
略之ニ從テ、

〔高代寺日記〕

永正七年八月廿七日、遠州今切崩ル、

〔丙辰紀行〕

遠州荒井の濱より奥の山五里ばかり海となりて、大船も出  
入事、むかしは山につぶきたる陸地なりしが、中頃山よりほ  
らの貝おびたどしくぬけ出で、海へ入ける、其跡かくの如く  
海となりて、今切と名づくるよし、古老いひ傳たり、

〔東海道名所圖會〕

今切

後土御門院御宇明應七年六月十日、大地震して、湖と潮との  
あいだきれて海とひとつに成て入海となる、これを今切と  
いふ、其後

後柏原院御宇永正七年八月廿七日、螺の貝出で山崩れ川埋  
もれ、舞坂の原を破り、深淵となる、又其後元祿年中、地震津  
濤ありて、海上あらく風強くして波高く、渡船の災となれ  
ば、寶永年中、官家より有司來り、今切の波頭に數萬の杭を  
打て、逆流をとどめ、又舞坂の方より左へ海中半道の間、波

戸を築きて、渡船の風波を穩にし、ゆきまをとどめず、自由  
ならしむ、

○今切ノ稱、其起リ詳ナラズ、東海道名所圖會ハ明應中ニ、重編應仁記足  
利季世記ハ並ニ永正中ト爲ス、紀行ノ諸書ヲ檢スルニ、亦明應ナシ、蓋今  
切ノ名ニ據テ之ヲ考レバ、明應七年荒井崩壞レ、今亦陸地没ス、固テ其書  
ヲ對ヘテ今切ト云シニ似タリ、後考テ俟ツ、

〔續本朝通鑑〕

永正七年八月壬子、○廿遠江國山泉涌出、螺貝抽起、波浪漲

溢、陸地穿破而爲海、號今切渡、俗謂地裂是也、

〔野史〕

永正七年六月二十八日、遠江山崩水涌螺貝出、濱名橋壞、陸

地爲海、是曰今切渡、實錄、年代略記、或

○コノ二書及ビ東海道名所圖會、丙辰紀行、並ニ山崩レ螺出ル等ノ事ヲ載  
セタルモ、別ニ微スベキ者ナシ、

同八年一月一日癸丑、京都地震フ、

〔實隆公記〕

永正八年十二月晦日壬子、晴、曉鐘後有地震、

二月二十一日壬寅、是夜、京都地震フ、

〔實隆公記〕

二月廿一日壬寅、今夜有地震、

四月十七日丁酉、京都地震フ、

〔實隆公記〕

四月十七日丁酉、天晴、午前梳髮、此間有地震、

七月四日壬子、是夜、京都地震フ、

〔實隆公記〕

七月四日壬子、夜有地震、

八月七日乙酉、上野國地強ク震フ、

〔新選和漢合圖〕

永正八年辛未八月七日、大地震、

○此地震、他書ニ見ル所ナシ、

十一月二日己酉、是夜、京都地震フ、

〔實隆公記〕

十一月二日己酉、天晴、亥下刻地震、自乾方有聲、

同九年二月八日甲申、京都地震フ、

〔續本朝通鑑〕

永正九年二月甲申、大地震十餘度、

○他書所見ナシ、何ニ據リタルヲ知ラズ、

六月九日辛亥、是夜、京都地強ク震ヒ、餘動アリ、

〔公卿補任〕

永正九年六月九日、地震、

〔實隆公記〕

永正九年六月九日辛亥、晴、入夜地震大動、頗久、

〔荷通公記〕

永正九年六月十日、壬子、昨夜地動七ケ度、今朝又一度、言語

道斷也、有宣卿勘文如此、

今月九日亥時大地震、月在互宿、水

天地瑞祥志云、月行互宿者、水神所動也、

京房云、地動者邑有亂臣、天子慎之、又云、地動者□□□□

□□、大將軍慎之、又云、夏地動者天下病事、少老多死、内

經曰、六月地動者、七十五日内兵革起、民流亡、又云、水神

所動者、無雨、江河枯竭、

永正九年六月十日、從二位安陪朝臣有宣

今月九日亥時大地震、小動及度々、傍通

天文要錄云、夏地動、人生有喪、(主カ)内經云、六月地動、七十

五日内兵起、京房易妖占云、地動、教令從臣下出、必有流血

飢、天地瑞祥志云、氏宿動、天子凶、大臣受殃、又云、氏

動、山崩木落、惡風暴起、雹傷禾稼、又云、大動以大因、小動

以小因、穀梁傳云、地動、大臣盛、軍將動有變、

永正九年六月十日

左馬權頭在富

陰陽頭 在重

永正八年、九年

一六六

一六七

永正九年、十年、十一年

〔拾芥記〕

永正九年六月九日、亥刻大地震、賀家火神動、安家水神動、七十五日內兵亂云云、條々凶也、

〔かな年代記〕

壬申九年六月、大地しん、○和漢合運、編年小史同、

〔塔寺八幡宮長帳續〕

永正九年六月六日、大地震、○正本長帳ニナシ、

〔請符集〕

豐受大神宮神主

依御教書注述、地妖地禁中惟異御儀御祈之事、

右得去月十八日御教書兩通、並今日二日祭主下知、同七日宮司告狀、地妖連續大矣、可爲御祈之由、大禁中怪異、御儀不釋、別抽續誠可令祈禱之旨、謹所請如件者、任被御下旨、一七箇日、禰宜等一同、玉體安穩、天下泰平之由、奉致懇祈者也、仍書上如件、以解、

永正九年七月十三日

大内人正六位上度會神主久吉上

- 禰宜正五位下度會神主是久
- 禰宜從五位上度會神主朝保
- 禰宜從五位上度會神主朝久
- 禰宜從五位上度會神主常清
- 禰宜從五位上度會神主常榮
- 禰宜從五位上度會神主貞佳
- 禰宜從五位上度會神主朝繁
- 禰宜從五位上度會神主忠久
- 禰宜從五位上度會神主房久

一六八

禰宜從五位上度會神主常誠

〔續史愚抄〕  
六月十八日庚申、地妖、掃敷、但地震、連綿、及宮中怪異等事、於神宮有御祈、他亦同○時元

同月十日壬子、是夜、京都地震フ、

〔尙通公記〕

十一日、癸晴、昨夜又有地動、

同月十三日乙卯、京都地震フ、

〔尙通公記〕

十三日、卯晴、午以後小雨濺、小雷鳴、今日亦地動及度々、

同月二十九日辛未、京都地震フ、

〔尙通公記〕

廿九日、辛晴、昨晚ハ去曉トイフガ、未晴、昨晚如ク、今曉ノコトナリ、地動太、

同十年十二月八日壬寅、京都強震アリ、

〔續本朝通鑑〕

永正十年十二月乙未朔、壬寅、大地震、

○コノ地震、他書ニ見エズ、何ニ據レルヲ知ラズ、

同十一年四月二十四日丁巳、京都強震アリ、

〔年代記抄節〕

永正十一年四月廿四日、巳刻大地震、○異本年代記同、

八月二十五日乙卯、京都地震強シ、

〔公卿補任〕

永正十一年八月廿五日、地震、

〔年代記抄節〕

永正十一年八月廿五日、巳刻大地震、○異本年代記抄節、後繼所載永祿年代記同、

〔祇園社記〕

天變地妖御祈事、殊可敬抽續誠候由、所被仰下也、仍執途如件、

永正十一年九月五日

對馬守判○英

近江守判

〔祇園執行御房〕

同十三年三月二日癸未、京都強震アリ、

〔年代記抄節〕

永正十三年三月二日、卯刻大地震、

七月十二日壬辰、甲斐國地震、震フ、

〔妙法寺記〕

此年○永正七月十二日、未刻震動致候、明ル十三日迄九度震動ス、

同十四年五月十九日甲午、京都地震フ、

〔續本朝通鑑〕

永正十四年五月甲午、大地震、

永正十一年、十三年、十四年、十六年、十七年

一六九

○他書ニ所見ナシ、

六月二十日甲子、陸奥國會津、強震アリ、

〔會津土直考〕

六月廿日、大震動、○八幡宮長帳續同、會津郡事雜考廿八日ニ作ルハ、非ナリ、

九月九日壬午、是夜、京都強震アリ、

〔年代記抄節〕

九月九日、夜半大地震、

同十六年三月十八日壬子、京都強震アリ、

〔尙通公記〕

永正十六年三月十八日、去夜大地震、

廿三日、地震勘文、今日進上之間、即記之、

今月十八日卯時大地震、月行豆宿、水

天地瑞祥志云、月行豆宿、水神所動也、京房云、地動、邑有

亂臣、天子慎之、又云、地動者大將軍慎之、又云、三月地動

者、不過一旬兵革起、又云、春地動者、疾病有大喪、

永正十六年三月十八日

王御四  
從五位有春

〔異本年代記〕

永正十六年三月十八日、卯刻大地震、

同十七年三月七日乙未、京都地震フ、

〔尙通公記〕